289
7
289-R127-3ウ
1200500732342

庫文

陽山頼

上田庄三郎著

始

289
R127
3

青年教師文庫

賴山陽

上田庄三郎著

禁安ク—1057
991
228 ~~918~~

前書き

謙遜はもとより美徳である。昔から日本人は謙遜であつた。しかし、たとへば豐太閤とナポレオンとの人物を比較するとき、それが自分たちの祖先であるといふことだけで、豐太閤を過小評價するといふやうなことは、たんに謙遜として置くことはできない。わが國では、和製ペスタロッチとか、和製ビスマークとかいはれるやうに、ナポレオンの偉大さを借用して豐太閤を評價したり、ネルソンの魅力を援用して東郷元帥を形容したりするのが通例であつた。

これはおそらく、不知不識の間に、黒船來このかた、舶來の威力に眩惑し、日本的であることはそれだけで小さく、世界的であることはそれだけで大きく評價するといふいはば植民地的な考へ方にならされたためであらう。

かうした長い間の、思考方法の借家住居は、なによりも、われわれ自身を卑屈にし退化させるものであつた。同じことなら豐太閤の尺度をもつてナポレオンを批評し、東郷元帥を原器としてネルソンを量るべきであり、豐太閤や東郷元帥こそ世界的英雄であると考へることが、むしろわ

れわれにとつて客觀的であり幸福な思考であつた。開國以前の人々が、海外の事情に目を蓋うて西洋人を夷狄と呼び、蠻人と考へ、外國語を蠻語とし、外人を見下してゐた氣構は、やはり海外の事情を知りつくした現代に、ふたたび復興されねばならない。

日本に生れた日本人が、日本を世界の田舍と考へ、日本の英雄を田舍英雄と考へることは、斷じて世界的ではない。德川時代の人々が、日本を神州と呼んだのは、大地に根づよく生きるものの氣位であり、この神州不滅の信念こそ、三千年の美しい歷史を作つた精神的礎石である。

地元である日本人が、日本の英雄を世界的に評價することができないで、はたしてどこの國の人間がこれを價値づけることができるであらう。外國人が日本畫の美を高評してからあはてて日本人が自國の美術の價値を知り、外國人が、骨は日本に埋めよと遺言してはじめて日本の國土美を知るといふのでは、あまりにも謙遜の美風におもねるものであらう。外人の別莊地帶に住んでゐる百姓町人の考へさうな依存的心理や論理から、神州不滅の自主的な考へに立ちかへるための修養法として、日本の英雄偉人の足跡に新鮮な再認識の目をかがやかせることは必要である。

この書が賴山陽の評傳として、どれだけ不出來なものであらうと、以上述べたやうな著者の心構については、同感の人もあらうかと思ふ。なにしろ外國語も知らず外國にもゆかぬ著者のごと

きは、西洋思想にかぶれると云つても、云ふに足りないものであるが、現代ではすでにはやくから洋行無用論が通用するほど東西文化は交流し、東京の空氣はロンドンの空氣と一體化してゐる。岡倉天心は日本は東洋文化の博物館であり信託倉庫であるといつたが、別の意味で日本は世界文化の博物館であり、信託倉庫の觀がある。したがつて、誰ひとりとして西洋かぶれの保菌者でないとは云はれない。われわれが、支那文學者であり漢詩人でありながら、もつとも熱烈な日本主義者であり得た賴山陽に學ばうとするものは、その思想的抵抗力の逞しさである。本書は、著者自身にとつても、かかる主體的抵抗療法として書かれたものである。

日本的風土の清潔な空氣を呼吸し、內發する日本的な生命力さへ逞しくすることができれば、たとへ百の外國語を知つたとてまた一生歐米で生活してゐても、おそらく不健康な西洋かぶれ病となる心配はないであらう。

昭和十六年九月

著者識

賴山陽　目次

第一章　歴史的世界の人……一
一、歴史的世界の建設……一
二、國史教育の再建……八
三、昭和維新と歴史的青年……一九
四、青年歴史家山陽……二七
第二章　時代相と山陽精神……四〇
一、幕府政治の退潮期と山陽の政治經濟觀……四〇
1、幕府政治の退潮期……四〇
2、鎖國と經濟政策……四四

3、山陽の民政論……五三
4、山陽と大鹽中齋……五八
5、山陽の經濟觀……六八
二、對外問題と山陽の國防觀……八七
1、山陽時代の海防問題……八七
2、山陽の海防觀……九三
3、地歴一體觀……一一三
三、尊皇論と布衣山陽……一二八
1、德川幕府の學問政策……一三八
2、異學禁制と山陽の環境……一三四
3、布衣山陽の立場……一四一
第三章　教育的評傳……一六四

一、環境……一六四
1、學問の家……一六四
2、家庭早教育……一七四
二、立志時代……一八七
1、立志教育……一八七
2、江戸遊學……一九七
三、刻苦時代……二〇六
1、煩悶……二〇六
2、脫藩……二一一
3、幽居……二一八
四、獨立時代……二二四
1、雌伏……二二四

2、飛躍……二二八
3、茶山塾……二三三
4、山陽塾……二三七
5、遊歷……二四一
五、晩年……二四八
1、死闘の著述……二四八
2、終焉……二五五
第四章　山陽の教育觀……二六三
一、廣義の教育……二六三
二、山陽學と教育精神……二七五
三、山陽塾の教育方法……二八三

第一章　歴史的情熱の人

一、歴史的世界の建設

歴史を繙いても、そんなに頻々とは使はれることのない「未曾有の國難」といふやうな言葉が、朝に夕に、到るところで繰返される現代は、歴史への關心もまた未曾有の昂まりに在る時代である。歴史を通してでなければ、現代のどんな出來事も解釋することはできない。昭和十五年は恰も皇紀二千六百年といふ歴史的な記念の意味もあつたであらうが、ここ數年間ほど皇國史書の夥しく新刊されたことも、また未曾有の現象であらう。ひとり單行本のみではなく、雜誌と云はず新聞と云はず、こと國史に關するかぎり、パルプ飢饉の歎きはない。まさに歴史書の洪水時代である。「東亞共榮圏」といひ「昭和維新」といふ。すべては新しい歴史的世界を建設するための合言葉であり、歴史的な表現である。

これは、滿洲事變このかたの外來思想の閉塞から起つたわが國のみの特殊な現象ではなく、今や世界があげて新しい世界史、新しい歴史的秩序の建設に邁進してゐる時であり、人類全史の轉換期である。

されば、歴史への勉强、歴史への關心は、ひとり日本人のみではなく、全人類の重大義務である。全世界の國民は、ひとり殘らず、その國の祖先に耻ぢず、子孫に笑はれることのない歴史の建設者とならなければならない。國家興亡のわかれるところも恐らく、その國の歴史的熱意によつて決定されるであらう。否、世界新秩序の建設と云つても、その成否を決定するものは、恐らくその國の歴史的活力であらう。

新しい世界史においては、「黄金」を「持てる國」よりも「歴史」を「持てる國」が勝利者となるであらう。もしくは、「歴史」を持たうとする國が、最後の勝利を得るであらう。

いふまでもなく、我が日本は、世界最高の歴史に輝く國家であり、しかもその長い歴史が、東海の孤島國家から世界最强の國家へと、一貫して歴史的發展をそのままに表現した典型的歴史國家であり、その發展的な歴史の間には、大化改新、明治維新、そして現代の昭和維新といふやうに程よく更新されてきた永久不滅の維新國家である。日本が永久に若々しい青年國家であると云

はれるのはそのためである。

しかも、最近の十年間に打續いた内外の國家的試練によつて、いかに苦難を通して日本が、新しい世界國家へと跳躍したことであらう。

日本の歴史こそ、日本國家の生命であり、日本國民の生活原則である。日本こそ、國體と道德との一體化した唯一の理想國家であることをその歴史が、三千年の歳月を費して實證してゐるのである。

新體制といひ、大政翼賛といふも、かかる意味において、全國民がひとり殘らず皇國の歴史的生命と一體化することであり、全一億が皇國史の一頁となり一行となり一字一句となつて、永久に美を濟してゆくことに外ならない。西田幾太郎博士は、「我國民の道德と云ふのは、歴史的世界の建設と云ふことでなければならない。我々が何處までも自己自身を捨てて、我々の自己がそこからそこへといふ歴史的世界建設に奉仕すると云ふこと、何處までも作られたものから作るものへとして歴史的世界の建築者となると云ふことが、國民道德の精華であつたのであらう。」(「日本文化の問題」)と述べ、それが萬民輔翼の思想でなければならないとしてゐるのは、それであらう。

「臣道實踐」といふ言葉も、この萬民が歴史に作られ作り手となるといふ實踐のほかにはあり得ない。

國民學校から大學まで、新しい學制の革新原理は、「皇國の道に則りて」であるが、それは歴史を軸とする教育革新である。敬神崇祖の美風を助長しようといふのも、いふまでもなく全國民を歴史的世界の建設者たらしめ、日本的生命と一體化させる行である。全國民ひとり殘らずを道鏡たらしめるためではなく、和氣清麿たらしめ、足利尊氏たらしめるためではなく、悉く楠公父子たらしめるための知行合一の教育である。それがためには、歴史は國民生活にとつては、日常不斷の經典となり生活革新の臺本となるのである。從つて國民學校はむしろ國史學校であり、國民學校における國史は、國民科國史の中にある部分的地位に固定さるべきではない。日常の兒童生活があげて國史の成果に則り、國體の精華の顯現となるのである。儀式や行事や禮法が重要視されて來たのも、まつたくこの國史の成果に歸一し、祖先の傳統を發展的に繼承しこれを、更に發展的に子孫に傳承することのできる歴史的存在たらしめんがためである。

また歴史の研究は、ひとり天下國家のためのみではなく、それと同時に、この渾沌期を生きる個人の生活原則を建設せしめるものである。ヘーゲルは個人は歴史的全體から離れては無意義な

ものであり、それは抽象的存在となつてしまふと云つたが、個人の生活は鄕土や國土を離れて存在するものではなく、この國土、この社會との關はり合ひの姿をほかにして現實の生活はない。生きるとはこの鄕土社會といかに取りむすぶかといふことである。人間との對話を離れては言葉も意義を失ふやうに、現實社會とのかかはりを離れては生きた生活は成立たない。そしてこの歴史的社會とともに生きてゆく生活の原則はやはり、歴史的方向の外にはあり得ない。生活とはこの鄕土社會の中に個人を刻みつけてゆくことであり、社會もまたかかる個人の働きの綜合形態にすぎない。

名所舊跡とは何であらうか。それはわれわれの祖先の生活の足跡である。われわれが、名所舊跡を訪ねてゆくのは、單にその景觀の美に憧れるばかりではない。そこに刻印された先人の生活、働きのあとを見るためである。そこに今もなほ昔さながらに、生き生きと呼びかける先人の言葉を聽かうがためである。この意味では、名所舊跡とは要するに、祖先の歴史を語る無聲の蓄音機であり、時間的に電送するテレヴイジョンである。しかもこの大自然の中に刻まれたレコードは、永久に摩滅することもなく、長く子孫をして、その生活原則を更新させるものである。かかる祖先の聲なき聲を聽かせる訓練が、歴史の勉强にほかならない。

もとよりすべての人間の生活の足跡が、悉くいはゆる名所舊跡となるものではないが、それにも關らず時代々々の民衆の足跡は、やはりその時代の名所舊跡となりつつあるものであり、世々その美を濟す國民生活とは、要するに、全國民が、この現實の國土をして生きながらの一大名所舊跡たらしめる働きではないか。その作りなした美しい國土によつて、また作り手が美しく作られてゆく生活こそ、充實した國民生活にほかならない。個人の生活が、綜合された歴史を作る生活となることが、臣道實踐であり、萬民翼賛であらう。

個人の生活もまた全體の歴史と關はりながら、個人の歴史を作りつつある。その作りなした歴史はやがて個人の運命の作り手となるのである。

しかしながら翻つて、現代人の生活樣相を觀察すれば、まだ眞に歴史に對する態度が、徹底してゐるものとは思はれない。そこには、國民そのものの反省とともに、國民に對する歴史の教育にも反省すべき點が少くない。

東亞ならびに西歐に戰はれつつある現代の世界戰爭は、舊き世界觀と新しい世界觀との戰ひであり、結局において新しい世界史のための戰であるとされてゐる。かかる時代にあたつて歴史觀の問題ほど、すべての人間に切實な課題はない。新しい史觀のもとに日本を見直し世界を見直す

ことは、國民の重大時務となつて來た。

歴史の研究家には德富蘇峰あり竹越三叉ありといふやうな態度は、この歴史の新體制下にはゆるさるべきではなく、すべての國民が、より新しい蘇峰となり三叉となり、全國民が史料編纂官として國民史學の興隆を企圖すべき時である。新しい昭和維新の根柢には必然に、新しい國學が興らなければならない。全國民をしてひとり殘らず、歴史の作り手とならしめることこそ、新體制への第一歩であらう。そして、それは單なる詩吟の高唱といふやうな回顧的ゼスチュアに止まるべきではなく、人間の精神革命であり、生きる力の革新運動でなければならない。

この意味では、國民學校が國史學校であるばかりではなく、現代の國家社會のすべてが國史學校であり、全國民が、日常不斷の生活をもつて國史を編纂するものでなければならない。かくして新體制は國史體制であり復古體制であり、歴史的世界の建設運動である。

歴史に對する關心のたかまりは、現實生活に對する關心のたかまりを實證する。ニイチェは歴史は人間の生活を後退させる鍵であると皮肉を云つたが、眞の歴史への情熱は、同時に現實への熱愛から生れ、それは後退のためではなく限りない前進の足場として現實をふまへた形である。

皇紀二千六百年を劃して國民の歴史に對する關心のたかまつたことはよろこぶべき現象である

が、これを單なる回顧や過去崇拜たらしめることなく、これを現實への熱愛たらしめることこそ、重要である。

二、國史教育の再建

現にわれわれは、いまだかつて經驗したことのないほど大仕掛な、歴史的建設事業のさ中にある。内には新體制といひ、外には世界新秩序の建設といふ、これは新しい歴史をつくるいとなみである。この建設事業に參加する人々の生活の重心は、この歴史の方向とぴたりと一致せねばならない。歴史こそは、すべての人々をして、この世界史的な建設者たらしめるものである。

しかるに、これまでわれわれは、かくの如く重要な歴史について、はたしてどれだけの情熱を抱くことができたといふのであらう。それほどに歴史を生活的に重要視してゐたであらうか。歴史の中から生活原則を作り出すといふやうな考へを持つたであらうか。

今までの歴史は、どこか民衆の生活とはかけ離れた高座にまつりあげられたものではなかつたか。われわれの生活とは沒交渉な、ただ學修の義務だけで關係づけられてゐたのではなかつた

か。現實の生活と沒交渉なものに、情熱など持ち得る筈はなかつた。

世界にたぐふものなく美しい歴史を持つ國に生れながら、その國民がそれに對して情熱を持ち得ないといふことは、考へねばならぬ問題である。ただ、國民の極めて一部分のもののみが、專門家と稱して歴史を研究しこれに情熱的に沒頭してゐるだけでは、決して發展的で前進的な歴史を作ることはできないであらう。それは少くも常態であるとは云はれない。世の中に國民の專門家があり得べきではないやうに、歴史の專門の構の高いことはよろこぶべき現象ではない。すべての國民は歴史的人間でなければならない。これが常態であり原則である。歴史は國民のもの、國民の作るものでなければならない。

どこの家庭にも神棚があるやうに、どの國民にも歴史がなければならない。どの家庭にもただ形式的に神棚があるだけではいまだ神ながらの家庭生活に徹したものではないやうに、すべての國民が形式上だけで歴史を重要視するのでは、いまだ國民生活の歴史化されたものといふことはできない。發展する日本の歴史的脈搏は、全國民の心胸の鼓動とぴたりと一致してゐなければならない。そこに萬民翼贊のリズムがある。

今日は國民の歴史觀の更新さるべき時でもあるが、また從來の國史教育も、大いなる反省を求

められてゐる時である。

大正、昭和にかけて、國民、特に青年國民の間に、歴史及歴史的なるものへの興味が薄らいだとすれば、その原因の一つは、外來思想や外國史教育、外國語教育偏重に基くところもあるであらう。西洋的なるものへの青年の關心は、ただ西洋的であるといふことばかりではなく、西洋的とは同時に植民地的であり、非歴史的な世界への憧憬である。異國に憧れるこころは、鄕土の歴史を輕んずる心であり、外來文化とは主觀的には歴史的厚味のなき文化である。したがつて、文化の外來と輸入の活潑に行はれる時代には、鎖國時代よりもはるかに歴史學、國學が重要視されねばならない。かくしてはじめて外來文化を主體的に醇化し自主的に消化、攝取することができるのである。

しかるに事實は、西洋文化の澎湃たる輸入に比較して、國史教育はますます反動的に老人の骨董いじりのやうに限定されたのでは、その國の國民思想は健全なる發展を期待することはできない。果然、大正末期から昭和にかけて國民思想の衰頽期が來た。

詩人萩原朔太郎氏はかう告白してゐる。

「小學校に居た時から、私は歴史といふ學課が嫌ひであつた。それは地理と同じく、純粹に暗

誦學課であつたからだ。延喜元年が人皇何代天皇の御宇に當るとか、藤原氏の外戚關係を系圖表にしておぼへるとか、源頼朝が石橋山に兵をあげたのは皇紀何年何月であつたとか、聖德太子の憲法全文を暗誦するとか、私の子供の時に習つた歴史教育の主要事であつた。」

また、歴史小説家である林房雄氏はかう述べてゐる。

「私が小學生の頃は、たしかに尋常五年にならぬと歴史は習へなかつたのであるが、その學年の來るのを私は胸を躍らせて待つたものである。少年の心の中に小國民の意識が芽生えると共に、子供ながらの歴史への興味と要求は強く動いてゐたのである。だが、五年になつて、歴史が學課となつてしまふと歴史はたちまち重荷となり、期待と興味は消えてしまつた。中學と高等學校に於ける歴史もまた同樣であつた。依然として無味乾燥であり依然として重荷であつた。」

この人々の歴史教育への告白は、恐らく、近代の青年壯年の人々の國史教育への感懷を代表したものといふことができるであらう。

歴史教育の缺陷と云つても、そこには教材や內容の缺陷とともに教育する教師の態度にも缺陷があつた。從來の歴史教育は、その內容において、國民大衆の生活や活動を無視したものが多か

つた。昔から國民の大部分は、積極的自發的に歴史の作り手とはならなかつたかのやうに取扱はれてゐる。歴史の内容そのものが國民生活から遊離してゐたやうである。これは國史教育に對して、國民が興味を持ち得ない理由の一つである。それとともに、内容を表現する文章そのものが、あまりに無味乾燥であり、詩のない形式が多かつた。世々その美をなして來た國體の精華の記述が、他人行儀であり、あまりに散文的であつた。ただ、過去の記錄や資料を羅列して、その前後に、あつてもなくてもよささうな申譯のやうな通り一遍の史觀を附加へて置くだけでは、十分に國民精神を昂揚することはできない。

教科書でも、國史や地理は、數學や理科とともに、まるで讀者や學習者を感情のない木石でもあるかのやうに扱つた法文的な記述形式が多かつた。内容がすでに國民生活から遠ざかつてゐる上に、その文章までが生活感情を無視したものとなつては、到底人を動かして歴史的ならしめることはできない。數學のやうな無情な論理の教科でさへも、その根源は世界を美的に眺めようとする欲求から出たものであると云はれて居り、眞の數學教育はやはり兒童や生徒の知情意の全體に訴へるものでなければならない。數學によつてもやはり人格が作られ眞善美の意識は全體としてみがきあげられるのである。從つて數學教科書の文章の中にも、簡素の美といふか、論理の美

といふか美的表現への考慮が必要である。いはんや、國民科國史の教科書のやうな萬民をしてもつとも大きな翼賛道に動かされねばならない教科が、無味無情な史實の記述に終始していいといふ理由はない。

次は教師の教育態度の問題である。といふよりは歴史教師その人を得なかつた點である。日本の歴史は建國以來、一君萬民の大義にもとづく世界無比の美しい歴史であるが、歴史教材の内容が歴史は少數の功臣や偉人の作るもので、國民の大多數は拱手して傍觀してゐたかのやうな傾向があるやうに、歴史を說く教師もやはり學ぶものの生活感情を無視して高飛車に史實の記憶を强ひるやうな嫌ひがある。

本來、兒童は昔話が好きであり、國民は歴史を好む筈であるが、さうした本來の歴史への國民的愛着には無頓着に、歴史を教へようとする傾きがあつた。いはば無意識のうちに、國民の歴史への親愛感を拒否することを敢てしてゐるのである。

それは、歴史教師自身が、何よりも、歴史に對する情熱の缺如を物語るものである。まづ自ら歴史の火だるまとなつて燃えることなくして、よく後進の歴史的情熱を釀成することはできない。歴史教育の目的は、兒童の頭をして國史辭典たらしめることでもなく、系圖や年代の記憶機

械たらしめることでもない。いかに史實や年代を丹念に記憶したところで、それで國民精神が昂揚する譯ではない。單なる史實の研究や記憶においては、日本歴史に關して、ソ聯にも英米にも優れた研究家は少くないであらう。しかしそれはわが皇國教育の目的ではなく、いはば第五列の教育とでもいふべきものである。單なる史實の機械的暗記は、決して歴史教師の根本資格ではない。それよりも重要にして不可缺の資格は、皇國史に對する歴史的情熱である。少しく極端な云ひ方をすれば、完全無缺な史實の冷血的暗記よりは、少しは間違つてゐても、國體の本義に基く歴史的情熱のすぐれたものを養成することが、國史教育の眞の目的である。

もとより、從來の歴史教師にも歴史に對する情熱が皆無であるとは云はれなかつた。從來、各教科の專任教師には、それぞれ自己を護る繩張り意識といふか、その教科に對する情熱はあつた。しかし、多くはかならずしも國民教育の全體に役立つやうな廣い立場からではなく、何となく偏狹な教科意識であつた。教科における個人主義といふか私益的な傾きがないとは云はれなかつた。

歴史教師の場合においても、總じて偏狹な國粹主義的な體臭が強く、それが却つて青少年をして歴史を敬遠せしめ、歴史的情熱を喪失させる原因たらしめたものも少くはない。前述のやうに

歴史は進歩的のものであり生活的のものであり國民的のものであるにもかかはらず、却つて、歴史教師の顔を見れば、歴史は頑固なものであり、偶像的なものであり、ニイチエのいはゆる人間をして後退させる鎖であるかと思はしめるものがあつた。眞の歴史は後向きのものではなく、天壤とともに窮りなき前向きのものであり、歴史教師は、その深遠な歴史觀をもつて誰にもまして現實を熱愛するものでなければならない。少くもあらゆる教師に比べて政治的であり革新的でなければゐられない歴史的情熱の持主であるべき筈である。

歴史教師の顔が、あまりに道學者的であり骨董品的であるといふことは、永遠の青年の國と云はれる日本の歴史教師としてふさはしいものではない。

支那事變の當初にあたり近衞公の國民に訴へた言葉にも、「吾が日本の歴史は極めて古いが國家の生活力は青年のやうに旺盛である」といひ「世界歴史の全體から見て日本は今世界に於ける進歩的國家としての主要な役割を働いてゐる」と述べたが、これは歴史的な家系の中に育つた近衞公の強い歴史的情熱から出た言葉であらう。そこに必勝の信念が湧き出るのである。眞の歴史教師の顔は、最古の家系の歴史的血液を受けて、しかも萬年青年のやうに進歩的な近衞公のやうなものでありたいと思ふ。

これは或は特殊な引例かも知れないが、最近、ある女學校の青年教師が、教壇を去つて上京したが、或る座談會の席上、眞の退職の理由を發表したのを聞いた。それによると、これは某縣立女學校であるが、その校長は帝大の史學科出身であるところから、何かと云へば生徒の前で英米排擊論を述べ、英語教育無用論となるのがお定りである。然るにその學校には現に英語教育を實施して居り、その無用と云はれる英語の擔任がこの青年教師である。もとより校長が、この青年教師に退職を命じた譯ではないが、毎日熱心に英語を教へ且つ學んでゐる教師と生徒の前で、英語教育無用論をまくし立てられては、この英語教師が居たまれなくなるのも當然である。

しかし、問題は英語教育のみではない。かかる非常識な歴史教師を通して、青年男女をしていかに歴史嫌ひにさせつつあるかといふことこそ、より重要な問題であらう。これは恐らく寡聞な筆者の耳にした稀代の例であらうとは思ふけれども、もしもかうした粗樸な鎖國的な攘夷論者のやうな歴史教師が少くないとしたら、それは日本のため、歴史そのもののためによろこばしいことではない。

今や歴史的な新世紀の發足にあたり、國民があげて歴史への關心をたかめ、眞に新しい生活法則を確立するにたる歴史的情熱を持たせることは、絶對的に必要である。これがためには、この

時代的必要にたゆるだけの逞しい國史教育を再建しなければならない。

歴史教育の再建は、同時に歴史そのものの再建である。全國民の生活力の源泉としての日本歴史の再建である。國民の再組織も國民生活の充實も、それを貫くものは歴史であり、今日の國民の精神的常食として歴史を作ることは、國民教育の最も大きな目標である。

最近、文壇では國民文學への待望の聲が高いが、國民文學とは要するに、歴史の日常化であり、國體精神の國民常食である。

淺野晃氏の次の言葉は、現代の歴史教育に對する青年一般の胸奥の告白であらう。

「われわれは何々主義や、何々思想や、何々理論から、究極の力を得ることはできなかつたのである。それで結局歴史に歸つた。歴史だけがわれわれを完全に支へてくれる。歴史は大地であり、太陽であり、水であり、空氣である。「國民」といふものは他の何處にも存在するのでない。ただ歴史に於てのみ存在するのである。

さういふ歴史をわれわれの學校は教へてくれなかつた。むろんこれは大正時代のはなしである。われわれはたしかにくり返し聖國の由來を教はつた筈なのであるが、何の壯大な感じも嚴肅な追憶も殘つてゐない。明治維新の未曾有の國難について聞かされた話であるが、慄然とし

て危機の感覺に身をさらしたいといふ記憶はさらにない。一言にすればわれわれは歴史を教はらずにしまつたのである。これではどうして『國民』になることができよう?」

歴史教師は單に史實の豐富な知識を誇るばかりではなく、新しい國民を作らうとする國民思想家でなければならず、新しい歴史的情熱の持主でなければならない。かくの如き歴史的國民の創造が國民學校の目標であり、十分に國民的であることが歴史の甦生である。いふまでもなく、現代の國史教育は單に、史實の記憶や羅列が目標ではなく、それによつて、この昭和維新を正しく遂行させる國民を作るにあり、昭和維新の動力となり推進力たる人物を作るにある。もしも、昭和維新や新體制に蹉跌や足踏がありとするなら、その原因の一つとして、國史教育の萎微頽廢をあげねばならない。事實、明治維新と昭和維新とを比較してもつとも大きな内面的相違は、それに先行する國民文學や國民教育の有無をあげねばならない。この點では、明治維新以前の文學や教育は、すべて歴史的情熱をもつてつらぬかれてゐた。明治維新を斷行することによつて、確かに歴史的世界が建設され、眞に國民的な政體が復活するといふことを、國民に教へ感じさせる教育や文學があつた。この點では、今日の教壇や文壇はむしろ新體制とは關はり淺き世界のやうである。少くも文學や教育は、新體制に先行するものではなく、その後尾に引ずられてゐる形で

ある。國史教育の再建は、昭和維新にとつて、不可缺の問題である。

三、昭和維新と歴史的青年

明治維新の中心が、當時の青年にあつたことは明白であるが、昭和維新の中心はかならずしも青年ではなく壯年であるといふやうなことの云はれるのは、何故であらうか。明治維新が青年日本の歴史的汾湧であつたやうに、昭和維新もまた、青年日本の力を中心とし先驅とするものでなければならない。

しかるに昭和維新にいろいろな故障があるとすれば、まだそこには十分に青年の力が動員されないか、もしくは昭和維新の棄石たるにふさはしいまでに、日本青年の力が成熟してゐないためかであらう。眞に自覺ある青年の力に重點を置かない改革は、名ばかりの改革となり、虚僞の維新となり易い。

したがつて、今日の維新を健全に生長させるためにも、これに必要な青年的人材の教育はもつとも急を要する。

それがためには、歴史的青年を作るにある。あまりにも日本の歴史から遠ざかつてゐた青年をして、歴史のなかに恢復することである。

ただに、試驗課目の中に歴史を加へるばかりではなく、全青年の生活の中に歴史的情熱を復活させることである。明治維新前後の青年が、歴史的な詩吟にこめた感激を、今日もまたそれ以上に復活させねばならない。自己の全身をめぐつてゐる血液の中に、歴史の波動を再認識させ、自己の心臓の鼓動の中に、大化改新や、明治維新に活躍した祖先の青年的鼓動を心感させねばならない。

昭和維新は決して、老人の改革に終らせてはならない。昭和の歴史は老人の骨董いぢりのやうなものであらしめてはならない。

昭和維新の中核は、眞の歴史的青年によつて組織されねばならないのである。

眞の歴史は老人のものではなくて青年のものである。歴史教育を再建するにあたつては、先づこの點に着眼し、青年のものとして歴史教育を再檢討するのが近道である。

青少年は、本來、歴史的情熱の乏しいものではない。かつて大正末期から昭和のはじめにおいての日本の青年學生層の中に、唯物史觀に對して正しからざる情熱をこめたものの少くなかつた

のは、單に左翼運動の巧妙さのためであるばかりでなく、そこにはあまりにも切實な現實生活との近接の中に、青年の歴史的情熱を沸騰させるものがあつたためではあるまいか。それとも、當時の歴史教育の貧困もまた一つの原因と云はなければならない。その國の青少年をして、世界無比といはれるわが鄕國の歴史美よりも、遠い他國の、しかも全く國體を異にする他國の史觀に傾倒せしめるが如きは、いやしくも歴史教師をもつて任ずるものにとつては一大汚辱である。その當時の歴史教師に、はたしてそれだけの國士的責任の實感があつたであらうか。歴史の研究は國民思想とも國民生活とも、まつたく無關係のものとして、平然として古文書の中に沒頭してゐたものが、なかつたであらうか。

これらは、みな歴史教師の歴史知らずであり、歴史的情熱の貧寒を物語るものである。

在來の歴史教師の缺陷は、總じて青年史家たるの魅力がない。ミイラ取りがミイラになつたと云はれるやうに、歴史とりが歴史になつたとでもいふやうに、歴史家そのものが、骨董化してゐた。歴史の中に死んでしまふのが目的ではなくて、歴史によつて生きるのである。歴史の中に絶對的な生の力を修練するのである。

西田博士はかう述べてゐる。

「我國に於ては復古といふことは、いつも維新と云ふことであつた。過去に還ることではなく、永遠の今の自己限定として一歩前へ進み出すことであつた。主體が環境を環境が主體を限定する、一つの世界が成立するには、それぞれ環境に應じて主體的なるものがなければならない。併し世界は矛盾的自己同一として何處までも作られたものから作るものへと動いて行くのである。蘇我氏藤原氏以來、我國の歴史に於て主體的なるものは、それぞれの時代に於てそれぞれの時代の擔ひ手の役目を演じたであらう。併し作られて作るものとして、如何なる主體もはや環境に適せない、即ち社會形態が行詰まる時が來なければならない。歴史が生きたものであるかぎり、然らざるを得ない。支那ではかかる場合が易世革命となつた。我國ではそれがいつも皇室に返ると云ふことであつた。復古と云ふことであつた。そしてそれはいつも昔の制度文物に返ると云ふことでなく、逆に新なる世界へ歩み出すと云ふことであつた。明治維新と云ふ如きものが最も之を明かにして居ると思ふ」(「日本文化の問題」)

このやうに歴史を生きたものと觀るかぎり、それは青年の束縛ではなくて、青年のものである。躍進日本の運命は、青年日本の運命であり、これは日本歴史の方向である。明治維新をはじめとして、歴史的生命の昂揚期には、いつもその時代の青年が更新運動の先驅となり、青年の血

液の中に、はげしく歴史的情熱が汾湧するのはそのためである。

革新とは、西田博士のいはゆる「如何なる主體ももや環境に適せない、即ち社會形態が行詰まる時」に「永遠の今の自己限定として一歩前進すること」である。東亞共榮圏の建設といふのも、東亞民族の共榮前進のための新しい精神的建物を作り出す運動である。これの擔ひ手が青年であることはいふまでもない。

青年と云へばただ青臭いもの、新しいだけのものとすることはできない。青年の血液は決して新しいものではない。最も舊い生命から生れて來た新しい生命である。行詰つた程の舊い血液を受けて新生したものである。されば青年の新しさは、少くも最も舊い新しさである。およそ生命あつて以來の舊い生命の再建設にすぎない青年とそは歴史そのものである。

また青年に限らず、人間の眞底からもとめるものはただ、形式的なる新しさではない。人の眞に求めて止まぬものは、新しさうなものでも正しさうなものでもなくて、眞に新しいもの、眞に正しいものである。その眞に新しいとは歴史的に新しいものであり、その眞に正しいものは、歴史的に正しいものでなければならない。時間的にも空間的にも、人類の歴史あつて以來の成果を比較檢討した上での、新しさ、正しさをほかにしては、眞の新しさも正しさもあり得ないではな

いか。さうした歴史的審判の上に築かるべき不壊の生活原則こそ、萬人のもとめてやまぬものであり、我が國民にとつては、この國土の上に建設し得べき最善の日本的生活なのである。

かくの如き最善、最高の新生活の法則に對して情熱を持ち得ないものは、もとより歴史に對する情熱も持ち得ない。かくして歴史は大善の學であり、史書はやがて道德書である。かかる歴史的檢討もなく、輕卒な植民地論理が一時の思ひつきによつて、革新を斷行しようとするのは、遂に青年的なるものといふことはできない。青年とは社會國家の歴史的方向を直感的に體現し得る史的存在である。西田博士に從へば、日本精神とは、「我々が何處までも作られて作るものとして、歴史的身體的に（身心脱落的に）歴史的現實の內に自己を沒することによつて現れ來るものでなければならない。我々が眞に物となつて考へ物となつて行ふことから知られるものでなければならない。」といひ、「日本文化の特色と云ふのは自己自身を否定して物となる、物となつて見、物となつて行ふにあるのではないかと思ふ。己を空くして物を見る、自己が物の中に沒する。無心とか自然法爾とか云ふことが、我々日本人の强い憧憬の境地である。」と述べてゐるが、この歴史的な世界に己を空うして、生命もいらず金もいらぬ境地に徹し得るものは、やはり歴史的青年の强味である。そこではじめて歴史は青年によつて作られるのである。老廢したものに

は、無心の境地も自然法爾の世界も容易ではない。

しかし、青年的な情熱は、ともすれば歴史的現實への認識が不十分となり易い。前に述べたやうに、歴史は大善の學であるが、また大眞の學でもあり大美の學でもある。世には歴史的情熱をもつて、非科學的な神秘的なものとする傾きがあるが、歴史あつて以來の綜合成果の上に立つ新生活の原則は、もとより科學あつて以來の最大の科學的結論と一致するものであり、この意味では三千年の國史を貫くものは、やはりこの國土の一切の條件を考慮した上での最高の科學的法則がある。そこに彌榮の科學があり、神ながらの道がある。青年の一部が、非科學的の名において、歴史への關心を輕んずるものは、いまだ歴史の本義に徹したものとは云ひ得ないであらう。

青年が歴史に興味を持ち得る理由の一つは、歴史そのものは、この情實の泥沼のやうな現實社會とは違つて、歴史上には正しい生活原則が、長い年月を通して實證されてゐるからである。それは時間と空間を通した科學的實驗室である。日本の歴史に示された道は、科學の科學であり、科學以上である。日本歴史の世界では、不忠不義な人間が永久に榮へたり、忠義な人間がいつまでも不忠不義であるといふことはない。現實の世界では、國家のために必ずしも忠義でもなく實力もないものが、不當に高い地位についてゐたり、見下げはてたやうな人間が、校長や社長とし

て威張つてゐることもあるであらう。

しかしながら、世々その美を濟して來た我が神ながらの國の歴史の上には、太政大臣の道鏡よりは、和氣清麿の方がはつきりと忠臣となつて居り、征夷大將軍の足利尊氏よりは、楠木正成の方が無二の忠臣とされるのである。概して史上に忠臣孝子の美名をのこしてゐるのは、社長や校長の方よりは貧苦の中から身を起した立志傳的人物が多く、「明智光秀の三日天下」や「驕る平家は久しからず」などと、因果應報はさながらに、まつたく科學以上の、合理以上の正しさで、書き殘されてゐるのである。そして、かかる不壞の生活原則を千歳に刻んでゐるものが、いはゆる青史である。そして、西鄕隆盛は別に子孫のために美田ものこさず財産を分ち與へなかつたけれども、美田や財産以上の、消費しても消費しきれないものを永久にのこしてゐるのである。公益優先も、職域奉公も、この世界では當然の原則であり、日常普通の常道となつてゐる。まさに青年の世界であり、眞實のみの世界である。その上、時は力であるといふ時間の歴史的累積は、善人も惡人も、全體としての國家發展に關はるものとして、單純に憎むことも、單純に隨喜することもできないまでに風格化され、傳統の大和の道がそこに示現されてゐるのである。およそ日本臣民であつたかぎりは、長い歴史の目をもつて見れば、一概に排撃すべき人物もなく、切捨てらるべき存在もなく、すべてが綜合協力してこの國家を發展させて來たものと云へる。

かくて、歴史こそ青年のものであり、またあらしめねばならないものである。それがためには從來の歴史及び歴史家は、歴史を青年のものたらしめるための努力において、はたして十分の資格があつたであらうか。時代はたしかに、新しい歴史的情熱の發電所としての青年史家をもとめてゐるのである。

四、青年歴史家山陽

昭和維新といふ言葉が、歴史的形容詞でなくなつた今日は、さすがに新しい歴史家をもとめる國民的熱望もたかまつて來た。そして、かの日本のデモクラシーを說いた岡倉天心の「東洋の理想」や、大川周明の「二千六百年史」や、菊池寛の「二千六百年史抄」などは、まさしくかかる新しい歴史的熱望に應へたものである。この人達の中には、それぞれに新しい歴史家としての要素があるであらう。また最近の論壇に於て、保田與重郎の業績がたかく評價されてゐるのも、やはりこの人の歴史的情熱としらべの高い國民詩人的な直感である。淺野晃氏などは「ただここに

一人の偉大な批評家が出現した。わたしは彼に殆んどすべてのわれらの未來を賭けてよいと思ふ。それは保田與重郎である。」とまで評してゐる。

新しい歴史家の資格としては、國家知識の正しく豊富でなければならないことはいふまでもないが、その他にやはり、青年的熱情と詩人的直感と藝術的表現力が必要であり、特に國民の前途を指標することのできる國民思想家でなければならない。

昭和維新を遂行させるものは、ただ新體制の理論のみでなく、むしろ新體制への國民的熱情である。かかる革新への熱情はやはり歴史的熱情から形成されるのである。

しかし國民的待望の成熟にもかかはらず、現代にはいまだ眞の青年歴史家をもとめることはできないであらう。

過去においても、國學者や歴史家は少くはないが、日本精神と日本歴史を、理論においてではなく熱情において生かした歴史家は、恐らく「日本外史」や「日本政記」の著者であり、「雲耶山耶」や「敵は本能寺にあり」などの詩によつて今なほ生けるが如く國民に親しまれてゐる頼山陽に匹敵するものはあるまいと思はれる。山陽こそ、歴史そのものであり、全生活を歴史に捧げつくした青年史家であり、熱血詩人であつた。

明治維新の原動力として、國學や勤王論の受持つた役割ももとより大きいものであつたが、それにもまして重大なものは、明治維新をして、「止むに止まれぬ大和魂」の發露たらしめるところの維新的熱情である。徳川光圀の「大日本史」にもまして維新回天の事業の動力となつたものは維新の志士たちが、朝に夕に高唱した山陽の歴史的情熱の詩であつた。

「衣は骭に至り、袖、腕に至る。
腰間の秋水、鐵をも斷つべし。
人觸るれば人を斬り、馬觸るれば馬を斬る。
十八、交を結ぶ健兒の社。
北客能く來らば、何を以てか酬いん。
彈丸、硝藥、是れ膳羞。
客、猶、屠蠬せずんば、
好するに寶刀を以てし、渠が頭に加へん。」

といふ兵兒謠の詩は、史學の千百言にまさる迫力があり、昭和維新の今日もなほ痛烈に士氣を鼓舞するものがあるではないか、

山陽研究の權威である德富蘇峰氏は、明治維新の偉業は、大阪町人と賴山陽の共同事業であるとし、道理と感情は山陽が引受け、ソロバンの利害得失は大阪町人が引受けたと述べてゐるが、明治維新のやうな回天動地の事業は、決して單なるソロバンでも單なるリクツでも動くものではない。元來、日本の歷史を形成する根本的な力は、リクツよりも日本的情熱である。吉田松陰のいはゆる「かくすればなくなるものと知りながらやむにやまれぬ大和魂」そのものであらう。

歷史を國民のものとするものもやはり、この歷史的情熱であり、體あたりの信仰である。かかる國民的熱情をたかめることこそ、青年史家の生命である。

德富蘇峰氏は日本外史を論じた中で、山陽の歷史的功績を述べてゐる。

「山陽先生以前には日本の歷史などと云ふものは、殆んど閑却されてゐたのである。……それで日本には歷史書あつて歷史書なしと云ふやうなわけである。然るに此の歷史を、我が國民に公開したのは、賴山陽先生であります。卽ち此處に先生の及ぶべからざるところの功德があるのである。それで我が山陽先生によつてはじめて、日本の歷史を日本の國民に公開し、日本國民の生活と思想とを、日本の歷史の中に見出した。それで山陽先生に至つて、初めて日本の歷史が動き出した。それまでは日本の歷史はミイラのやうに靜止し、博物館に飾つてあつたので

ある。

然るに山陽先生が、日本の歷史をひつぱつて持つて來たからして、恰も千里の馬の如く、そのミイラが馳け出して來たのである。それで山陽先生に至つて日本の歷史が生きて來た。山陽先生に至つて、日本の歷史が、歷史らしい働きをなし始めた。」

山陽に對しては、學者としても人間としても、非難される點が多い。しかし百の非難も、遂に山陽がなしとげた歷史教育上の功績を消すことはできない。

西田博士が復古は維新であり、「過去に還ることではなくて、永遠の今の自己限定として一歩前へ進み出すことだ」と述べたやうに、わが山陽は僅か十二歲にしてすでに、有名な處女作「立志論」の中で歷史の意義を認め「今日の天下、なほ古昔の天下のごとし、今日の民はなほ古昔の民のごとし、天下と民と古、今に異ならず、然して之を治むる所以、今、古に及ばざるものは何ぞや。」と述べて、永遠の今としての一歩前進の大望を明かにしてゐるのである。

歷史を愛することは現在を愛することであり、自己を歷史と一體化させることであつた。山陽の生活も教育も、歷史といふ一貫した中軸によつて發展したのである。

なほ、立志論の中には「吾東海千載の下に生れたりと雖も、生れて幸に男兒たり、又儒生た

り、いづくんぞ奮發志を立て、以て國恩に答へ、以て父母を顯はさざらんや」といふ大文章が、ある、「十有三春秋、逝者は已に水の如し、天地始終なく人生生死あり、いづくんぞ古人に類して千載青史に列するを得ん」といふ詩にはやくも抱いた大望は、その五十三歳の短い生涯を賭して、達成されたのである。

山陽こそ、歴史のために生れ、歴史のために死し、歴史のために罵られ、歴史のため讃へられた歴史家である。五六歳の時繪入りの源平盛衰記や地圖に親しみ、湊川の合戰ごつこに夢中になつてから、遂に血を吐きながらも生命がけで「日本政記」を執筆し力つきて歴史の中に討死するまでの五十年の生涯は、すべてこれ歴史に生き歴史に死したものである。

ただに思想が堅固であるとか、文章が上手であつたために、山陽の史書が今なほ、拔山蓋世の力があるのではない。かの日本外史の中にはこの全生涯の歴史的情熱が全篇のどの頁にもたたき込まれてゐる。山陽の血と汗とが全卷の紙背にふかくこめられてゐるのである。

日本外史にかぎらず、山陽の手になつた一片の詩にも、千歳不滅の歴史的情熱がこめられてゐる。山陽が楠公を吟つた詩の中には、

「北向再拜すれば天日は陰る、七たび人間に生れて、此の賊を滅さん。碧血、痕は化す五百歳、

茫々たる春蕪、大麥長ず。」

とあるが、この悲歌はやがて歴史に生き歴史に討死した悲壯な山陽自身の姿を歌つたものではあるまいか。不治の病魔の重圍に陷り死の宣告を受けた彼が、一日、客と南朝正統を口論したため病勢俄かに惡化し血を吐きながらも、なほも、「政記」の正統論の筆を捨てず、最後に代筆の完了を見るまでの超人的な奮鬪こそ、まさに史家山陽の湊川の戰ではないか。「咯血痕は化す、五百歳」ではなかつたか。

日本の歴史あつて以來、かくも歴史に全精力を傾倒した歴史家が、あつたであらうか。否、世界史上にも類なき努力であり、彼が、世界無比の國勢を書くには、世界無比の文體を以つてすると云つたのは、空言や大言壯語ではなく、身を以てこれを事實に示したものである。彼の歴史詩が人を動かすばかりか、鬼神を動かす力のあるのも當然である。

かつて、遼東還附の翌年、德富蘇峰氏がロシアでトルストイを訪れた時、ト翁から「何か歌へ」と云はれ、氏は山陽の「蒙古來」の詩を高らかに吟じた。これを聞いたト翁は笑ふにも笑へず笑ひをかみ殺してゐたが、ト翁の夫人や家婦達は、殆んどころころ轉げんばかりに笑つて隣の部屋まで行つて笑つたといふ。しかし、蘇峰氏がこれを歌つたのは、「相模太郎、膽甕の如し」の

詩に託して遼東還附に對する憤慨をもらしたものであつた。山陽の詩は、この場合のやうに、永遠の今において生きるものの詩であり、歴史の實用化された詩である。ひとり遼東還附への慷慨のみではなく、山陽の麗筆は悉く歴史を生かした。「日本外史」があつてはじめて人は讀んで涙を流すことのできる歴史を知つたのである。「日本外史」こそ、いよいよ多事ならんとする幕末の國民にとつて、日常的に朗唱するところの國民詩であつた。

もし彼に「日本外史」を書かうといふ大望がなかつたならば、四十二萬石の大名淺野侯の儒臣として數百石の祿を食んで生涯を平和で多幸に送ることができたであらうが、彼はあらゆるものを犠牲にし、或は不良と呼ばれ痴漢と罵られ、乞食同様の極貧生活にもめげず、十七八歳の時稿を起してから、寸刻も外史の稿を身にはなさず、幾度か改刪して四十二歳これを完成するまで、二十餘年の全生命はまつたく「日本外史」二十二卷にかけたものである。しかも、これに對する直接の物質的報酬は、松平定信から得た「銀二十枚」位のもので、むしろこれがために受けた迫害のみ大きかつた。かつ、山陽は自ら他人の爲の著述ではなく、我々の爲の著述であり、自ら文章を修め史眼を練るための書であると云つて居り、世に賣りひろめる意志は毛頭なかつた。生前も親族親友でなければ決して見せなかつたものである。

外史を書くといふことが、彼の短い生涯の大部分であつたやうに、外史を書くことは彼の第一義の生活であつた。それが忠義であり孝道であり、生活行であつた。一字一句が悉く彼の歴史的情熱の結晶である。「修史偶題」といふ詩の中で、「冊萬言皆血痕を帶ぶ」「自ら筆邊瑞雲を生ずるを覺ゆ」といひ、「倦み來つて筆を抛ち時に酒を呼べば歴々たる興亡指點の間」といつてゐるのは、その創作の玄妙境を語るものであらう。

また彼が外史の文體にいかに熱意をこめ全力をあげたかは、「此間宇宙未だ曾て有らざるの國勢あり。之を叙するには、當に宇宙未だ有らざるの文體を用ふべし」と言つてゐるのを見てもわかるであらう。

かかる情熱の書であり、熱烈の文章であればこそ、山陽の文章はその親友、篠崎小竹が云つたやうに「一二章出づる毎に人争うて傳寫し、脛なくして千里を走る」に到つたものである。山陽の文章は推稿また推稿、一言一句もゆるがせにしないそれこそ歴史的な名文であつたが、當時すでに異常な傳播力を持つてゐた。山陽の文章を壁に貼付けて興到る毎に朗唱するものあれば、後の山内容堂のやうにその書風や文章を眞似るものもあつた。當時の學者であり小説家である曲亭馬琴でさへ、日本外史といふ罫紙まで作つて、外史を寫したといふことである。彼がまだ十八九

歳の頃江戸に遊學して尾藤二洲の宅にゐた頃、幕臣ではあるが勤王の志の厚い平山平原を泣かせて見せようとして、楠公論贊の一文を綴つたところ、はたして平山は一讀して熱涙を紙上に落し、遂には大聲を出して泣いたといふ逸話がある。これも決して彼が若氣の惡戯といふべきではなく、文章に限りない歴史的情熱がこめられてゐたからであらう。かくて山陽の死後、「日本外史」は遂に一錢の廣告費を要せずして六十餘州に流行し、學者の非難や幕府の牽制を尻目にかけて、熱烈なる國民讀本となり、その全國民的熱情は發して明治維新の原動力となつた。

最も流行した川越版といはれる「校制日本外史」は、弘化元年初版發行以來、明治三十二年までに十四版を重ね、一時は一ケ年一萬部以上の賣行があり、三十年間平均五千部も發賣したと云はれてゐる。この外の異本も八十種にも及んでゐるし、後に松平家が賴家の訴訟によつて版權を三萬圓で讓り受けた事實から見ても、いかにその賣行の激甚であつたかがわかる。

現に教科書その他にあらはれてゐる山陽に關する研究は幾百幾千と數へるであらう。日本のみかは、すでに早くから日本外史は、支那、ロシヤ、イギリス、ドイツ、アメリカなどに譯されて、世界に流布されてゐるのである。まさに世界的文學である。

いふまでもなく、山陽は、博士でもなければ大學教授でもない、單に一個の野人であり浪人で

あり町の歴史家である。しかも故郷に入れられずして異國に生を終り、長男でありながら廢嫡され、札附といはれた問題の人物であり、その最大傑作「日本外史」は監禁生活中の創作である。

はたして、何が「日本外史」を世界的な傑作たらしめたものであらうか、われわれに課せられた最も大きな課題である。

恐らくその生活に於て操行においても、山陽こそ、古今獨歩、世界の歴史家の中に、眞に空前絶後の傑作であり、世界最大の青年史家といふべきではあるまいか。日本の歴史を通じて、和魂漢才の第一位にありと云ふべきであらう。

世に山陽に關する研究や解説は文字通り、枚擧に遑あらずの盛況である。これはもとよりよろこぶべき現象であり、感謝すべき聖代の榮譽である。

しかし今日は、山陽に關する著述の多い割合には、その讀者は必ずしも多いとは云はれない。かつて日本外史が飛ぶやうに賣れた明治時代と較べては、山陽熱はむしろ冷却したやうである。日本の歴史は何ものも加へることのないやうな少女の小説が、數萬、數十萬と賣れる時代ではあるが、眞に歴史的な山陽讀者は、一部好事家の世界へと限界づけられてゆくやうである。

山陽精神の歴史性は、單純な倒幕精神の原動力であつたばかりではない。日本外史や日本政記

は、吉田松陰をはじめ、維新前の志士に愛讀されたばかりでなく、維新後の國民讀本であつた。山内容堂、伊藤博文、山縣有朋、桂太郎、大隈重信、西園寺公望などの人々が、坐右の書として長くその維新精神を鼓舞したことを思へば、今日の歴史的風格の乏しい新體制の指導者達にとつても、依然として必讀の文章といはなければならない。

大政翼賛運動の出發にあたり、有馬頼寧氏は、「新體制は、どうなるかではなくて、どうすべきかである」といふ名言を吐いたが、われわれは、もはや昭和維新の福音が棚から落ちて來るのを拱手して待つやうなことはゆるされない。昭和の歴史は自らの手で創作されねばならない。日本の歴史は教へられるのを待つよりも、自らの手で積極的に作り出し學びとるべきである。われわれは、山陽精神の探求においても、新しい情熱をもつて積極的にたちあがるべき時である。歴史なき天才少女の出現への驚きよりも、はるかに逞しい驚異をもつて、山陽精神を再檢討し、昭和維新への新しい知性と情熱を傳承すべきであらう。

かの「日本のデモクラシー」を世界にかざした岡倉天心の「東洋の理想」でも、日本外史について「この國の史詩的物語—その詩的なページから、日本の青年が、今日なほ、彼等の祖父たちを改革へと勵かした烈しい熱狂の強さを學ぶあの物語を綴つた時、山陽の手中に燃えてゐたもの

は、この炬火だつた、」と述べてゐる。新體制、それはあらゆる青年が新しい情熱をもつて、山陽精神を欣求し「日本外史」を讀み直し、燃ゆる感激をもつて學ぶやうな世界のことではあるまいか。

第二章　時代相と山陽精神

一、幕府政治の退潮期と山陽の政治經濟觀

1、幕府政治の退潮期

「英雄は時代の子である」と云はれるやうに、偉人や英雄もまた、歴史的社會が生んだものであつて、時代に作られながら時代を作るのが人間一般の生活である。この意味では、いかなる英雄偉人といへども、その時代や社會のタイラントではなく、歴史に生れて歴史に始末されてゆくもの、稀代の英雄も、その過ぎし跡を顧みれば槿花一朝の夢にすぎない。その點ではナポレオンたるとヒツトラーたるとを問はず、歴史といふ大きな時代的背景の中では、「あれも人の子樽拾ひ」の一人にすぎないのであらう。

われわれは、あまりにも歴史を英雄本位に學びすぎる傾きがあつた。足利義滿が金閣寺を作つ

たといふ歴史を讀んでは、實は無名の何千何百の歴史にあらはれぬ、工匠や人夫の埋れた勞を讀まなければならない。新興ドイツをヒツトラーが作つたといふ時は、それがためにドイツの發展するとともに、この英雄のために却つて歴史が作り誤られるのではないかといふ點をも考へなければならない。ヒツトラーも要するにドイツ國民のために、ドイツを作つてゆくまでである。

したがつて、眞に偉人を知るためには、その時代と環境とを知る必要があり、その時代的背景の中に、「歴史は繰返す」ことを知り、かくして昭和の今日、われわれとの歴史的つながりを自覺し、はじめてこの一代の文豪を現在に生かすことができるのである。

殊に今日は、昭和維新と呼ばれ、革新運動のさ中にある時である。歴史の專門家にあらざるわれわれにとつての重點は、山陽が、百年前の何月何日に何を考へ、何をなしたかといふことではなく、それは、それを通して山陽をして今日の日本にあらしめば、はたして何を考へ何をなすであらうかといふことである。かかる想定に必要な手がかりとなるものは、その時代的背景の比較であらう。

そして、昭和維新の實體が何であるかといふことは、いまだ進行の過程にある今日は、これを明確にすることはできないけれども、少くも今日は、昭和維新の完成された時代ではなく進行の

過程にある。現にその理念において組織において、かならずしも統一され決定されたものはく、ただ世界情勢のめまぐるしい轉換の間にあつて、國防國家建設に邁進し、肇國の精神の昂揚されてゐる今日は、山陽の時代と共通のものも少くない。

しからば、わが山陽はいかなる時代に生れたであらうか。賴山陽は、廣島藩の儒者賴春水の長男であつて、徳川十代將軍、家治の時代、安永元年（皇紀二千四百四十年、西暦千七百八十年）に大阪に生れ、寛政、享和、文化、文政を經て、十一代家齊改革の天保三年（皇紀二千四百九十二年、西暦千八百三十二年）京都で五十三歳を以て歿した人である。朝廷におかせられては、山陽の生れた年、第百十九代、光格天皇が即位遊ばされた。つづいて第百廿代仁孝天皇の御即位遊ばされたのが、文化十四年で山陽三十八歳の時である。したがつて山陽の五十三年の短い一代の間に、光格天皇、仁孝天皇の御二代の天皇を戴き、家治、家齊の二將軍を經てゐるが、その大部分は、有名な家齊將軍の時代であり、いはゆる文化文政期の人である。

この第十一代將軍家齊は、在職五十餘年、遂に從一位太政大臣とまでなつた將軍で、文化、文政時代は武家政治の極致の世とされた時である。賴山陽も、「日本外史」の最後に、かう述べてゐる。

「今の公、一橋より入りて世子と爲る。名は家齊と曰ふ。實に有德公の曾孫なり。職を襲ぐに及びて、復文政を修む。賢に任じ能を使ひ、百廢悉く擧る。在職最も久し。左大臣に累遷し、終に太政大臣に拜す。固く辭して命を得ず。又世子家慶を以て從一位内大臣に進む、是に於て、掃部頭井伊直亮、越中守松平定永をして、入朝して恩を謝せしむ。源氏、足利氏以來、軍職に在りて太政の官を兼ねし者、獨公のみ。蓋し武門の天下を平治すること。是に至りて其盛を極むと云ふ。」

ここに「盛を極む」とあるのは、言外に武家の專横の極點を暗示し、徳川時代の最後の繁榮期を意味するものであつて、事實、この文化文政の頽廢的風潮は、かの綱吉の元祿時代の再來にすぎなかつた。徳川幕府は、中興の名主と云はれた八代將軍吉宗の時代が、眞の全盛期であつて、その後、松平定信の寛政の改革も、小野忠邦の天保の改革も、その退潮の趨勢を阻止することはできなかつた。山陽が知遇を得た松平定信が老中となつたのは天明七年、即ち山陽が藩の學問所に入所した八歳の頃であつた。徳川十五代史に、「文政より天保の初に至りては天下の事殆んど憂患に堪へざるものあり、……そもそも徳川氏の治、是に至りて二百年、文恬武嬉、太平の觀を極むと雖も、其實は衰頽、危亂の胚胎する所、皆此公五十餘年の間にあり」と云つてゐる通りで

ある。

山陽の時代は、すでに德川幕府が、その末期的頽廢期に入つた時であり、革新的胎動のたかまつた時である。この點に於ては、山陽の時代卽ち、寛政、享和、文化、文政時代は、すでに幕府政治の舊體制は矛盾に滿みて內部的に崩壞の運命にあり、そこに國內新體制への動きが顯はれて來た轉換期であり、今日の時勢と相通ずるものが少くない。

2、鎖國と經濟政策

德川の幕府政治は、鎖國政策を重點とし、ただ國內と國外との交通を遮斷し、國內の封建制度を督勵して、諸大名を人質として參勤交代せしめたばかりでなく、全國民を島國の中に監禁同樣にして、日本國民のすべてを德川幕府の人質とする武斷政治であつた。鎖國政策は決して日本國家の全體のための政策ではなく、ただ德川幕府のための政策であつた。德川幕府の政治經濟の全體制は、一から十まで幕府至上主義であつた。もともと日本人は、海外雄飛的な國民であり、外來文化を攝取してこれを消化してゆく特性があつたにもかかはらず、豐臣秀吉がわが國民性に卽して海外發展策をとつたことは反對に、逆に國民の進取的性格を去勢してしまつた。これが德川

幕府の平和主義であつた。もとより當時の國民は百年間も戰亂の中にあつた後であつて、德川初期には平和主義を謳歌したであらう。しかし、日本國民の待望した平和は、潑剌たる生きた平和であつて、監禁された平和ではなかつた。留置場の中の無事太平ではなかつた。

もしも德川時代といふ三百年にわたる禁足政治がなかつたとしたら、或は支那事變も東亞共榮圈の確立も、既にわれわれの先祖の手によつて完遂されてゐたのかも知れない。今日、われわれ國民が、未曾有の難局に直面してゐるその遠因は、皇國の道にもはづれ、國民性にも添はない德川幕府の利己的政策の中にあることを知らなければならない。

それとともに、鎖國三百年の間に歪曲された、不具的な盆栽のやうに生氣の乏しい文化や藝術や國民の性格をもつて、眞の日本精神だとか日本的性格とすることはできない。殊に教育界などでは、何となく消極的な性格を日本的なるものとする嫌ひがあるやうであるが、この大國民錬成の教育再建の時にあたつては、眞に理想的な日本的性格は鎖國的、島國的な歪曲を超克したものでなければならない。

德川幕府が、朝廷に對し奉つても、また萬民に對して、この自衛的な鎖國主義をもつてのぞんだことは、決して國家本位といふことはできない。

今日の新體制下の日本にも、幕府政治といふやうなことが、政界で言はれてゐるのは、警戒すべき點である。

しかし、かくの如くして、徳川幕府が强制的に作つた三百年の太平は、實は擬裝の平和であり、虚僞の太平であつて、三百年の太平はその當初から、内部的崩壞を豫約したものであつた。この時代には、「斬捨御免」とされたものは、ひとり四民のみではない。大名もまた蟄居、國替、減石、斷絶、まつたく幕府の意の儘であつた。かかる虐政が眞の平和國家を建設し得る筈はなかつた。徳川幕府の制度の完備したのは三代家光將軍の時代であると云はれてゐるが、その以後は衰亡へ、崩壞へと進んでゆくばかりであつた。

鎖國政策の結果は、先づ何よりも經濟的に幕府政治は衰退せざるを得なかつた。

菊池寛氏は「二千六百年史抄」の中で、かう述べてゐる。

「秀吉は、聚樂第の造營や大佛殿の建立、大阪、伏見の築城、朝鮮出兵と、華美好きに任せて莫大な費用を使つたやうに見えてゐて、少しも金には困らなかつた。大阪城が陷るまで、秀吉が蓄へ置いた金銀は、家康を怖れさせたといふのである。家康は、あれほど質素儉約を旨とし、金銀の貯蓄に努めながら、彼の死後四十年で早くも財政の窮乏に苦しんでゐるのである。

だから、秀吉の天下は、制度や法令の力ではなくて、財政の力で支へられたと言へる。しかも、その有力なる財源は外國貿易に依つたのである。

それを江戸幕府は、何故鎖國したか。表面の理由は、キリスト教が口實になつてゐるが、事實は、海外からの活氣ある自由な商業資本主義的風潮が、土地と農民を經濟的基礎とする封建制度を、侵蝕すると信じたからである。徳川封建制度を維持して行くためには、日本を永久に農業的鎖國にしておく必要があつた。」

かの鎖國の端緒となつた島原の亂にしても、キリスト教を禁ずるといふよりは、信徒がポルトガル人と共謀して幕府を顚覆しようとしてゐると言はれた爲である。かくして鎖國は同時に貿易の不振となり、やがて幕府の財政紊亂となつた。

かくして、天災、火災や大飢饉は頻々として起り、綱吉はじめ將軍の驕奢失敗があり、金銀などの産額は減少し、正貨の海外流出は甚しく、幕府の財政は、窮乏の一路をたどつた。この間に幕府は徒に貨幣の改鑄を行つて遁縫したが、その惡貨のためにますます財政は紊亂した。

四代家綱の時代には、幕府の金藏には小判にして三百八十四萬七千百九十四兩三分が藏されてゐたといはれるが、綱吉などはすでに十萬兩の費用の捻出に窮して日光參拜を二度まで中止した

と言はれる。八代將軍吉宗は中興の名主と云はれて財政も漸く建直つてゐたが、その沒落は更に財政の窮乏となり、田沼意次の時代にはその極に達した。十一代家齊となつて、松平定信が老中となつた頃は、幕府の倉庫は殆ど空乏し、大阪府庫には常備定額二十萬兩のところに實在高は僅かに二萬兩前後であつたといふ。

しかも、綱吉とか家齊のやうな驕奢を極めた將軍が、三十年も五十年も在職し、加ふるに、外艦の脅威から砲臺や造船などの海防費を要するやうになり、幕府の歳入はいよいよ減ずるにつれて、歳費はますます多端となり、それだけで幕府政治は崩壞せざるを得なくなつたのである。

綱吉などは二十四家百四十餘萬を取潰したといはれるやうに、幕府の財政窮乏は諸藩の窮乏となり、特に參勤交代のための入費は、諸大名を惱ました。その結果は農民への苛斂誅求となり、やがては米騷動や百姓一揆などの勃發となつた。百姓一揆は鎖國時代の必然的產物で、慶長八年以來、總計千二百四十件の多數に及び、山陽の少年時代、天明年間、八ケ年の間には百十四件に及んでゐる。山陽と交友の深かつた大鹽平八郎が、大阪市民の窮乏を救はうとして一揆を起し、鴻池其他の富豪を掠奪し大阪城の府庫に迫つたのは、天保八年で山陽の死後五年目の出來事である。なにしろ鎖國政策を取つてゐる德川時代には、饑饉でもあれば密輸入の外には、外米の輸入

ができないので、四民の困苦は一通りではなかつた。德川時代三百年を通じて、殆んど人口の增加がないばかりか、農村などでは却つて人口は減少した。山陽の生れた安永九年から天明六年までの六ケ年間に、農業人口の減少は百四十萬に及んだと松平定信は云つてゐる。家齊將軍などは、一人でその子が五十人以上、百人以下と云はれてゐる一方に、この德川時代の人口減少の原因は、民間に墮胎や間引の一般に行はれたためでもあるが、總じて食料的に監禁された鎖國政策の結果である。

かかる間に、國內經濟の實權は、非生產的な武士階紙の手から、大阪町人をはじめ、新興の豪商の手に移動したのである。德川の初期にも熊澤蕃山は「今は大小名とも借銀が多からざるは稀である」と云ひ、中期には荻生徂來をして「今の世の諸侯は大も小も皆首をたれて町人に無心をいひ、江戸、京都、大阪、其外處々の富商を憑で、其の續け計にて世を渡る」と云はしめ、現在大名の借金高は、日本國中在金高の千倍に及ぶだらうと徂徠をして歎息せしめた。

かくて、「大阪の豪商一度怒て、天下の諸侯懼るの感有り」「鬼神を畏るる如く、士を忘れて町人に俯伏し」と云はれる士道頽廢期となつては、幕府政治の威信も地に墜ちる外はなかつた。

以上のやうに、鎖國政策を重點とする德川幕府の經濟政策は、あらゆる方面から破綻を來した

のである。國を經濟的に獲る政策でもなければ、國民のためのものでもなく、その第一目標たる幕府自身さへも防護することができないものとなつた。即ち鎖國的な舊體制は、經濟的に崩壞に頻するに至つた。

賴山陽が生れたのは、就中、幕府政治の凋落體制にある家齊將軍の時代である。中興の名主、吉宗の退職後、家重を經て、家治將軍の時代には、有名な田沼意次が側用人から老中に拔擢されたが、これは山陽の生前五年のことであり、その子意知が若年寄に進んだのは、山陽四歲の時である。この時代には、折角の吉宗の享保中興の治が破壞され、上下ともに諂諛の弊風があり賄路は公然と行はれた。その後老中松平定信の寬政の治があつたが、すでに幕府の經濟は崩壞してゆく一方で、天明の大飢饉、天保の大飢饉などがあり、當時は、全國的に疲弊狀態であつた。しかも、老中松平定信は大いに緊縮政策をとり、勤儉貯蓄を奬勵し、文武を重んじて士道の昂揚をはかつた。蜀山人が、「文武と云つて夜もねられず」と皮肉をとばした時代である。

民風の改善から思想統一の政策まで、寬政の治は、形式的には現代のそれに似通ふ點が少くない。そして表面の太平の底には窮民の增加があり、百姓一揆が頻發し、他面には吉原その他の遊里の殷賑があつた。

次の俚諺は、當時の世相を如實に物語るものである。

世に逢ふは、道樂者に奢り者、
ころび藝者に山師運上

世の中は　諸事御尤も有難い
御前御機嫌さて恐れ入る

世に逢はぬ武藝學問　御番衆の
ただ奉公に律氣なる人

かうした時代は、山陽のやうな「迂拙男兒」にふさはしい世の中ではなかつた。

菊池寬氏の「新日本外史」には、當時の世相について「江戸城中の大奧生活も、源氏五十四帖の極彩色繪卷をくりひろげたやうな觀があつたし、江戸市民の遊蕩も、吉原の太夫、陸場所、假宅、湯屋、矢場、そして深川の「羽織」を生み出した。天保十二年に家齊の逝去の後、水野越前守が、天保の改革といつて風俗警察に傳家の寶刀を拔いた時には、その「羽織」はすでに市中に二十三ケ所、五百七十四軒、その營業によつて生活する者六千九百二十二人、遊女の數が四百八十一人となつてゐた」とその惰弱な世相を語つてゐる。かうした時代的背景を考へることなしに

は、山陽の思想も性格も正しく理解することはできない。彼もまたまさしく時代の子にすぎない。もつともよく時代に作られたものが、またもつともよく時代を作るのである。

3、山陽の民政論

山陽はかの自分の肖像への自賛の中で「此の口、殘杯冷炙を餂しとすること能はず、而して此の手、黔黎(人民)の寒餓を援けんと欲する也」と述べてゐるやうに、「皇民の寒餓」こそ彼の重大關心であつた。

ただ彼は文士であり歴史家であつたから、その經濟論や財政策については、佐藤信淵や二宮尊德のやうな卓見はなかつた。しかし具體的な經濟論を持たなかつたとしても、彼は詩や歴史を通して、人民の寒餓を援けんとした熱意は否むことはできない。殊に當時の老中松平定信に對しては、父春水とともに限りない尊敬を拂つて居り、その節儉政策に關心したことはいふまでもない。彼は松平定信が老中を退いてからも、再びその出馬を希望する意見を述べてゐる。

彼は時務に就て論じた「新策」は、晩年の作であるが、その中でも、「民を治むるには、簡を貴び煩を貴ばず。苟くも君相治を願ふの心をして、誠實物に孚あらしめば、大小の吏盡く其の心を

體す。則ち其の舊に因て而して之が意を加ふ。要するに貧民をして流亡に至らず、富民も亦其の産を破らざらしむ。田野日に闢け、汗萊日に埋り、均しからざるを患へず詳かならざるを患へず、而して計贏る」と比較的、穩健な重民の意見を述べてゐる。

彼は重農主義ともいふべき立場で、德川幕府の苛斂誅求を難じて「吾邦の民、古に生れず而して此時に生る。何ぞそれ不幸なるや」と論じ、米相場の弊を指摘し、惡貨を難じて「錢賤しければ則ち賈を傷め、物賤しければ則ち農を傷む。農の傷むは國の害也。賈の傷むは必ずしも國を害するものに非ざる也」と斷じ、水利や農民土着を論じてゐる。

山陽の民を重視する政治思想を、強くあらはしたものは、「日本政記」ではあるまいか。「政記」は「外史」とともに國民の勤王思想を昂揚した名著であつて、伊藤博文の跋に「此書を一讀して勤王の志を起さざれば、億萬年の古の事を知ると雖も何の益かこれあらん」とある。政記は、神武天皇から後陽成天皇に至る歴史であり、その時代々々に山陽の評論を加へてあるが、この歴史記事の大部分は、御歴代の天皇が、如何に萬民の生活を重んじた政治を行はれたか、そして德川幕府の政治が如何に皇民の生活を無視してゐるかを論評したものである。一例をあげると、卷之四の天正天皇の條には、次のやうな意味を述べてゐる。

「思ふに、天智天皇が天下を劃一して郡縣制に改められて以來、天武、持統、文武、天明、天正等の各御代を通じて改める事なく、其の舊政に從ひ、益〻修治して、國司、郡司を任命し、不當の利を得ることを禁じ、下の意志を上に通ずるやうにし、又軍政を明かにして、物品の度量を明定し、新に律令を制定された。かうした事柄は判定として其の效果を擧げたのであつたが、其の目的は一般人民を安心させる事以外には無かつたのである。民の君における關係は、水と魚、土と木のやうで、これがあれば生き、なければ死ぬる。故に民を保つのは自ら保つ所以である。我が朝廷の租稅を徵集する割合は、孟子のいはゆる二十にして一を取るよりも輕いのである。その上、御歷代政治の跡を見るに、洪があれば減じ、降雨がなければ免じ、傳染病の流行、種々の土木工事、戰爭が起れば、必ず租稅を全免又は半減され、更に租稅の貸與を受けてから十數年間も返還する能力のない者、未納者が長年續いたものがある時には、令を出して免除されるのが常であつた。かく民に厚く同情したのは、單に恩を垂れて民心を義理で結ばせようとするのではなかつた。かうしないで規定通りの租稅を取上げてゐたならば、民の力が薄くなり、民力が薄くなれば國の根本が弱くなるからであつた。その根本を强くしようと考へたならば必ず之に培ひ灌水しなければならない。十分に水を與へてさへも時には根が枯れない

とは云はれないのである。根があれば必ず枝がある。民があれば君がある。代々の天皇は此處に注意されたから、種々の場合に應じて租稅を免ぜられたのであつた。

然るに後世は大いにこれと異なり、有司は民を末であると考へて、出來るかぎり民衆に苦痛を與へ、無暗に租稅を取り立てて、自己の財產を增加する事のみ考へ、自分の欲を助けて益〻助けてくれる下役を才能あるものとなしたので、其の役人の方でも主君の意に應ずるため、人民を呵責し鞭撻したので、故鄕を脫して他鄕に逃れるものが每年增加し、田園も亦それに連れて荒廢したのである。

目前の一升か一合かを得ても、後日の億萬石を失つたので、遂に國は貧弱となり身も保ち難くなつた。これ一體誰の咎であらうか。故に私は民を保つのは自ら保つ所以であると云つたのである。一體、後世でも民を保つことを欲しないのではなかつたが、國の費用が足りないので止むを得なかつたのである。故に民を保たうと欲するには必ず自ら儉約、自ら模範となつて人を率ゐてゆくのが、上下共に滿足する所以である。代々の聖帝の時には民に勸めて諸種の穀物を植ゑしめ、蔬菜類まで粗略にさせず、賣買も後世のやうに金銀を用ひず、單に錢を止められたのであつたが其用に不足した例はまだ聞がない。其の理由はどこにあるか。聖武天皇の初年

に當つて今迄京師の人々は多く、枚や草で屋根を造つてゐたが、それは造るには困難であるが又破れ易いといふので、五位以上の人々、及び一般人民の中で、其の費用の辨じ得られる者は瓦で葺かしめた。嗚呼、世の風俗の質素であつたのは之程である。後世の人々が徒に金銀を貴んで、穀粟を賤み、上下共に常に不足を歎き、しかも農民は一日として肩を休めて休息する日が無く、毎日勞働してゐても貧窮を續けなければならない理由は、以上自分の說をよく考へて見れば自ら判明するであらう。」（原漢文、賴山陽集による）

これは政記の中の一例であるが、全篇がかうした重農國としての建前から書かれたものであり、外史とともに政記が、王政復古への國民的熱情に點火したのは決して偶然ではないのである。

「日本政記」こそ、彼が最後の肉體力を鼓舞して「僕、死ぬ覺悟にて著述を整理、議論は大抵了り候、紀事は死後にてもしれ申候」といふ悲壯な心境に於ける決死的著述であるか、しかも、自ら「しかし皆々、世道人心に關すること少からず」と述べてゐるに觀ても、彼の主著たることは明かであり、更に彼が、政記の終りに加へた大減稅論こそ、眞にこの青年歷史家の政治に關する最後の結論であり、歷史的遺言である。これについて彼は、「此の間、委頓（病氣疲れ）の極

政記の最末に、豐臣氏間竿の法（慶長族地）、先王の制を一變候事極論して徹頭徹尾の括りと致し候、此の精神は未だ死せずと相見え候」とある。

これには、前掲の文にもあつたやうに、天智天皇このかた、「二十にして一を取るよりも輕い」といふのが、慶長族地の法に依つて一變されたことを次のやうに論じてゐる。

「大田の法を一變し、三百歩を以て一段とし、一段に六十歩を加へ、又一歩に就き各二尺を縮めて、有限の土地を鞭撻し、以て故なきの財利を搜索し、尺數（人口）は舊に依りて稅額は百倍せり、……三百畝にして、三百六十畝の稅を取ることは、六十畝の稅を減じて可なり、六尺にして八尺の稅を出さしむることは、二尺の稅を減じて可なり、減ずる所少くして、澤する所は多く、民に於ては新たに賜ものを受くるが如し。而も我れ（當時の爲政者を指す）に於ては、上、天地に謝し、中にしては先天に謝し、而して下、子孫の爲に長久の福を祈らんこと、誰を憚かりて爲さざるか」

この「上、天地に謝し中にしては先王に謝し、而して下、子孫の爲に長久の福を祈らんこと、誰を憚かりて爲さざるか」といふ言葉こそ、山陽が、歷史家の立場からする民政論の據點であり、また山陽精神の眞髓である。そして、一介の史家が、千歲靑史に列することのできた理由も

また、そこにあるであらう。

4、山陽と大鹽中齋

彼が數多い交友の中に、かの天保七年、大阪市民の窮狀を默視し得ずとして遂に亂を起した大鹽平八郎があるといふことも、また決して偶然ではない。大鹽平八郎は字は子起、中齋と號しはじめ大阪の町與力であつたが、後には辭職して塾生を教へてゐた。山陽は中齋よりも十五六歳の先輩であり、その學問的立場も違つてゐた。德富蘇峰氏は「山陽が大鹽に交はつたのも、或は書籍借用の爲であつたかも知れぬ」と云つてゐるが、ふたりを死後までも結んだものは、學問でも書籍でもなかつた。中齋は陽明學者であり、山陽は陽明學を好まなかつたにも關らず、眞の知己として相ゆるしたものは、大鹽が町與力として、腐敗の極に達してゐる市政を容赦なく摘發し、その爲に辭職せねばならぬ程にも廉直であつた人物に傾倒したためである。

山陽と中齋とが交を結んだのは、文政七年九月からであつたが、その後はますます親密となり、大阪に行けば必ず中齋を訪ねて、國史を語り時事を論ずるのが樂しみであつた。はじめて山陽と中齋と逢つた時から意氣相投じたものであらう。その席で中齋所藏の趙子壁の描いた蘆雁圖

幅を山陽が欲しさうにしてゐたので、後に中齋はこれを山陽に贈つてゐる。

この時の山陽のよろこびは次の文章にあらはれてゐる。

趙子壁宿雁の圖に題す。

雁凡そ五隻なり。半ば睡り半ば起く。
大月將に落ちんとす。蘆花色無し。
上に七絕を題す。墨痕濕ふが如し。
余が初めて大鹽子起に見え。之を壁間に觀て色動けり。後、母を送りて浪華を過ぎて舟遊す。
子起同じく載る。酒間忽ち曰く、子、吾が宿雁を欲するかと。遂に舟を棧して其の家に至り、
燈を呼び出して以て貽らる。子起は能吏にして風流を解す。又能く愛する所を割く。此の幅、
獲やすからず。此の人も逢ひ易からず。子孫それ寶とせよ。

また別に「大鹽子起、蘆雁の圖を贈るを謝するの歌」を作つたが、それには、「子起は大阪府士、訟獄を與り聽き廉幹を以て稱らる。」とある。この「廉幹」こそ、山陽が中齋に傾倒した所以

であらう。

中齋が、山陽と逢つた時、「陽明全集」を出してこれを讀むやうに奬めたので、山陽も、それを借覽して、「儒と爲り佛と爲る姑く論ずるを休めよ。吾は文章の古聲多きを喜ぶ。北地粗豪、歴城の險、輸し盡す講學老陽明」などと詩を作つたりしてゐたが、後には盛んに陽明學を研究し、陽明の傳習錄を精讀し、「吾が友、大鹽子起、王學をこのむ。吾未だ曾て與に學を論ぜざれども、其の人豪傑、まさに此の學を以て、用に適すべきを知る。用に適すればこれ可なり。其の必ず、口を良知に藉りて以て恣睢（ほしいまま）を爲すこと、明清の間の王學者流の如からざるを知るなり。」と述べてゐる。もはや自分が陽明學に對する好惡を問はず、學派よりも人間を信じてゐたのであつた。

山陽が或る時、中齋を訪ねると、中齋は役所に出かけようとしたところであつた。山陽は留守の書齋にはいつて、詩を書いてその壁にはりつけた。それは「大鹽君を訪ふ。客を謝して衛に上る。此を作り之を贈る」と題したものであるが、その詩の中で、「衛に上りて盜賊を治め、家に歸りて生徒を督す。獰卒、門に候ひ裁決を取る。左塾なほ聞く咿唔喧し。家中、鬻獄の錢を納れず、唯だ粼々たる萬卷の書あり。自ら恨む仔細に讀むの暇あらざるを」などとあり、終りに「詩

を留めて壁に在り君且つ視よ」とある。これだけでも、二人の厚情が形式的なものでなかつたことが解かるではないか。

中齋は容易に藏書を他人に貸さなかつたと云はれるが、山陽にはよろこんで貸した。「讀史管見」をわざわざ門人を遣はして貸してくれた時は、山陽は、「書を借るも一癖、假すも一癖、恡嗇、古よりすべて斯の如し。誰人が能く君の如くに忱諾せん。專使來り送る期を愆らず、況んや吾が借る所は君が讀む所、大嚼を輟めて羊肉を分つが如し。」とよろこび、「一燈分照す兩人の心」と感謝してゐる。事實、兩人は肺患さへも分つてゐる。

その後、山陽が「日本外史」を書きあげると、中齋も讀みたいと云つて來たので、山陽は自ら一部を寫して贈つた。そこで中齋は何か御禮に贈りたいと山陽に問合せると、山陽は、他ならぬ君の事で何もいらないが、是非にとあらば君の佩刀を得て自分の守り刀としたいと云つたので、中齋は名工月山の作になる短刀を贈つた。

この時、山陽が、謝意を表して親友中齋に贈つた詩こそ、筆を劒として立つ山陽の心境を知ることが出來る。彼は文章は、文字を兵とする戰ひであるとしたが、ここには筆劒一體の意が謳はれてゐる。

その詩は次の通りである。

大鹽君士起、吾舊著外史を索め、答ふるに其の佩刀を以てす。刀は名工の造る所。隨撰の以て之に當るに足らず。慙悚の餘り、此を賦して謝し奉る。

吾が書三千餘萬字、博し得たり君が家の兩尺鐵、廉明の佩ぶる所、妖を避くべし。之を服して身を護り、長く失はず。

君が刀は、姦邪を斬るを經るを疑ふ、魚腸の紋は、血痕を雜へて亂し。

吾が書は、字々すこぶる此に類す。これはこれ千古の英雄の血。

血は新陳あるも、意を用ふるは同じ、素心相照すふたつながら氷雪。

刄は研を發する如し、吾が藏紙に付す。

未だ甑を覆はざれ、君を倩つて閲す。

吾が心を觀て、吾れ君が心に佩ぶ。

百歳、蠹せず、又折れず。

山陽と中齋との親密さを語るものに、九節杖の話がある。文政六年、山陽がその師菅茶山の喪

に行つた時、師の遺物として貰つたものの中に、茶山の生前愛用した杖があり、これは九つの節のある布袋竹の杖であつたから、「九節杖」の銘があつた。しかるに山陽はこの師の形見の杖を歸途、大阪附近で紛失した。そこで山陽は大鹽中齋にこのことを話して捜索して貰つた。中齋は職掌柄、ただちに下役に命じて、その杖を發見することが出來た。これに對してまた山陽は中齋に御禮の詩を送つたといふ逸話がある。

後に、この杖と詩とが別々の人の手にわたり、詩を得た人が杖を讓つて貰ひたいと交渉して容れられず、杖の畫を描いて貰つたといふやうな好事家の逸話もある。

これもまた、山陽と中齋とを結ぶ美しい挿話であらう。

山陽と中齋の最後の會見は、山陽の歿する天保三年の四月であつた。この時、兩人は大いに飲み大いに談じて、別れることを知らなかつたが、中齋はこの時、自分の新著、「古本大學劄記」の原稿を出して山陽に讀ませ、山陽は出版の上は序文を書かうと約束した、しかるに、その年の九月には山陽の病氣が次第に重くなり、中齋はすぐ京都に行つて山陽の家を訪れたが、すでにその時は、山陽は歿したあとであつた。中齋は悲歎に暮れて、悄然と歸阪した。

後に中齋は人に次のやうな意味のことを語つてゐる。「山陽は詩文の人で歴史家であるが、自

分はもとは與力であり陽明學を講ずるものである。世間では山陽と自分とは相容れないやうに見えるが、しかも互に往來の絶ゆることはなかつた。自分が山陽をすきなのは、學問ではなくてその膽力であり識見であつた。自分に何の觀どころがあつて山陽が自分をすいてくれたかは初めから自分にはわからない。」

中齋は自分のどこがよくて、山陽が自分を好いてくれたかわからないと云つてゐるが、兩人は眞にその思想的態度、天下國家を憂ふる氣概において一致したものであることは明かである。

後に、いよいよ「洗心洞劄記」の版が出來あがつた時、序文を書いてくれる筈の知己山陽が既に他界してゐたことは、どんなにか中齋を悲しませたことであらう。中齋はせめて山陽の忘れがたみである聿庵が、江戸からの歸途、訪れてくれた時、劄記を示してから云つてゐる。

「我を知る者は山陽にしくはなし、我を知る者は卽ち我が心學を知る者なり、我が心學を知らば則ち未だ劄記の兩卷を盡さずといへども、なほこれを盡すが如きなり」

そして後に劄記二卷を聿庵に贈つて「御先人樣もし御存命に候はば跋煩し奉り候て議論の上、宿志の處、蹉跎相成り、是非天下の不幸に候、貴君樣、御先人樣の御血統故、一部二冊、僕自述惑問の儘、進呈仕り候、暇日御一閲も下され候はば大悅仕候」といふやうな手紙を添へた。

かくて山陽と大鹽中齋との交りは、實に死後にまでも續いたものである。

最後に、山陽が中齋をいかに觀てゐたかを語るものに、文政十三年九月、中齋がその先祖の今川義元の墓を弔うために、尾張に行く時、山陽が中齋に送つた送序がある。中齋は、何の觀るところがあつて山陽は自分に善くしたかと云つてゐるが、山陽こそもつともよく中齋を知るものであり、もし山陽が生きてゐたとしたら、中齋の亂も諫止したかも知れないと云はれてゐる。眞に肝膽相照らす同志であつた。

なほこの送序は當時は當局を憚るところがあつて、前半の大部分は伏字となつてゐたといふことである。次の一文こそ、山陽の熱情をこめた大鹽平八郎評傳であり頌德表であると共に、山陽の大阪市政觀でもある。

大鹽君子起の尾張に適くを送り奉るの序。

方今、海内の勢、三都に偏す。三都の市、皆、尹あり。而して大阪は最も劇しく且つ治し難しを稱す。蓋し地濶絶大、府にして商賈の窟する所となる。王侯共の鼻息を仰ぎ、以て喜憂となすに至る。更迭、常ならず。乃ち屬吏、子孫に襲ぐ。故事を諳んずる事、常故の如し。而して尹、之を成すを仰ぐ。成れば賄を以て上に蠹し、下に浚へ、猾賈と結び、閭閻を延き、黠

民、爪牙となる。乃ち、藩服要人、或は之が支黨となり、聲氣、交通するに至る。尹は心に之を知る。而して主客の勢懸る。苟嬾傍觀、吏は良ありと雖も、衆寡敵せず、浮沈、容を取るのみ。近時に至るに及んで乃ち、吾が大鹽子起あり。吏群に奮ひ、獨立撓まず、黨、其の姦を治め、國家の爲に二百餘年の弊事を祛くと云ふ。蓋し上に高井君の尹となるあり。能く子起を用ひ、子起も以て其の手足を展ばすを得るなり。子起の始め密命を受くるや、自ら度り事濟め國を補ふ。濟されば家を破る。家に一妾あり、之を出して累なからしむ。然る後、籌を運し策を決して親信を指顧す。發摘は意外に出づ。其の封家長蛇となる者を斃し、首を梟べ戮に就く。內外股栗。乃ち其の臟を擧げ三千餘金を得て曰く。是れ民の膏血、盡く之を小民に給すべし。因て煢獨を振濟するの法を建つ。事、已丑の春に在り。是より先、丁亥、妖民の蕃教を持する者を治め、盡く種類を抉く。庚寅、又浮屠汗行者を汰し、先づ戒勅を申す。悛めざる者は流竄す。群邪屏息、京畿の諸衙に至り、風を承け、貪墨を黜し、公廉を奬む、此時に當つて、子起の能名は三都の間に震ふ。其の名を呼ぶに至り、以て相恍る。而して今玆七月、高井君は老を告げ代を請ふ。子起作して曰く。君が退く、君いづくんぞ敢て獨り進まんと。遂に意を決し力めて退を請ふ。允を得、聞く者は驚駭せざるなし。野人、賴襄あり。獨り曰く、子起は固より

當に然るべし。然るにあらざれば、以て子起は固より當に然るべし。然るにあらざれば、以て子起となすに足らず。吾が知る彼は、其の心は壯にして身は羸く、才は通じて志は介なり。功名富貴を喜ぶ者にあらず。喜ぶ所は閑に處し書を讀むにあり。吾れ嘗て其の精明を過用し、銳進して折を易ふることを戒む。子起も深く之を納る。而して已むを得ずして起る。國家の爲め奮つて身を顧みず。而して已に然らずんばいづくんぞ能く、壯壯の年、衆望の翕屬する時にあたり、權勢を奪ひ去つて毫も顧戀なからんや。ただ然り。故に其の任用に當り、請託を呵斥し、苞苴を鞭撻し、凜然として、之に望む者をして寒氷烈日の如くならしめ、以て此の效を成すを得るのみ。故に子起を觀るは、其の敏に於てせず、其の廉に於てす、其の精勤に於てせずして、其の勇退に於てす。聽く者は以て然りとなす。子起の家系は尾張に出づ、同族あり。今まさに往て之を省せんとす。身命兩ながら全し。國に報じ家に報じ、其の先墳を拜す。以て告ぐるあるべきか。時まさに秋なり。龍田に路し中瀑を過ぎ、また高雄栂尾の諸勝をたづねんと欲す。韝を脫するの鷹、鞚を卸すの馬の如し。其の俊氣健力を餘し、自ら空を擊ち、野に騁す。快きこと如何ぞ。襄は故に此を言ひ之を奬め、且つ預め其の再び輔に就くこと勿れと囑す。文政十三歳在庚寅。秋九月

この一文は、中齋にとつては割記の序にまさるの知己の言であり、人間中齋にとつての序文といふべきであらう。そしてこれは、中齋が出版した「洗心堂割記」の附錄として載せられ、兩人の魂の握手は歴史的に錄されてゐるのである。

山陽は、必ずしも過激な破壞による革新主義者ではなく、むしろ大義名分を明かにして徐に改革しようとする穩健な改良主義者であり、德富蘇峰のいはゆる「保守的進歩黨」にすぎなかつたけれども、この大鹽中齋との魂の共同戰線は、ひとしく改良主義、進歩主義者と云つても、その底には烈しい情熱があり深刻な世界觀をひそめてゐたものであらう。山陽のやうに、歴史に通じ歴史に生きるものには、歴史や社會を無視するほどの主義思想の飛躍はできなかつたであらうし、彼の全我的な勤皇思想は、また國の安危を顧慮しないほどの實踐の飛躍もゆるされなかつたであらう。彼は事實、あれほど强烈な幕府政治の批判者でありながら、必ずしも倒幕論者ではなかつたのもそのためであらう。

5、山陽の經濟觀

山陽の經濟新體制觀は、いかなるものであつたかについては前揭の減稅や貨幣論、その他の重農的政治觀などが「新策」に散見される程度であつて、體系的な思想を知ることはできないが、ここに彼の經濟觀を裏づけるものとして、彼の經濟生活を管見することも、あながち無意味ではあるまい。彼が五十年の生活を通じて經驗した經濟生活の足跡は、やがて彼の書かれざる經濟觀であり、また身を以て描いた經濟思想である。

山陽はその青年時代には、そこには複雜な同情すべき理由はあつたにせよ、とにかく桁はづれの遊蕩兒であり、消費青年であつた。そして「四角」と呼ばれたほど嚴格な儒官父春水の子でありながら、しばしば遊里に豪遊し遂にそれが爲に廢嫡され、禁足されるまでに頽廢的なものがあつた。そして文字通り「不良」と云はれ「札附」と罵られる彼であつた。

この彼の遊蕩的一面は、後には克服されたけれども、文化文政期の頽廢青年としての一面をあらはしたものであらう。しかしながら、この彼の遊蕩青年としての一面をもつて、彼はただ世間なみのだらしない文士の消費生活と同視することはできない。もとより現代の文士がすべて、經濟生活がだらしないといふことは云はれないが、從來、とかくさういふ經濟的に放縱な生活をもつて、文學的であるかの如く觀なされたこともあつた。

山陽の場合には、この遊蕩癖も、少くも彼が青年時代のことで、晩年に到るに從つて、道德的に錬成されて、修身教科書に載せられるほどの孝子となつてゐる。眞に酒を飲みはじめたのは三十九歳からと云ふから、彼が青年時代の豪遊と云つても、それはかならずしも甚大な浪費を伴ふものではなかつたかとも思はれる。市島春城氏の言によれば「山陽の青年時代、盛んに狹斜に出入した頃は、餅を嚙り茶を啜つて、性慾の遊びをしたらしい。」とある。もつとも、盛んに遊蕩した寛政十一年（山陽二十歳）の三月廿九日には、夜九時頃、泥醉して歸るといふ記事があるから、青年時代に全然、酒を飲まなかつたとは云はれない。

山陽はただ單に、消費する、徒費するといふ消費的一面のみではなく、更に多く稼ぎ、多く貯蓄するといふ勤儉貯蓄の一面があり、多く稼いで、多く費ひ、そして自主的、獨立的な經濟生活を樹立してゆくといふのが、彼の理想であり、それを實踐をもつて裏づけた人であつた。從つて彼は文化文政の消費的一面と、松平定信流の勤儉的一面とを併せて、酒豪、文豪、そして一介の浪人に似合はぬ堂々たる經濟生活を送ることが出來た。

彼は、酒豪であるばかりでなく、食道樂であり、また女道樂と云はれる面もあつた。多く費さざるを得ない過剩エネルギーがあつた。彼の萬人を動かす名文名詩は、ただに禁酒禁煙の產物で

はなく、また人一倍のガソリンを必要とした。彼はよく酒を飲みながら詩を書いたと云はれ、また口腹には贅澤であつた。いはゆる粗食し水を飲んで文章を書くといふよりは、「口は殘杯冷炙を餬しとする能はず」であり、「酒は伊丹の劍菱でなければ飲まず、肴は琵琶湖の鮮魚でなければ食はぬ」といふ彼であつた。

賴山陽の書籍、約千三百通を蒐集した德富蘇峰の言によると、その書翰を分類すると、酒と食物のことが六割、他は書畫骨董のこと、潤筆料其他の金錢に關することが二割、學問のことが二割であり、然かも學問のことの二割は四十歳以前であるといつてゐる。彼は酒ばかりでなく、煎茶でも、お茶菓子でも、「ぜんさい」でも好きであつた。餅も燒餅、小豆餅、阿部川の別なく好きであつたといふ。

とにかく彼は口腹の欲は盛んであり、彼が五十三歳の男盛りで歿したのも、口腹の不衞生、特に酒色の爲と云はれるほどであつた。しかし、彼が青年時代に遊興に馳つた時にも、自ら働いた金を費したと云つてゐるところなどは、また彼の自主的な面を語るものである。

山陽は「シマリ屋」であるとは、山陽研究家の一致するところである。

事實、彼は「酒ならば千里をもいとひ申さず候」といふ程の愛酒家であつた、一生、その臺所

に伊丹の酒の絶えたことはなかつたが、就中、「劔菱」と「泉川」を好んだ。しかし、それも殆どそのために酒錢を費すといふことはなく、「劔菱」と「泉川」の醸造元は、酒ばかりでなく同時に彼の金穴であつた。「劔菱」の醸造元の如きは、山陽から十數年にわたつて貰つた酒に關する書翰、三十幾通を保存してゐるといはれて居る。彼は錢を拂ふことなく、これらの醸造元のために書畫を書いてその潤筆料を酒にしたのである。

山陽の收入は主として、潤筆料であつた。山陽をして今日あらしめば、原稿料で巨萬の富を作ることが、出來たであらうが、當時では大文豪の山陽の心血をそそいだ文章でも一文の原稿料にもならなかつた。印刷術も幼稚であつたし、二十二卷の日本外史も、一々書いたり木版にしたりしたのでは、文豪の生活費となるやうなことはできなかつた。從つて文章を書くのは稿料のためではなく、全く勉强のためであり眞にその識見を吐露しようとする內部的必然に促されたものであつた。現に山陽も日本外史は、眞の同志でなければ讀ませなかつたやうである。かやうに稿料のためでなければこそ、千歲の後までも人を動かす力があるのであらう。原稿料と云へば、前記の「日本外史」を松平定信に献じて、集古十種二函と白銀二十枚を贈られた位である。彼は、これを「榮躍の至り」といひ家藏として子孫に殘さうと云つて喜んでゐる。もとより、松平定信に

日本外史を認められたといふ一事は、山陽にとつて百金千金にもかへがたきことであつたことはいふまでもない。

その他、外史の寫本の謝禮も少しはあつたが、山陽の生活費は、潤筆料であつた。彼は必ずしも天下第一等の書といふほどに、書道の上から立派なものといふことは出來なかつたけれども、其の書は藝術以上の氣魄や風格があり、優れたものは一幅一萬數千圓などといふものがある。彼の書はその文章と同樣、法にかなふといふよりは、萬人に迫る力があり、いはば民衆的であつた。しかし、山陽の書の熱愛者であつた橋本左內の評論によると、山陽の書は、初めは父春水に學び、後に蘇東坡、顏眞卿、その他、明や清の人々の眞蹟を臨書して、その原流を窮めたといふから、もとより全然書道を無視した自己流ではない。

その書や文の流行は、友人田能村竹田が「世を擧げて傳播す賴家の脚」といひ、篠崎小竹が「一二章出づる毎に人爭うて傳寫し、脞なくして千里を走る」といつたやうに、まつたく一世を風靡する大衆性があつた。土佐の山內容堂などは何から何まで山陽を崇拜し、自ら九十九灣外史と號して殆ど山陽と眞僞を見分け難いほど酷似した書體であつたと云ふ。彼の書がかくも世人に愛された所以は、彼が先づ誰よりも書を愛したからである。「一窓風雪、妻兒は臥す。筆を揮ふ、

窓前、紙聲あり」などといふ詩にあるやうに、彼は限りないよろこびの心境で書いた。先づ自ら愛情を持たないやうな書が他から愛されることはあり得ない。

されば、山陽はその潤筆料については喧しかつたもので、必ず潤筆料をとり、門人であつてもただでは書かなかつたと云ふことである。彼は書ばかりでなく繪も書いたが、有名な耶馬溪圖卷は門人橋本竹下のために書いたものであつたが、やはり潤筆料を得た。また彼が、各地に旅行したのもやはり、旅行先で書いて稼ぐためであつた。

山陽の潤筆料は、市島春城氏によれば、半切一枚の書が金一分、詩を作つて書く時は金二分といふ規定であつたらしい。しかし、潤筆の額を定める役目は友人の篠崎小竹であつた。山陽は自分では云はず、小竹にきいてくれと云ふ。すると小竹はこれは傑作だからこれ位の潤筆料をといふ風にして、小竹は山陽の宣傳役であり、マネージャーであつた。從つて山陽の潤筆收入は相當のものであつた。

主なる收入は、中京阪、中國地方の豪家であつたが、中でも前記、耶馬溪圖卷記を書いて貰つた尾の道の橋本元吉が、最も重要な後援者であり宣傳元であつた。その他、備中では長尾の小野泉藏、岡本太郎、やはり備中、小田の岡昌平、姫路の河合漢平、馬關の廣江殿峰、劒菱や泉川の

酒造家、中國で有名な文學者、浦上玉堂の子春琴などがあつた。これらは皆、豪家であつたから、ここに招かれては山陽が傑作を書くので、これが宣傳となつてその附近から揮毫を求めるものが殺到したものである。

かうして山陽の書の市價が高まるにつれて、彼も潤筆料については、汚いと非難されるほどきびしくしたものらしい。かつて、備中、倉敷の豪家の水澤家が、潤筆料をよこさないといふので、小野家に宛てた次の手紙などは、いかにもよくその間の消息を傳へてゐる。

其後は御遠々しく打過ぎ申し候、秋暑、そりやこそといふ程にひどく御座候、御平安に御凌ぎなされ候哉、四枚屏風など屆け申し候哉。扨て水澤、私方へ一度見へ、其の後アノ宿屋へ尋ね候處、頭痛とてことわり、其の挨拶やら暇乞やらに、又一度見へ、賴んで置いたものを取りにおこしに、取つて歸られ候なりにて、會釋と云ふものなし、尤も初謁の時、百疋あり、是で、皆書かせたる積りにや、アツカマシク候、書かせたる物左の如し。

鎭西八郎贊（四枚唐紙の卷）九日之詩（絹竪幅）、扇面五六枚、

此の外に此方より遣し候もの

横物絹地七律詩一幀、竹石畫竹並賛、

蘭畫（阿蘭陀）一小幀

金穴と仰せ下され候故、來る度に取つて置きの喜撰の茶などを手づから煮、アリヘイトフなどを食せ、側に有合ふ右の書畫などども遣し候。……此方より心付遣し候ものを、定價の如く取る所存もなけれども、御家柄を見かけてといふ浪人物の口上のごとく、何や角やにて五百疋と存じ居り候處（河東にて三百兩使ひ候由、其の三百分の一なり）一文にてならぬと云ふはあまり毒性なり。彼の小野垣子より畫資南鐐やすけれどもこれはこらへ申し候、水澤はだまつて居るは損の樣なり、白神平助はいつぞや絹地の會釋もなけれども、是は記文出來候上と存知候にや、此の度、竹石の賛上げ申し候、是を水澤へ御屆け下され、其の序に所謂穴御穿下さるべく候、（穴ツクと云ふ所に貴書中より來るなり）其のかはり貴家へ上げ候ものは、以來、必ず御心遣下さるまじく候。

又々書後申し候、水澤など、九月節前の間に合ひ候やう、何卒、御面倒ながら御世話賴み奉り候、事によれば此の秋あたり歸省仕りたく、其の時は三備にて、チト旅芝居（註、金儲の意味）を仕り候積りなり、されどもいまだ知れず、神邊など邪魔なるまじくや、利助などへも相談仕りた

く、何とぞアタリ申し候やう仕りたく、小利を見て大事成らざれば、ソコラは御考下さるべく候、水澤など其の儘に致し置き、下り候時タント仕事を致し候がヨキや。

市島春城氏はこの手紙について「交渉振は商人ソツクリとも云ふべきだ。」「金穴と思つたから云々のあたり、何ぞ、其の口吻の商人に似たるや」と云つてゐる。

かくして稼いだ潤筆料は、また更に其の金を預けて利殖の道を講じたものである。京都の鳩居堂とか備中の小野家などに、預金したものである。

潤筆料は督促がきびしく、文士でありながら貯金して産をなすといふのであるから、中には山陽をもつて、ただ金に目のない、守錢奴の如く非難さへされてゐる。しかし、すでに廢嫡されて脫藩して獨立し、野にあつて生活を營み、しかも膝を屈することなくして正々堂々と正論を主張してゆかうとする彼にとつては、當然の潤筆料を請求することは何等、非難に値しない。

彼はまたあれほどの學者でありながら、藏書は貧弱であり、それも容易に他人に貸さなかつた。必要な書物も自分の金で買ふといふことはなく、多くは金持の弟子に買はせたり、弟子から借りて讀むことが多かつた。開塾の時にも、文章軌範、康熙字典のやうな教材まで借本であつた

といふ。

彼がシマリ屋であるといふことの極端な例として傳へられてゐる話に、山陽は酒を呑む時、俗客が來るとまづいと稱して、必ず門を閉ぢたといふ。これは實は酒客を謝するためであつたといひ、また口の惡いものは、山陽の家で御馳走になつたといふと、「又鹽鰯だらう」と冷かしたといふことである。京都の藝妓がシマリ屋山陽を諷した歌に、

さて頼さんのおくものは、川魚に赤味噌、葱小口切、慈姑の丸だき、大根豆腐に雲丹うるか、駱駝に瓢單、伊丹酒

といふのが傳はつてゐる。はじめの「おくもの」といふのは好物の意であり、駱駝といふのは夫婦同行の意である。

山陽に關する逸話は、實に多種多様であつて、その書翰や書畫があまりに多くて眞僞の鑑別がむづかしいやうに、逸話もどこまで眞實を傳へたものか容易に判定しがたいものもある。從つて門を閉して酒を呑む逸話なども、どこまで眞實であるかわからないが、要するに、その青年時代の脱線生活の間にはつぶさに生活苦を嘗めつくした山陽である。彼が廿一歳の時、父春水の叔父傳五郎の葬式にゆく途中、香奠を旅費として脱走した時は、乞食と衣服を取り換へて行つたと

か、また各地で容貌の山陽に似た青年が路傍で軍談講釋をしては一錢二錢の路銀を乞ふのを見たものがあるとかいふやうな風説があつたことさへある。

青年期の山陽は、經濟的にはつぶさに苦辛をしたことは事實であらう。

したがつて、彼がしまり屋であり、金錢にずぼらでなかつたことは、彼として當然であり、文士はずぼらであるといふ常識を越へたところに、彼の合理的な批評家的性格がある。

しかも、彼はしかし、金にさへなれば、どんなものでも書き、どんな人の依頼にも應ずるといふ賣文の徒ではなかつた。彼は毛利家をはじめ、有栖川宮家、本願寺、その他の京阪地方の富豪の依頼に應じて書いたが、しかし大名であれば誰でも應じた譯ではなかつた。かつて古賀穀堂が、その藩主鍋島侯の爲に畫を描いてくれと江戸から、わざわざ絹二幅を送つて依頼して來たことがあつたが、山陽は自分は畫師ではないと「此の心まさに故人の識るあり、敢て侯門に向つて畫師と喚ばん」といふやうな詩を作つて之を辭つてゐる。

「此の膝、諸侯に屈せず」を主義とし、一家の識見を保持し、しかも獨立生活を營むのためにこそ、彼はしまり屋と云はれるまでの節儉生活が必要であつた。廉潔こそ批評家山陽の身上であつた。徳川幕府のもとにあつて露骨に倒幕論を立唱しないまでも、熱烈な勤王論を説く彼が、或

る程度までのしまり屋でなかつたとしたら、文化文政の消費時代に、堂々と京都に門戸を張つて全日本を睥睨してはゐられなかつたであらう。また若し、彼がただに一身上のための利殖や安樂をもとめる人間であつたとしたら、あれだけの名門の長男と生れ、寢てゐても何百石かの知行にありつける藩の儒官の地位を自ら捨て去つて、浪人生活に入ることがあらう。彼は何もかも、無一物から一家をなしたものである。不良と呼ばれ不孝者といふ惡名を甘受して一介の浪人の地位から、出直して自己の地位を築いて行つたのである。この間の眞の山陽の心情は、永久に俗人の謎とするところであらう。

山陽のことでさへあれば、一から十まで偉大として崇拜するは、もとより山陽を眞に學ぶ道ではないが、彼の經濟生活には、文士としての新しい進歩的な面さへあるではないか。

彼は道德的にも青年時代には非難されるやうなことがあつても、成人するに從つて孝行者となり人格者となつたと同じやうに、經濟的にもいつまでもずぼらではなく、一介の文筆浪人でありながら、次第に經濟的に獨立し、堂々たる邸宅も自ら建築し、貯蓄をし、しかも老母の心をよろこばすために、各地に遊んだ旅費だけでも莫大なものである。出すべきものは、惜しまず出し、取るべきものは、堂々と取るといふのが、彼の經濟生活の法則であり、また出來るだけ多く稼い

で、出來るだけ多く費すのが、彼の經濟生活における足跡であつた。

彼は文化八年、三十二歳の時、はじめて四面楚歌の間に京都に塾を開いたが、京都には儒者が多くそれぞれ門戸を張つてゐるので入門者も少なかつた。當時京都では山陽は「京都に一城を構へたが、兵糧が續かないので遠からず落城するだらう」と噂されたものである。しかも山陽は叔父春風への手紙に「小儒無數、齒牙に上るに足らず」と獨り自らはげまし、更に「左樣かと存じ候へば、此の間は祇園の一青樓主人より一相識の儒生を介とし、樓上の十二景詩を乞ひ來り候。峻拒候所、某先生々々にも賜詩と歷擧致し來り候。都會には樣々の事御座候者に候」と歎いてゐる。

更に彼はその生活苦の中にあつても、出來るだけ早く、母と妹とを呼びよせて、安心させたいものと、その饗應費のために、文化九年の冬、播州に書畫の行商を試みた。この時の樣子を、やはり叔父春風への手紙で「此の行獲る所、大分御座候」といひ、「詩は俵にして、海運にて廻し候程出來、皆々賴まれ申し候畫賛類に御座候」と報じ「京住困窮もこれなく候故、廣大人など御安心下され候樣」と云つてゐる。しかも、この時の行商によつて得た金は、すべて馬場家に預けて費消せず、播州から歸るとすぐ京都の講會で得た束修月謝などは貯へて置いて、母と妹とを

迎へる準備とした。そして明けて文化十年正月元旦には、かういふ詩を作つた。

癸酉元旦

曉來、誰か我を喚ぶ。今日は是れ維晨、まさに賀客の來るあるべし。衣帶、出て屈伸す。先生、遽に起きず。坐食、且つ衾を擁す。隱者に貴ぶ所、臥起、其の身を縱にす。手足と眼耳と用ふる當に己が心に由るべし。姑く膝上の書を看る。門前の賓を謝す。門を過ぐるを喝道に聞く、知らず、何の官人なるを。

「隱者に貴ぶ所、臥起、其の身を縱にす。手足と眼耳と用ふる當に己が心に由るべし」とは、まことによく浪人生活の境地を歌ひ得て妙であるが、すでに多少の餘裕を持ちながら、母と妹とを迎へるために、自分は正月でも、門前の客を謝し、衾を擁して讀書してゐたといふのであるから、徹底したものである。

なほ、當時、彼が、父の心配をも察して、父の友人に送つた手紙には、「國元に居候時とは違ひ、窮達、皆、自身の所爲に御座候故、決してうかゝ仕り候事はこれなく、播州下りなども彼

是と氣違ひ申すべく候へども、京都の書畫家、近國稼ぎは珍らしからず候事。又書生ばかりにても、衣食足らずと申すにてもこれなく候へども、少々餘計と存じ候へばか樣候事も爲さざるを得ず候。京阪にて二三年來、人に義理を闕き候程の事はこれなく」自給自足の經濟觀を述べてゐるのである。

彼の京都開塾當時の生活狀態については、次の山陽研究家、木崎好尙氏の一文によつても窺ふことが出來る。

「文化六年の冬、廣島を去り、神邊へ向ひし時、その懷中には、どれだけの物があつたか、春水よりは無論若干の手當は給せられてゐたであらう。然しその出立間際に、宮島の祠職野坂梅園に事情を訴へ「あの方（茶山方）世話にて不足は無之事に候へども、また內々入用の義も有之」と言つたのは、父の手元からは、どれだけといふ程の支給を受けてゐなかつたかも知れない。このたびの京阪行入りにも、十六兩の用意はあつたが、それは獨力—潤筆か何かの收入でもあらう。今、春風へ送つた手紙には、京都に開塾右十六兩をそのまま小石家へ預けた中から、當座の二兩だけ引き出したが、大坂にて得た潤筆にて埋め合せ、今度改めて開塾した時には、「十人餘も聽講に入門、其內に百疋宛持參候もの五人ほど有之、先新店にては繁昌の方に

御座候。所獲も盡く小石へ預置候。懐無一錢候。」とあるから、その餘金もすべて貯金にしてあつた。九月十八日（文化八年）には小竹へ宛て「絳帳所收、幾一兩耳」とあり、一節季間の剩餘が一兩ばかりといふ意味で、緊縮に緊縮を重ねつつ獨立生活を營み、詩文の原稿用紙から手紙までも、すべて反古裏、講義用を始め、書物を利用してゐた。文化十年の春、春水の入京に、金壹兩を土産に貰ひ、それも無駄には遣はず、記念として青旦入りの書棚を求め、それが道具らしい道具の持ち初めであつた。ことし三四兩月（節季）の支拂九兩の外に「四兩三歩ほど餘り」それでめでたく五月の節句を迎へてと、小竹に報告してゐる。その頃、塾生は、四人の外に學僕も居り、その冬の、尾濃遊歷に臨み、暮れの節季には塾生の賄料に、別途村上義清文江への預金五六兩を合せて、不在中それを辨ずるやうに、小石家へ頼んでゐる。村上は備後神邊の人、茶山の知り合ひで、今、三條家の諸大夫を勤めてゐる。

春水の歿後、小竹宛の手紙に

「先年於貴家、五百目の銀を拜借の事、だれぞ（春水へ）申候歟、茶山に迄、それとなく、故郷の世話にならぬとて、他人に借貸（借金）候樣の事有之、恥をかきては不宜……其事御申渡可被下などと申遣候よし。臨終迄其事氣にかかりしと見へ申候。扨只惜事に存申候……先年

歸省候時も途中より返濟候程の事に候所、ワヅカの事にて、よみぢのさわりをさせ候事と存申候」それをきれいに返濟してあつたのを、春水は知らずに歿したことが殘念であつたといふ。

尾濃から參河へも廻り、伊勢を經て歸京した時には、この潤筆が十五兩位であつたことを、四日市の旅先から、樫園に報告してゐる。要するに獨立生活の資源は、主として潤筆料であつた」

これによつて、如何に山陽が、當時、きりつめた節約時代らしい時局型の經濟生活に徹してゐたかが、わかる。また、彼がその間に、いかに細かく貯蓄に心をくだいたか、そして借金に對しても如何に責任感が强かつたかが、證される。

更に、原稿用紙や手紙にも、すべて反古裏や書物などを利用したといふのは、光圀が反古紙まで大切にしたことも連想され、今日のパルプ飢饉時代の文筆業者にとつても大なる暗示があるではないか。天下國家の大事を論ずる心は、やはり日常の細かい心組によつて支持されるものである。

これは、京阪地方の當時の町人風の影響でもあらうが、開塾のことを「先づ新店にては繁昌の方に御座候」といふ諧謔まじりの表現も、經濟的な彼の生活態度を語るものであらう。彼の節約

生活は、誰からも强制されたものではなく、どこまでも自主獨往の節約形態であつた。

かうした彼は、早くも三十五六歳の頃は、豐かな獨立生活を營むやうになり、晩年には幾度となく母を擁して各地に豪遊し、且つ他の出資もあつたが、文政五年四十三歳の時には京都三本木に堂々たる新居を構へて「水西莊」と名づけ、更に、四十九歳には、そこに、「山紫水明所」といふ書齋まで建てたのである。

彼は、裸一貫といふよりは、マイナスの中から立ちあがつて、少くも三十五六歳以後は餘裕ある經濟生活を送り、五十三歳で歿した時にも、遺族に若干の貯金を殘したのである。歿する二日前に、妻の利影女史から小野家に病狀を報じた手紙にも「昨年御あづけ申し上げ候金子、此月かぎりに候へども、此方は入用に御座なく、やはり御あづかり置き、利銀は御のぼせ下されたく、しよもん此の月とあり候へども、べつに御したためかへ下さる樣賴上候」とあり、すべて三口位は貯金があつたといふことである。これによつて、未亡人や遺兒の生活もある程度まで助けられたのである。

更に、彼が死後、今日まで、稼ぎ出した經濟的遺產は、むしろ無限の寶庫を築いたものと云ふべきであらう。今日、賴家の富はもとより、賴家が、松平家から受けた「日本外史」の版權讓渡

料でさへも、當時の三萬圓であり、今日、山陽の遺墨全部を時價に見積れば數千萬圓にも及ぶであらう。この點では、彼はひとり史學の天才であるばかりでなく、實に增產の天才と云はなければならない。そして、そこには、やはり偶然の現象ではなく、山陽の生活精神の中に、經濟的な一面のあつたことを裏書きするものではあるまいか。彼が一錢の原稿料も欲しなかつた日本外史の版權が數萬圓に値する時、明かに潤筆料を要求した書畫やこれに關する書籍の時價が、時代とともに天文學的數學にまでも騰貴してゆくことは、むしろ歷史的必然と云はなければならない。

經濟面から眺めた賴山陽は、その個人生活を通しても、日本精神に灼熱した山陽の書畫や著書を、より高く評價することの出來るやうな、皇國經濟組織への發展を暗示してゐるといふものであらう。思へば、松平定信が、德川幕府の重臣でありながら、倒幕の原書ともいふべき「日本外史」に白銀をもつて價値づけ更にそれに題字を與へて、世に宣傳したといふ最初の事實は、幕府政治と經濟の崩壞と、皇國政治經濟の出發に對する一大警報であつたであらう。

二、對外問題と山陽の國防觀

1、山陽時代の海防問題

徳川幕府の衰運は、もとよりその内部的崩壊、政治經濟の行詰りによるものではあるが、その内面的原因の外に、海内には勤王運動の勃興があり、海外には諸外國の脅威があつた。そして内政の行詰りも要するに、密貿易その他による外國の經濟事情と無關係のものではなく、世界經濟事情の變化に影響されたものであるから、勤王思想と大阪町人とが倒幕の二大勢力であるといふ觀方に歸することができる。いづれにしても、かかる二大勢力に對抗するには、封建鎖國の舊體制では、眞に國防國家の建設を完了することは出來ないのであつた。

當時の西洋史を瞥見して見ると、米國の獨立戰爭の起つたのは、山陽の生前五年であり、それの終つたのは山陽三歳の時である。米國の憲法制定は山陽七歳の時、フランス大革命の勃發したのは山陽九歳の時、ナポレオンのロシア進軍は山陽三十三歳の時で、ナポレオンがセントヘレナに流されたのは山陽三十六歳の時である。

かくして西洋史の上でも、第十八世紀末から第十九世紀初へかけての山陽の時代は、既に第十六世紀初めから頭を擡げた西洋の資本主義は、世界新秩序建設へと活潑な動きを見せ、かかる情

勢の下にある東海日本の鎖國的存在を脅かしてゐたのである。

即ち既に五代將軍綱吉の頃、ロシアはカムチヤツカをその手に收めてわが千島にせまり、女帝カタリナは日本語の研究をさせてゐた程である。徳川時代の極盛期と云はれた家齊將軍が太平の夢をむさぼつてゐた時代には、海外では英佛の產業革命、アメリカのフルトンの蒸氣船の發明が行はれ、最も早く東洋に進出したポルトガル、オランダを壓倒した英佛は、次第に東亞に進出し、フランスの安南占領、イギリスの印度攻略、阿片戰爭となり、北方からはロシアの黑龍江經營などとなつたのである。

寛永十三年の鎖國令以後、最初に通商を公式に求めて來たのはロシヤで、山陽の十三歳の時、即ち寛政四年九月、ラツクスマンを使とし、根室に我が漂流民を軍艦に乘せて來航、通商を求めた。しかし幕府はこれを許さず、長崎に廻るやうに諭したので、更に、文化元年（山陽二十五歳）九月、ロシヤのレザノフは、漂民を伴つて長崎に來て再び通商を求めた。しかし幕府は之れも許さなかつた。ロシアはそれからは、頻りにわが北邊を侵すやうになつた。また文化五年（山陽二十九歳）にはイギリスの軍艦がオランダ船だと詐つて長崎に入港し薪水を强要したので、長崎奉行松平康英は謝罪文を幕府に呈して切腹した。

また文政七年（山陽四十五歳）八月には、薩摩では捕鯨船の不良船員が上陸して牛を射殺して肉を奪はうとしたことがあり、遂に翌年外國船撃攘の令が下るに至つた。

かくして海防問題、國防問題は、ひとり幕府や諸侯にとつての大問題であるばかりでなく、全國民的な問題となつて來た。

幕府は今までは、諸侯や人民にのみ鎖國を命じ、日本の島國的孤立を幕府政治の眼目としたのであつたが、その鎖國の鐵壁は、内外兩面から破壊される形勢となつた。

かつて「江戸の日本橋より唐、阿蘭陀まで境なしの水路、此に備へずして長崎のみ備るは何ぞや」と「海國兵談」を著して海防の必要を説いた林子平が、幕府の爲に罰せられたのは、寛政四年（山陽十三歳）であつたが、今は幕府も海防は卽ちほかならぬ幕府政治を護る所以を知り、老中、松平定信をして房總海岸を巡視させ、近藤重藏に蝦夷地を巡察させ、高田屋嘉兵衞を先導としてエトロフ島に國標を建てさせるなどの狼狽ぶりである。伊能忠政が蝦夷地を實測したのも、この當時である。

今日、支那事變のさ中にあるわれわれが、防空演習といひ高度國防國家の建設といふのは、當時の情勢と似通ふものがある。鎖國令以後、敵に備へるとはすべて國内のそれであり、國防とは

藩と藩との國境であり、山や河が國防線であつたが、立體戰下の今日、われわれが海陸の國防の外に空の國防線を護らねばならなくなつたやうに、當時の國民は海防といふ新しい全國を打つて一丸とする國防線を護らねばならなくなつた。各藩を單位とする兵制はすでに新しい國防にとつては無力となつて全國的な國防と團體的な洋式の兵器砲術の研究が必要となつた。これこそ當時におけるいはゆる高度國防國家の建設であつた。

更に、今日の支那事變はひとり支那と戰ふのみではなく、援蔣の第三國と戰つて、東洋人の東洋へと、いはゆる東亞新秩序の建設を目標とするものであるが、今日、支那をはじめ全アジアにある英、米、佛等のアジア侵略の據點は、實に、この當時、日本が幕府政治の下に鎖國の冬眠を貪つた間に奪ひ去られたものである。

イギリスが阿片戰爭の結果、香港を獲得したのは西曆千八百四十二年であるから、山陽の死後十年のことであり、支那は既に植民地化へ第一歩を踏み出し、イギリスのために上海、厦門、廣東などの五港を開港したのである。

かくして、ロシヤは北アジアを、英佛は南部アジアを手中におさめ得たのは、全く鎖國日本の封建的な低度國防、むしろ無國防時代の出來事である。

かかる時代に高度國防國家を建設するためには、幕府政治もその兵制ももはや時代遅れのものとなり、ここに武家政治衰退の必然性があつた。今までの幕府には約二千人の旗本、五千人の御家人があつたが、これらは日本といふ國家を防備するためのものではなく、幕府を獲るための利己的私兵にすぎなかつた。また各藩にも數十萬の武士があり、若黨、中間、小者などもあつたが、これらも各藩の私兵とも云ふべきもので、各地に海岸に砲臺を築いたり、外國人と戰つたりすることはあつても、それは全體としての國防を强化するものとはならなかつた。水戸の德川齊昭などは後に大砲七十四門を幕府に獻じて當時の人々を驚かせたものであるが、しかしベルリンの黑船來の時にもなほ、手槍や火繩銃で沿岸を警備した位では、新しい國防の鐵壁といふことはできなかつた。

かうした時代の環境にあつて、熱血の青年、山陽は何と考へたであらうが。山陽はもとより政治家でもなく、ただ一介の浪人であり文士であり評論家にすぎないが、しかしかかる國家の情勢に對して無關心ではなかつた。

2、山陽の海防觀

六歳にしてすでに、空を仰ぎ天體の運動を觀て、天とは何かと突飛な質問をして母を困らせた彼である。少年時代から長久保赤水といふ人の世界輿地圖などに親しみ、生涯、旅行に興味を持ち、「夜靜かなり海濤三千里」などと歌つた彼は、史學家であるがむしろ山河を歌ふ地理詩人であつた。したがつて彼が、海防や國防に無關心たり得ないことは當然である。林子平の「三國通覽」も家の藏書の中にあつて、少年時代から讀んだやうである。

彼が十三歳の寛政四年、江戸にゐる父の春水から、奥州津輕の人で京都に住んでゐた大原雲卿が、蝦夷地探險にゆくことを聞かされて作つた詩がある。

旗を擧げて遠く出づ白河の關、
南部、津輕、道路の難、
威信、遙に罩む、三種の外、
選名、まさに播くべし、八州の間、
西より來つて、漸く入る蝦夷の國、
東を望めば終に無し、日本の山、
勤業隨つて成らん、中使令、

錦嶋、皮帶、何の時にか還る、

この大意は、「君は今幕府の命によつて、國旗を捧げて白河の關を出て、遠く南部、津輕の難所を越えて行くさうだ。我が國威はすでに三種の神器の日本國の外にもはるかに及び、選拔されてゆく君の名聲は關八州にひびきわたつてゐるのだ。西から漸く蝦夷の國に入ると、それから東にはもう日本の國はない。その國境で談判して使命を完うせられ、錦を飾り虎の皮の敷物で御歸りになるのは何時であらうか、その日が待たれる。」といふのであらう。

この大原雲卿は、同七年再び蝦夷に行くこととなつたが、山陽は廣島でそれを聞き、次のやうな文を作つてゐる。

大原雲卿の東行を送る序

ことし吾が識る所の大原雲卿、東北の幕辟（大名の招聘）に應じて、往いて其の賓僚顧問となる。方今、邊徼、其の互市は正面の一面に在り。而も防備の地方は別に在り、曰く西南、曰く西北、曰く東北、而して東北は最も重要たりと云ふ。東北に接するものは、大きさ、西南のものとに倍蓰し、強さが西北のものに什倍す。其の北には、又強さが此れに倍蓰し、大きさが此れに什陌するものあり。而して日本はこれに蔽はる。重要なるゆゑんなり。

ここに「互市は正西の一面」とあるのは「貿易は長崎の一港のみ」の意で、東北の方で日本を敵ふものといふのはロシアを指したのである。

また後に、江戸の洪水で永代橋が落ちたり各地に諸種の警報が頻々として全國に傳つたので、次のやうな詩を作つてゐる。

淫雨連旬、水潦漲る。

宣房、誰か識らん、福まさに殃ならんとするを。

玉關の符節、西域を謝し。

紫塞の版圖、朔方に通ず。

已に睹る、夷吾の糴價を平かにするを。

また聞く、吉甫の戒行を啓くを。

幾家の閨婦、邊報を遲つ。

唯願ふ、薇蕨の剛きに迫ばさるを。

この中で、「宣房」といふのは、漢の武帝が黄河の洪水の時、河を塞いで宮を築いて水神を祭り殃變じて福とならんことを祈つたといふ故事でその宮を宣房といふ。「玉關の符節」は漢の武帝が

玉門關を閉ぢて外國との交通を絶つたこと。「紫塞」は支那の北方長城方面。「夷吾の糴價を平にする」は齊の管仲夷吾のやうに、老中松平定信が米價を平均して一般の動搖を防いだこと。「吉甫の戒行」は周の宣王が吉甫に命じて賊を討つたことを引いて蝦夷地を開いたこと。「薇蕨」は文王が北征者を送るに茶蕨の歌を以つてした故事である。

この詩の大意は、「この頃洪水その他の天災が相ついで起り外寇問題など騒がしい。武帝は宣房を築いて殃を福にすと云はれたが、天平の天下が或は殃となるのではあるまいか。武帝も玉關を鎖して西域との交通を絶つたが、長城方面はやはり夷狄の地に續いてゐたではないか。我が國も北は蝦夷につづいてゐるから油斷はならない。すでに内には米價をはじめ政治經濟の建直しがあり、遠く蝦夷地にも人を派遣し、諸藩の兵を募つて海防にあたらせてゐる。どこの家でも出征者の妻は、遠い征途からのたよりを待ち佗びてゐることであらう。どうか出征者達も、あまり蕨の剛くならないうちに早く平定して凱旋してくれればよいが。」といふのである。

その規模の大小は違ふけれども、今日の出征兵士を送る詩情と相通ずるものがあるではないか。

文化四年七月七日付の菅茶山へ宛てた手紙にも「北邊の傳聞一卷に仕候、定めて竹原より傳へ尊覽に入れ申すべく候」とあつて、彼は江戸屋敷から廣島の本邸へあつた公報は大部分これを寫

しとつて海防への關心を示してゐる。

その寫しの中には、當時の情況が次のやうに書かれてゐる。（木崎好尚氏による）

江戸人來書風說如左

一、南部様、六月七日御用立

一、津輕様、六月八日御用立

一、遠山様、小菅様、村上殿、六月十一日御出立

一、堀田殿へハ三千兩拜借被仰付候由、來ル廿日頃、御出立之由

一、中川殿も、堀田殿同日なるべしと云ふ。

箱館奉行其外より御屆御座候事と聞え申候。夫より遠に諸家へ御達有之、追々御役人出張被仰、此節ハ……蝦夷話の外……無御座候、町方は蝦夷之話、偶語(禁制)……などと御觸御座候由、遠山、小菅、村上三家之箱館渡口に於て、白米三千俵ヅヅ、鹽、味噌、草鞋等迄……相渡候様にと南部へ被仰渡……土人さへ他領久米を□シ候由ニ付、中々一度に九千俵之白米ハ……直に八日に出立。且又御在所より箱館へ被差出候人數之内、足輕分之舟、渡り口にて破船、皆々箱館表へ游ぎ付候由、内三人程は溺死之様相聞申候、右游上り候疲武者にてハ心元なしと

て、直に足輕不殘代りを遣し、引取られ候由。

抑、此度、秋田殿、酒井家より人數追々增參り候は、赤人がエトロフ島へ三十人上陸、狼藉相聞え候よりの事にて御座候由。其樣子、朔日之夜に、此元箱館奉行羽太安藝守殿より……御人數御達有之、四月二十四日に御城下相屆き、翌二十五日、早速軍人、壹人物頭壹人、大筒役四人、足輕五百人、被差立候由、殊外ニ速ニよき手都合と申候、酒井左衞門尉殿へも、御達し御座候處、揃次第可差出と申事之由。」

なほ、菅茶山宛の手紙の中には、山陽が海防に關する意見として次のやうなことが書かれてゐる。

「此度の義、先生如何思召し候哉。要之、海寇一艘か二艘の事、彊場の吏に委ね置て濟み候事なるに、事、大造に上下擾動の事、東邊の國々は異邦人より、公儀人を苦み申すべく候間、內變戾なかるべく候。且、大事に及ばば、東の一諸侯に委任なされ、一手きりに勝負させられ候はば、推讓、相伏の患、これある間敷候か。總じて郡縣の世とちがひ候へば、各自守らしむるに若くはなし、則ち事、擾がずして功收むべく候、無根浮足の戍卒幾千萬御座候とも、何の益する所あるべきや。故に松前の國除せられし事。自ら藩籬を撤すと申すべく、失計これより大

なるはなく候。明の胡惟庸、嚴世蕃如き事、無かれかしと祈る所に候。何分、異邦人は是きりに候とも、米價の騰貴、民疲弊るべく候。古より戒狄に取られ候は、晉・宋・明とも郡縣にて、且內釁なきに入る事これなく候へば、赤奴は百魯西亞ありとも必ずしも畏るべからず候。唯、內地物情恟懼、變を生じ候はぬ樣にあれかしと杞憂止むなく候。」

文中、松前の國除かれしを失計としてゐるのは、松前領主を奧州の梁川に移して、新たに幕府から奉行を派遣したことを非難したものであり、明の胡惟庸云々は、明の宰相胡惟庸が嚴世蕃とともに、外敵の侵入にあたつて却つてその手引をして國を亂したことを例に引いたものである。海防論としてはさして進步的な意見もないが、文中「異邦人より公儀人を苦み申すべく」といひ「赤奴は百魯西亞ありとも必ずしも畏るべからず候、唯、內地物情恟懼、變を生じ候はぬ樣にあれかしと杞憂止むなく候。」といつてゐるところに、青年山陽の論旨がある。赤魯をおそれるよりも、その對策を警戒したものであり、これは卽ち尊王攘夷の大義名分論に通ずるものではあるまいか。

なほ、同八月十四日に菅茶山への手紙には次のやうに更にその意見を具體化してゐる。

「北事、江戶より何の警聞も之なく候。只佐竹衆出張、箱館、松前の間を取切居申し候。夷賊

を撃拂ひ申し候て箱館奉行の存汲、始めて知れ申し候由、二十日程かかり、奉行、晝夜甲冑卸さずと申す事ニ御座候。凡そ佐竹衆操練神妙、號令明肅、東睡の望にて、奉行も佐竹々々と相談にかかり、難有迷惑の場合もこれあり、あちこち奔命候由。

是に由りて之を觀れば、小子兼々申候封建の力に倍し候て差遣候公儀衆、物之用に立申さざる所、少ハ有驗と申すべく候。北條の蒙古を拒候も四國の河野、九州の少貳、ヲモニ働き申候。神風は其後ノ事也。

此度も、堀田攝津守、日光へ祈りて出陣すべき筈に仰せ付けられ候所、家來に違變の事之れありて、其の義に及ばず參られ候由、留守に殘し置かれ候家老の長屋へ雷落、家老震死の由、日光より留守見舞參候と都人申候由也。

然りと雖も、公儀衆にも人なきにしも非ず、唐太へ參居候同志の內、戸田又左衞門とて三十石二人扶持の者、虜七人を殺して討死し、其跡式を百俵に成し下され候由、士氣を風勵するの策なるべし。もはや……僕の嘗て奮擊の士を招くと申候時節になり申候か。

兩國の花火御差止、玉屋大迷惑仕候所、烟硝御用多くして又いき返り候樣子に御座候。烟硝庫より二十八貫目入の烟硝長持數十棹、夜中或は曉に乘じ候て東邊へ輸送候と申候事何角擾動笑

ふべく候。」

「差遣候公儀衆、物之用に立申さざる所」と先見の明を證したものと云ひ、元寇の時も「神風は其後ノ事也」と斷じて有效な對策の樹立を暗示してゐる。また堀田攝津守が蝦夷へゆくのに日光廟へ祈願を込めて出陣しようとしたのにそれを取止めて行つたばかりに、留守では家老が雷死したので、江戸の人々が日光樣から結構な留守見舞が來たさうだといつたなどといふ當時の世の樣がうかがはれる。要するに山陽の評論はやはり「公儀衆にも人なきにしも非ず」に表れたやうに、常に皇民皇國の立場にあつた。

なほ、文化五年五月、但馬出石藩士で父春水の門人、池口子纖に贈つた書翰の中には次のやうに述べてゐる。

「北邊恟々論の如く、靜ならねば隱家もなしの歌の如く御座候。然し志士其の學を試むる所の秋とも申すべきや。僕弱冠、兵法を學ぶ、其後は純一の書生に御座候處、此節は淫婦古態チト出申したく樣御座候と申すは謔にて、實に杞憂此事に御座候。(中略)弊藩には公儀打拂の御號令に付、別に觸これあり、此の事、武門に於て驚くべき事にあらず、騷ぎ立申すまじくと申す

事にて、人數備へこれあり、僕父子も行伍に編し候。然し是は謀畫之列に御座候て、急に血を喋むの患もこれあるまじくと存ぜられ候。何分如何なる時運になり候事にや、歎はしき事に御座候。右につき理裝致し置き候樣の義心せはしく、それに家妹の資送等彼れ是れ、左氏の所謂、三年の畏あり、桑中の喜びありにて御座候、僕依然多病、近來一絶を得申し候。

防邊豈策なからん。

慷慨一羸の夫。

獨り郤て胸間病む。

海外の胡に難む。

御一笑下さるべく候。林子平は唐人に非ず候。然し其の言一利一害御座候。公儀陽に其の人を擯し、陰に其の言を用ひ、北邊の地利、苛細の政を貪り、邊釁を開き候て、松前の藩籬を自撤し候て、松前の□□□召れ候事、如何はしく候。何分、方今時勢、大才力の人、大威信の人、清闘國を鎭め候はねば、事の結局いまだ知るべからず候。何卒、白河侯御歸役させたき事に御座候。是も信牌一件にて廟中の評宜しからずにや。此書御覽後、御火中下さるべく候。防邊の事につき、文章も御座候へども、今便急にして貴覽に入るるに及ばず候。」

これに依つて、當時、幕府は諸藩に外國船打拂を命じたので、廣島藩でもその用意をし山陽父子もその軍伍に加つたことがわかる。彼は林子平の書も讀んで居り、既に隱退してゐる白河侯（松平定信）を再び要職に立たせその對外策に期待してゐる。最後に「防邊の事につき文章御座候」とあるのは當時、別に海防論を書いてゐたものであらう。

しかし彼には海防論としてあまり見るべきものはなかつた。彼が實際、問題に關する評論としては「通議」（「新策」を改作したもの）がある。その中には時局に對する彼の具體的な意見が書かれてゐて、官制、民政、法制、兵制、海防などに亘つてゐる。

例へばその邊防論の中には次のやうな一節がある。

「寇の短なる所は乃ち我の長ずる所、曰く短兵也。格鬪也。短兵を執て而して格鬪するや、則ち彼の十以て我の一に當るに足らず。故に彼其船に據て其大を挾む、我必ず較せざる也。其來り迫るに及んで、決死敢進、出沒奮擊、彼をして其の長ずる所を用ゆるに暇あらざらしむ。縱へ其をして陸に上らしむるも、之を阻隘に要し、其の前後に伏し、擊て而して之を麋にす可し。夫れ我が守る所の者は土地に非ず乎。吾の土地は寸も失ふ可からず。寸の外は雲海茫々、天と際を爲す。何ぞ吾事に與らん、何ぞ必ずしも擾々たるを爲んや。」

これで果して外國の洋式訓練を受けた兵を擊破することが出來るか否かは疑問であるが、しかし「吾の土地は寸も失ふべからず」といふところに彼の皇國的情熱があり、あくまで逞しい精神國防がある。

また火技論には次のやうに述べてゐる。

「夫れ銃の大なる者は運用に便ならず。能く之れを運用する銃の如く、又能く命中する者、是れ異材の士、常に有らざる者也。饒ひ之れ有らしむるも、一國數人に過ぎず。海内を通計して數十人に過ぎず。數十人を用ひて以て四邊を防ぐ可けん乎。」

彼の意見は、あくまで現實主義的であり、實際的である。當時の實狀をもつてしては、必ずしも常識論として片付けるべきものではあるまい。

更にその水戰論には次のやうなものである。

「彼萬里を涉つて來る。其の船甚だ大、櫓を設け礮を施す。礮發して而して船搖がず。而して我が所謂水戰は、我が海濱に戰ふ而已。則ち其の船皆小、礮施す可からず。施す可き者は、鳥銃に止まる。其素法に依り、隊を整へて進む。……然らば卽ち何を用ひん、曰く其舊を用ひる耳。夫れ小は小の利あり、大は大の不利あり。大の不利は進退不便なる也。合すれば輙ち分

れ、分れば輙ち合はざる也。小の利は進まんと欲すれば則ち進み、退かんと欲すれば則ち退く。合せんと欲すれば合す。分れんと欲すれば分る。……我は水に習ふて、而して寇は我が習に如かず。則ち四面の海は乃ち我の海也。海の險、然して後萬世にして而して恃む可き也。」

山陽の海防論は、かくの如く、現實的、かくの如く常識的のものである。もとより彼は軍學の專門家ではなく、專門は歷史であり、詩人である。特に彼が一介の浪人であつて、いまだ天下の要路に立つた經驗もなく、また、京阪地方に住んで、江戸の情勢に疎かつたことも、時務を論ずるには適役とは云はれなかつた。彼の本領はやはり海防を論じても歷史を論じても、むしろ時の人々をして國體の本義に目覺めさせ、その愛國的情熱に訴へるところにあつた。

「北客能く來らば何を以てか酬ひん。」と歌ひ、「雲か山か呉か越か」と歌つて、國防精神に點火するにあつた。かの「蒙古來」の詩なども、必ずしも元寇のみを歌つたものといふよりは、當時の外患に對處する國民の心構を刺戟するところは少くなかつた。

山陽は、三十九歲の時、九州に遊歷してゐるが、特に當時唯一の貿易港たる長崎には二ケ月も滯在して、つぶさにその警備狀態などを觀察した。當時の學者が長崎にゆくのは、今日の學者が

洋行すると同樣に新知識を得るためであつた。山陽は長崎滯在中、オランダの船にも乘つて見物し、オランダ船に就ての長詩を作り、その船にある砲門を觀て、運搬に不便であるからとて、やはり小銃を以てする戰術を論じて、「我、敢死を募り、其艦に梯上し短兵迫鬪すれば彼をして發する暇なからしむべし」といふやうに述べてゐる。

山陽は長崎で、支那の詩人とも詩の交換などをしたが、オランダ屋敷に住んでゐたフランスの軍醫から、ナポレオンの覇業のことを聞き、その壯烈に感じて、次の「佛朗王歌」と題する長詩を作つてゐる。この年はナポレオンが、セントヘレナへ流されてから三年後にあたるのである。

佛朗王歌

佛郎王、王、何の所にか起る、大西洋。
太白、精を鐘め、眼、碧光。
天、韜略を附して、其の腸を鑄る。
歐邏を蠶食して、東、疆を拓き。
誓つて、昆侖を以て、中央となさんとす。

國内の游手、編行に收め。
兵に妻子なく、武は趨々たり。
挺を縮めて、銃と爲し、伸べて槍と爲す。
銃退き槍は進み、互に撞撻す。
向ふ所前なく、血は玄黃たり。
獨り、鄂羅の、相頡抗するあり。
潛かに諜賊を遣はして、劒鋩を懷にす。
王、故を覓り、之れと翺翔す。
能く刺さば、我れを刺せ、我れ亡ぶる能はず。
汝が主、何ぞ旗鼓當らざる。
客を遣つて親しく督す、陣、堂々たり。
絨旗、天を蔽うて、日に芒なし。
五戰して國に及び、我が武は揚がる。
鄂羅、魚の釜湯に泣くが如し。

何ぞ料らん、大雪、平地一丈餘。
王の馬、八千、凍え且僵れ。
運路、梗塞して望むべからず。
馬肉方寸、日に糧に充つ。
王曰く、天、佛郎を右けず。
我れ、吾が衆を活かす、降るも何ぞ妨げん。
單騎、敵に降る、敵、敢て戕(そこな)はず。
之れを阿墨に放つて、君臣慶す。
戊寅の歳、吾れ碕陽に遊び。
蠻醫に遭逢して、其の詳を聞く。
自ら陣に在つて、金創を療し。
馬を食うて死を免かれたり、今忘れずと。
君見ずや、何の國か、貪ること狼の如くなるあるなけん。
勇夫、重閉、預防を貴ぶ。

又見ずや、禍福は繩の如し、何ぞ常とすべき。
兵を窮め、武を黷(けが)して毎に自ら殃(わざわひ)す。
方今、五洲、奪攘を休む。
何ぞ知らん、殺運、西荒に被る。
詩を作つて異を記し、故郷に傳ふ。
猶覺ゆ、殺氣の奚囊(けいのう)に迸しるを。

しかし、山陽の長崎滯在については、山陽研究家の徳富蘇峰氏などは、「彼が長崎滯在は、旅稼ぎと書畫古玩を漁りたるが關の山と云はねばなるまい」と批評し、「彼は長崎に於て、那翁の莫斯古敗軍を歌うたけれども、其の影響が日本に如何なるものを齎らした乎と云ふ事には頓着しない。」と云つてゐる。そして「當地案外面白からず、何分肥薩にて機嫌を直し歸候積に御座候」といふ妻子に與へた手紙の文面などをあげてゐるが、漢學者山陽が、フランス軍の敗殘の軍醫に逢つてナポレオンの敗軍の模樣を聞いたといふやうな事實は、これだけでも注目すべき收穫である。また山陽の九州旅行の目的は長崎にあつた事は事實であつて、長崎に着いた時は、父春水が長崎遊覽を果されなかつたことを殘念がり、「紅燈綠酒、小姑蘇」の異國情調に親しみ、珍らしい

土産嘶が出來ると喜んでゐる。そして母のために買つた土産には、支那渡りの鼈甲、和蘭ヘルヘトアン（天鵞絨）の女帶地、色羅紗類などがあつた。

山陽は、漢學者であり歴史家であり、骨董好きではあつたが、その生活は案外、進歩的で、新式ではなかつたかと思はれる。現在でこそ漢學者と云へば古臭い感じがするけれども、當時に於ては漢文で詩の書けるといふことは、今日、英語や獨逸語で詩を書くほど進歩的な學者であつたであらう。

山陽が、病魔と闘ひながら、日本政記執筆に最後の勇をふるつてゐた天保三年九月十三日、即ち死の十日前の夫人梨影の手紙に「十三、四日ごろは、まだ高づくえにてとき〴〵御かかり、何か御かんがへ遊ばし候」とあるが、この高机といふのは漢學者には珍らしくもオランダ風のテーブル式のもので、椅子には虎の革がかかつてゐたといふことである。また酒を呑むにも蘭盃（コップ）を用ひ、コップは遺愛品として傳來されたものが多いといふ。

しかも、この高机を山陽は死後の形見にするつもりで、一脚を拵直させたのである。これに關し次に木崎好尚氏の「頼山陽先生」に次の記事がある。

「九月十三日、小石元瑞への手紙に「机（高机）今一息故、今一脚拵直させ近日出來可申候。」

とあり、生前に約束してそれを死後の形見にするつもりであつた。その翌十四日には「机、今日出來申候早々取りに可被遣候」この月、小竹は、松陰の外、兩者の舊友廣瀬重兵筑梁を伴ひ、來訪、夜に入りて、梁川星巌も、江戸行の留別を兼ねて病體を見舞ふ。十五日、小石への手紙には日付の外に時刻を九月十五日「關原戰將始之時刻」――午前八時――と、こと〴〵しく書き入れたのは、史家の餘戯と見るよりも、今が勝敗（生死）の分れ道と觀じたのではあるまいか。又その使が机を取りに來たので、

「机、附貴价候。よく見れば、ヤハリ粗末に候へども、高きものなきより、ましなるべし。此机に付候硯匣、卷紙、小蠟燭立の類、御定置、度々取寄ぬ樣に被成、或は此机に、さらさ大風呂しきなどをかけて、其下に、脚爐なりと何なりと、自由出來可申候。安神降氣、以遇門弟子、是亦自愛計壽の一端也。故人囑意、御深領可被下候」私は山陽先生の手紙の文を讀んで、いつとても、その人情味の濃やかさに眼をうるませぬことはなく、ましてこの期に臨み、常用別好みの高机を「一息」だと思ひ返して、更に「一脚拵へさて直させ」その机の使用上にまで細心の注意を附け加へ、「自愛計壽」の厚き心ばえを寓したことは、樗園たるもの、いかにそれを感受せしぞ。漢學先生よりも蘭法の大醫が、その卓を用ゐるのは、一段の調和を見せたであ

らう。この手紙の時刻には又「關原、井伊退き、福島進むの刻」――正午頃――と記されてゐた。

その卓と椅子では、隨分評判が高かつたらしく、山陽の御手本を習字されてゐた萩藩主毛利大膳太夫齊房の後室〔春曦夫人――有栖川宮織仁親王姫宮――京邸〕にもそれを所望せられ、同じ寸法にて新調の上、差上げたこともあつた。」

死の四日前の小石への手紙にも、「机の事、御易き事」とか、「再思するに私昔日させ候へ高書棚あり何も角も」などと高卓から高書棚のことを書いてゐるところを見れば、高卓も高書棚も決して氣まぐれに愛したものではなかつた。木崎氏が、「漢學先生よりも蘭法の大醫がその卓を用ゐるのが、一段と調和を見せたであらう」と述べてゐるが、漢詩をもつてナポレオンを歌ひ、オランダ風のテーブルによつて「日本政記」を書いたところにも、賴山陽の時代感覺があり、革新時代との調和があつたであらう。

以上のやうに、山陽の時代は、新しい國防國家の建設へと兵制の上にも大きな轉廻の行はれつつあつた時代であつた點においては、われわれの時代と遠い過去とは思はれぬものがある。そして彼の舊式な兵制論や國防論そのものには取るべきものが少いとしても、高度國防國家を建設す

るがために必要な精神國防力を强化宣揚した點においては、古今獨歩の觀があり、特にその文章の國防力を最高度に發揮した點では、百の實踐に匹敵するものがあるであらう。「鞭聲肅々夜、河を過る。」と歌ひ、「遺恨なり十年、一劒を磨し」と歌ふ時、それはひとり「川中島」の詠歎ではなくて、その一言一句の中に、百の海防論にもまして力强い精神國防の英氣が發するのであつた。「北向、再拜すれば天日陰し、七たび人間に生れて此の賊を滅さん」と吟ずる時は、すべての青年が大楠公の精神にかへつて、鐵壁の國防力と化したのである。山陽こそ、文筆をもつて國防國家を建設した一代の文豪であり、眞の文士であつた。

山陽が或る書翰の中で「得手と申しては史學文章に御座候。是にて少々にても御國の御用に相立候儀仕りたく」とあるのは、彼の最高目標を示したものである。

3、地歴一體觀

しかしながら、彼は往々、國學者や國史家が、陷りがちな頑迷者流ではなく、過激な革新家ではなかつたが、さすがに蝦夷探險に從事した志士、賴三樹三郎の父であるだけに、國土を凝視し鄉土を愛する史家であつた。彼は機會ある毎に、各地を巡覽して、その土地の景觀を歴史的に探

勝し、詩歌に繪畫にその風土美を天下に宣傳した。耶馬溪でも筑後川でも、山陽の筆を得ていかにその景觀に風格を加へたことであらう。

愛國とは讀んで字のやうに、國土を愛することである。彼ほど日本の國土を愛し、地理と歴史とを密着させたものがあらうか。山川草木、彼の史眼にふれては映發しないものはなかつた。日本の國土美と國體美とを統合させることが、彼の國民教育の眼目であつた。

この彼の燃ゆるやうな國土愛こそ、精神國防の淵源であつた。

彼は幼少の時から歴史に對して異常の興味をもつたが、同時に地理に對しても、特殊の趣味を持つてゐたらしい。六歳の時、母に「天とは何か」といふ奇問を發して母を困らせたといふ逸話があるが、その頃から、父春水が江戸から持ち歸つた世界輿地圖について、母から地球の圓いことや、太陽や月の運行などを敎へられたといふことである。やはり小さい時から「天下國家」を考へるやうな素質があつたのであらう。

また、十六歳の時には、後に述べるやうに、古川古松軒といふ備中、岡田の地理學者について地理學の大要を學んだ、この人から貰つた日本地圖は、彼が後に外史を書く時にも、いつもそれを參考にしたのであつた。彼の歴史は地理を離れた歴史でなく、地理と歴史の一體化したものが

皇國であつた。

彼は、歴史家と云はれるが、生涯、足にまかせて國内を巡遊し、名勝を探求してゐる足の愛國者である。彼の歴史は地理とはなれた天上の歴史ではない。彼の歴史は日本の國土を愛する歴史であり、日本全國を名所舊蹟たらしめ、全土を聖地たらしめる歴史であつた。

今日の學校敎育においては、地理と歴史とはあまりにも無關係であり、殊に世界地理などは、まつたく外國本位の地理の内觀がある。歐米人本位に、近東とか東亞とかいふやうな名稱からして、外國本位である。地理は日本の歴史と一體化した皇國地理として再出發すべきであり、國民學校で、國民科地理とした理由もそこにある。

今試みに、史家 山陽の書いた次の日本地理を讀んで見よう。

これは、全體的な立場から、日本をながめ國防國家としての日本を描いた歴史地理といふべきものである。

日本の地勢を論ず（輿地略）

皇和の國、大海の(中)心に處る。蓋し東西六百餘里・南北二百餘里、其の形、磬折の如し。故

に其の地脈、中より起り、而して、左右降り、中最も隆く、東北これに亞ぎ、西南最も纖し。皇化、西南に興つて、而して、東北に漸む。故に遂古能く西、海外の朝鮮・渤海諸蕃を服す。而して、東北は卽ち連山斜に之を限り、連山以往、これを毛夷に棄つ。

景行天皇は皇子日本武尊をして、連山を踰え、而して東征して之を闢かしめらる。成務天皇は山河を隔てて、而して國縣を分ち、阡陌に隨つて、以て邑里を定め、東西を日の縱となし、南北を日の横となし、凡そ國たるもの百四十四なり。爾後相繼いで、竟に四裔を保つ。而して、文武天皇に至り、山海の形勢に因り、分つて六十六國とす。曰く、山跡・山背・河內・和泉・攝津。凡て五州。合して畿內と稱す。

畿內の地は、尾を西北の海中にひく、其の南濱は國を得ること七なり。曰く、播磨・備前・備中・備後・安藝・周防・長門、合して山陽道と稱す。

其の北濱は國を得ること八なり。曰く、丹後・丹波・但馬・因幡・美作・伯耆・出雲・石見・隱岐、合して山陰道と稱す。山陰は一に景背と曰ひ、山陽は一に景面といふ。

山跡の南は國を得ること一なり。曰く、紀伊。紀伊の西北海中に國を得ること一なり。曰く、淡路。其の西南は國を得ること四なり。曰く、阿波・讃岐・土佐・伊豫、合して南海道と稱す。

南海の西は、山陽の西南なり。海中、國を得ること九なり。曰く、豐前・豐後・筑前・筑後・肥前・肥後・日向・大隅・薩摩、合して西海道と稱す。日向は、神武天皇の興り給ふ所たり。日向に興つて山跡に都し給ふ。仁德天皇は攝津に都し、天智天皇は近江に都し元明天皇は山跡の平城に都し給ふ。五帝之に因り、其宅は遷徙常なし。而も山跡を出でざるなり。

桓武天皇に至り、乃ち都を山背に定め給ひ、山背の背より、北海に緣つて、而して東北上、國を得ること七なり。曰く、若狹・越前・加賀・能登・越中・佐渡・越後、合しては北陸道と稱す。

山跡より南海に緣り、而して、東上して國を得ること十五なり。曰く、伊賀・伊勢・志摩・尾張・三河・遠江・駿河・甲斐・伊豆・相模・武藏・上總・下總・安房・常陸、合して東海道と稱す。南海・北海の間は國を得ること八なり。曰く、近江・美濃・飛驒・信濃・上毛・下毛・陸奥・出羽、合して東山道と稱す。東山はその山多きを謂ふなり。而してその信濃と東海の甲斐とは、所謂連山斜に限る者となす。

賴襄曰く、予は畿內に生れ山陽に居り、長じて東海に遊び、還つて東山の信濃に至る。然る後地脈の起る此處にあるを知るなり。卽ち測つて之を揣るに其の起つて左に下るものは、上毛となす。上毛の脈、陸奥・出羽を劃つて東北す。伏して復起り毛人（えぞ）に至つて極まる。起つて

右に下るものは美濃となす。美濃の脈は分れて二つとなる。其の一は、越前・若狭を經て蜿蜒千里、伏して復起り、薩摩・大隅・琉球に至つて極まる。其の右は山陰たり。その左は山陽たり。其の一は、山跡(大和)を經て伏して復起り、伊豫土佐に至つて極まる。故に東面は一頭二尾、皆脊梁骨たり。而して、左右の裔、海に漸し、梁骨の散珠出沒するもの皆山となり、水の梁骨中に發して左右、海に注ぐもの皆河となる。兩裔の稍廣きもの皆土田たり。關左八州及び、陸奥・出羽・三河・尾張の如き、其の最も廣きものなり。山の截つものは、關たり。兩裔の彎つて、水の注ぐもの、津となり、城邑となる。淀川の攝津に注ぎ、利根川の銚子口に注ぎ、岐蘇河の桑名港に注ぎ、筑後河の天草港に注ぐが如き、其の最も大なるものなり。

東西の行旅、皆兩裔により、之を濟すに舟船を以てす。その梁骨の中に道する者、獨り東山道のみ。故に一に中山道といふ。南北の送運、河により、東西の運は海による、而して、其の四傍に往來聚散す。是れ立國の大勢なり。

桓武の詔に曰く、維此の山城は山河襟帶して、自然城を成す。其れ改めて山城の國と曰はん。其の都を平安といひ、東を左京と曰ひ、西を右京と曰ふ。各三十坊を領す。南北九條皇城中に在り、四面に十四門あり。即ち六關を置く、相坂は近江にあり、伊勢に鈴鹿あり、美濃に不破あ

り、駿河に清見あり、以て其の東を控ゆ。攝津に須磨あり、長門に赤間あり、以てその西を扼す。

六關を以て七道を制す。道、以て國を統ぶ。國は六十有六、國以て郡を統ぶ、郡は六百有四、郡以て鄉を統べ、鄉一萬三千。國に五等あり、大・上・中・下・小といふ。郡又、斯くの如し。

七道の驛、三百九十三、東山八十餘有り、南海に二十餘有り、西海に九十餘有り、山陽・東海に各五十有り。山陰・北陸に各三十餘有り、西海は、特に大宰府を建て、西蕃に備ふ。四道の塞は、四十里に一堠あり、海内輻湊して、中都に歸向す。その盛んなること極まれり。

然も、其の實は中に在らざるなり。地脈の降裔に處して、其の頭を控制す。故に東北三道は末大にして掉はず。清見・足柄以往は沃野千里、概ね羶夷(えぞ)の巣穴する所たり。桀黠時に起る。即ち鎭守府を陸奥に建てて、以て其の方土に習る。而して、威信、素著るるもの、之を守る。其の後、百年の間、鎭守の子孫、七道の權を攘む、即ち、所謂羶夷の巣穴するところ、化して天下の都會となる。而して畿の名は虛し、源氏これなり。

源氏は相模・武藏・伊豆・安房・二總・二毛に據る、之を關八州といふ。而して、居を相摸の鎌倉に定む。降つて、武門の權を司どるもの、四氏。北條氏仍ほ鎌倉に居り、足利氏は平安の室町

に居り、織田氏は近江の安土に居り、豐臣氏は攝津の大坂に居り、又山城の伏見に城き、平安の聚樂に館す。而して、源氏三世・北條氏九世、最も治まる。足利氏十三世、概ね亂日なり。織田氏・豐臣氏、二世なる能はず、蓋し形勢、しかるなり。

凡そ海内の形勢、及び風紀民俗は大抵、畿内以西の民、農を勤めて、少しく熟す。東北の民は、農に隋つて、多く熟す。皆、魚鹽・蛤蠃の利を仰ぐ、畿内及び阿波、讃岐、播磨以東、伊勢以西は、その風紀同じ、其の地は少險にして少沃なり。其の民柔軟にして機利を好む。其の言語不俐なり、其の產は卽ち織工奇技、その港泊或ひは任俠多し、之を要するに、武を用ゐるの地に非ざるなり。甲斐・信濃・越後・越中は、其の地大險なり。其の民、沈毅精悍にして、工及び蠶を業とし、其の言語、深重なり。其の產は卽ち巨材・金鐵・文絹・佳鷹。關八州、尾張以東の諸國は、其の地、大沃なり。其の人、爽達果斷にして、武を喜ぶ。其の言語、斬截、其の產は卽ち竹箭・利刀・善馬なり。昔王政の時、諸國の牧、總て三十九所、武藏・上總・甲斐にあるもの三十二、左右馬寮に隸し、後皆鎌倉の收むる所といふ。常陸・陸奥・出羽、其の地、大嶮大沃なり。其の人、關八州に似て撲擊、其の言語は、前卑うして後高し、其の產は卽ち巨牛善馬、其の撲擊なること、愈々北して、愈々甚し、毛人は、卽ち其の極まるものなり。

毛人の國は其の大きさ中國を三分するもの一、其の地は所謂脊骨のごとく〳〵く現るるもの、固澤鹹鹵にして、五穀・桑麻・六畜を生ぜず。其の民は茸毛。婦人は黥面文身にして、男子は弧を挾み、毒矢を頭に挿し、熊羆蠟虎を射、鮭魚を擿して以て食と爲す。文書無く、木を刻し繩を結んで、以て約束を爲す。獨り日景を敬するを知る。曰く、是れ天皇を宗とする所なり。毛人は北、魯西亞と海を夾んで相望む。魯西亞より以西は南、海に緣るもの數十蕃なり。蒙古留・靺鞨・滿洲・女直・兀良哈・朝鮮・渤海・及び清氏なり。其の最も著るしき者は、中國の北陸・山陰・西海と、千里相望む。

山陽・山陰・西海及び伊豫・土佐は、其の風氣概ね同じ。其の地は、小險小沃にして、其の民は鄙瑣、其の言語は卑賤なり、其の產は卽ち薦席緻布なり。特に肥前・土佐以西は頗る大險大沃なる者あり。其の民は頗る信濃・陸奥に類す。陸奥・西海は其の人長大なり。山陰・山陽は其の人短小なり。肥前は清氏及び紅毛・榜葛利・暹羅・嚕咬吧の諸藩交市を管す。

肥前の西北に二島あり、曰く壹岐、曰く對馬。對馬・薩摩は朝鮮・琉球二蕃を管す。二蕃と毛人は景行以來皆皇服に服し、源氏・足利氏を經て而して寢倨る。豐臣氏に降りて故に復し、皆方物を貢す。胡馬・海東青虎皮及び水銀・朱砂・瑇瑁・翠羽・酪酒諸物、征夷府に萃る、朝鮮の地

は、毛人に倍す。琉球は毛人の三分の一、其の人毛人よりも文なり、而して柔弱、毛人の比に非ず。琉球は最も纖軟にして、制し易し。故にその禮を執る、尤も恭し。蓋し地脈の右降する者、此處に極まる。左の强きが如きに非ざるなり。朝鮮琉球と毛人とは北海を間て、相去る者、四百餘里。是の故に皇和の邦、六百里にして磬折するなり。

われわれは、日本の國土を悉く、わが祖先の三千年の血と汗の聖地として眺め、これをいかに子孫に傳承すべきかといふ立場から、地理を學習せねばならない。科學的の名において、假にも異邦人の如く、日本を研究したり、植民地の如く地理を探索したりすることはゆるされない。地方誌も產業地理も、もつと歷史的に、立體的に開拓すべきであり、そこにはじめて國防國家の建設者としての歷史的自覺を體得することができるのである。更に地理はどんな地方誌であつても、この山陽の地勢觀のやうに、全體に結ぶ部分としての地位を重視すべきである。一つの川の流れも、一つの山の高さも、それは皇國の何の爲めの流れであり、何のための高さであり、何の爲の產業であるかを、全的立場から檢討するやうに、あらためられねばならない。

この一文によつても、山陽の歷史家としての新しい性格を知ることが出來る。何と世の中には

地に足のつかない歷史論者が多いことであらう。

山陽には、高山彥九郎傳をはじめ、多くの節婦傳などの人物評傳があるが、これは多くその人物を通じて彼の理想を述べたものであつて、必ず評傳の終りには「外史曰」があつて自己の感想を附するのが例であつた。さう云へば山陽の著述は、日本外史や日本政記のやうな歷史ものでも、「外史氏曰」といふ評論がある。そして彼の人物評論の今一つの特長は、その人物を歷史的に眺めることであり、地理的に關係づけることである。高山彥九郎傳の中でも、「外史氏曰」の中で、彥九郎が客と會談した時、伯耆の地名の讀方の正誤を爭つた時、彼は自分が二度までその伯耆に行き土地のものに尋ねたのだから間違はないと云つたので、相手も默つてしまつたといふことを擧げてゐるが、かうした所にも彼の地理への精密な關心を觀る。

彼の地理的評傳ともいふものに、「古川翁の傳」(古川古松軒の傳)があるが、これは全く彼自身を地理的に語るやうな評傳である。今、その大意を書くと次の通りである。

古川翁は備中の人で、獨立の氣象の强い獨學の地理學者である。青年時代に天下を周遊し、北は奥羽の鰐浦から南は大隅薩摩、鬼界島まで至り、その間、到底人の通れない難路を踏破し、食物はなく足にはたこが出來たが平氣であつた。彼は平生から山谷の凸凹した狀態を畫工のやうに

巧に圖に表はしたが、特に、古戰場を尋ねることが好きで、誰がどの方面から攻めたかを正確に記し、遠近高下を一分の誤りもなく記した。かつて世間から兵略家と云はれてゐる者を「芋を煮る方法は知つてゐても十分に食べられるやうに出來たか否かを判別し得ないから、實用には立ち難い」と言つた。

寛政年間、松平定信公が海防に關して關東地方を巡視した際、古川翁の評判を聞いて種々下問する所があつた。翁はその時その子と同行したが、いよいよ會見しようといふ時も子供は、一所に室にはいらうとするので、翁が何故かといふと、父は平生口が惡いので心配であると云つた。翁はこれを聞いて大いに笑ひ、松平公が世間で評判な程の聰明な人物なら自分が何と云つてもすぐ洞察するだらう。もし世間の噂程でなく自分の惡口をそのまま受入れるやうな人物なら畏れに足りない」と云つてひとりで松平公に會見して質問に一々答へた。

松平公は非常に感心されて、武藏五郡の圖譜を整理するやうに命じたので、翁は能く責任を果した。そこで公は更に翁を召抱へようとしたが「老人が今更、窮屈な仕官は出來ない」と云つて辭つて歸鄕した。

その後、故鄕の岡田村に一家を築いて古松軒と自稱し門を閉ぢ書を著し歌を詠じて獨り樂しん

だ。門前に小川があつたが、必要な時は板を架けて橋とするが、平常は其の板を徹して「俗物と語るのは嫌だ」と云つた。嘗て人に告げて云ふには「大丈夫たるものは、かうした太平無事の代に生れて富士山、白山を盆栽のやうに小さく視、大阪灣や琵琶湖を沼のやうに輕視する豪傑と相提携することは出來ない。今の所謂教養ある君子なるものは一方に偏つて用を爲さぬ。」と。或る有名な畫家が翁の肖像を畫くと、これを見てこれではどうも書生の氣臭を離れない、何故もつと俺を大奸雄のやうに描かないか」と大言を吐いた。

そして山陽は、自分が十六歳の時、病床にゐた頃、翁が父の舊友であつたから、自分のために翁から手寫しの地圖を貰つたことを喜び、この地圖によつて我が國全體に關する海河、山脈の大樣を知り得た。後に諸國を巡遊の時も此の地圖を取出しては一々實地に當つたし、日本史を書くにもこの地圖を根據にしたと感謝してゐる。そして少年時代に地圖を貰つた時も病床にゐて面會せず、遂に親しくお目にかかつて高說を聞き得ないことを非常に殘念だと結んでゐる。

古川翁は、備中、岡田の人で名は平次兵衞、古松軒と號した。古松軒は山陽の名聲を聞いて、自分の地理學の後を繼がせるためにわざわざ訪ねて來たのであつたが、山陽が、病氣のため逢ふことが出來なかつたのである。

これは山陽の古川翁傳ではあるが、もしも今一人の山陽があつたとしたら、この古川翁傳のやうに皇國地理學の大家が出來たやうに思はれる。

、彼は歴史を愛するとともに地理を愛した人であり、むしろ地理と歴史とを一體化させようとした人である。

そして若しも彼に海防論や國防論があるとするなら、この時間と、空間との一體觀の外にはないであらう。

五劔山を歌つた詩には

南、讃州を望み、遙に指す五劔山。
山峰、劔を列ねる如く、衆嶺の端に峭立す。
襟を正して遙にこれを拜す。山に非ず、その人を思ふなり。

とあつて、彼にとつては山を觀るのは人を思ひ歴史を思ふことであつた。

「書後題」「跋」の中には

「詩は尙ほ風土記の如き也。書は尙ほ沙汰書の如き也。詩は朝野政治の由る所を見しめ、書は古來の大號令を叙錄す。」といふ言葉がある。「詩はなほ風土記の如し」とは、よく彼の地歴一體

の詩觀をあらはしたものであらう。彼の歴史詩が、形象的な力となつて、人に迫るのは、やはりかうした信念のあらはれだからであらう。

彼は山を歌ひ河を歌ふだけでは、滿ち足りなかつた。一場の景觀もそれを單に地理的に觀照するばかりでなく、歴史的情熱の火を點ずることを忘れなかつた。

彼の詩に、

戸外に出で、落日海に入り、光彩の萬狀なるを觀る。
西南、鵲飛んで影の盡くる所、指して傍人に問ふ。
彼は何の處ぞ、曰く臺灣なりと。
鄭成功が儒服を焚きしことを憶ひ起し、慨然これを久しうす。

かくして落日の小景の中に、歴史の太陽が昇つて來るのである。

かくの如く、わが國土を水天髣髴の境まで嬉しい皇土として觀ずればこそ、國防や海防に對する新しい國民的情熱が湧いて來るのである。

「句々、來歴あり、是れ詩の佳處なり」とは彼が作詩の秘傳であり、「文章の效ある、微は茫漠たる雲煙の精を探り、細は織糸睫毛の末に及び、流れて大河となり、聳えて山嶽となり、下は滄海萬仞の深さに至り、上は遼遠不測の星辰に達し、赫々たること旭日の天に昇るが如く、清秀なること皎月良夜に輝くが如く、發しては花となり、散じては霜となり、藏すれば粟となる」とは彼が文章觀の眞髓であつた。

高度國防とは何か。いたづらに國防を外面的、鎖國的に說くばかりが、國防を高度化する所以ではない。國防を國民の詩情に於て堅持せしめることこそ、高度の國防であり、內發的國防である。地歴一體の山陽の國防觀こそ、萬民の心の琴線に、海防の警笛をかき鳴らすものではあるまいか。

三、尊皇論と布衣山陽

1、德川幕府の學問政策

德川幕府のあらゆる政策が、國家の爲よりも國民の爲よりも、德川幕府の利己的存續を第一義としたことは、前節に述べた通りである。しかるにこの幕府中心主義の思想の根本を動搖させたものが、德川御三家の一たる水戸家の德川光圀の編纂した「大日本史」であつたといふことは、皮肉な現象であり、日本の歴史は、歴史自體の中に自然に淨化作用が行はれ、苟も國體の本義に反する思想對策は、その組織や制度が、いかに完備しても、やがて、それ自身の中から自壞作用があらはれるのである。

德川幕府の思想對策は、いはゆる鎖國政策の徹底によつて外來の異端思想を禁遏し、國內は封建組織を强化して、藩內にまで鎖國主義的に束縛し、國民をして出來るだけ全日本的な天下國家に着眼することなく、一鄕一村に閉鎖しようとした。そして諸藩の武力を、幕府の旗本八萬騎の武力以下に制限し、武家諸法度によつて大名の取締を嚴にし、人質制度によつて去勢した。かかる制度や組織を永久化するものが、その思想對策である。

このためには、日本在來の武士道を德川時代の主從關係のみに極限させるやうな文化政策が必要であり、それには、若干の華美文弱に陷つても、學問を奬勵することを得策として、家康以來代々の將軍は盛に學問を奬勵した。もとより幕府はもつぱら文敎を興して、戰國殺伐の弊風を

矯正して長く幕府中心の太平の世を作らうとしたものであつた。

かくして、家康はまづ京都の朱子學者、藤原恒窩を招いて儒學を講じ、その門人林道春を幕府の儒官としたので、その後、朱子學は官學として幕府の思想統一の中心となり、林家は代々御用學者となつた。更に家康は、古書を複刻してこれが普及に努め、綱吉は、湯島に聖堂を建て、家綱は新井白石を登用して學問を奬勵した。從來、學問、教育は、貴族や僧侶の間にのみ行はれてゐたが、徳川時代となつては、將軍にならつて諸藩でも大いに奬勵したので、學問は庶民の間にまで發達し、ここに日本の文藝復興といはれる文運時代を現出した。

諸大名の中でも學問を好み學者を招聘するものが多かつたが、中でも、尾張の徳川義直、紀伊の徳川頼宣、水戸の徳川頼房、會津の保科正之、備前の池田光政などが有名である。ここに於て各藩からも多くの學者があらはれた。中江藤樹、熊澤蕃山、山崎闇齋、山鹿素行、伊藤仁齋、伊藤東涯、木下順庵、室鳩巣、新井白石、貝原益軒、などの學者が輩出した。

かくして徳川幕府の學問の奬勵は、もともと幕府中心主義の自衛のためであつたが、學問はそれ自體の發達によつて、却つて國民に生活發展の精神的武器を與へる結果となつた。從つて天下に輩出する學者の中には、幕府の御用學たる朱子學に反對するものも現はれるに至つた。かの陽

明學者、中江藤樹の門人熊澤蕃山や山鹿素行など朱子學に反對の立場にあつた爲、幕府のために罰せられた。山鹿素行などはもと林羅山に學んだので朱子學の出身であるが、後に「聖教要錄」を著して程朱の學を排するに至つた。元來朱子學はもともと徳川幕府の御用のための學問ではなく朱子學それ自身の中に、明かに大義名分論があり、家康の顧問であつた藤原惺窩は尊皇思想の開拓者と云はれてゐる。即ち恒窩の學風は、尾張家に傳承して徳川義直の尊皇思想となり、水戸家に傳つて光圀の「大日本史」の編纂から水戸學に發展した。

また京都の伊藤仁齋、その子東涯もともに、朱子學に反對して古學を主張して堀川塾を開き、これに對して江戸の荻生徂來は徂來學ともいふべき一派を立て、多くの人材を集めて、その學風は天下を風靡した。徂來は初め兵學者として柳澤吉保に仕へ、將軍綱吉にも用ひられ、吉宗將軍の時も御用を努めた。徂來學は伊藤仁齋の古學派と同じく朱子學には反對ではあるが、綱吉や吉宗の御用を努めたので、公然と天下を風靡するに至つた。

また、朱子學者であつても京都の山崎闇齋などは、土佐に始まつた南學の統を傳へて官學とは立場を異にし後には神道の一種、垂加流神道を唱へた。水戸光圀が、國史研究のために天下の學者を水戸に集めたのは、多くはこの闇齋流の學者であつた。光圀によつて形成された水戸學は、

朱子學と神學と史學との綜合學ともいふべきものであり、「大日本史」の編纂には、水戸侯三十五萬石の祿高の中八萬石を投じた大事業であつた。光圀が、德川幕府の藩屏でありながら、尊皇思想の原動力たる大日本史を編纂したといふことは、實に歴史の尊嚴であり、學問の力である。何と云つても、德川幕府の學問奬勵の最大の收穫は、「大日本史」であり、これが遂に幕府政治に決定的宣告を下したものである。

以上は、主として漢學の方面であるが、更に、學問として注目すべきものは、國學である。國學は、光圀が「大日本史」編纂にあたり、古語の研究を初めてから次第に勃興し、光圀の依囑を受けて「萬葉代匠記」を著した僧契沖をはじめ、荷田春滿、そして賀荷眞淵、本居宣長、平田篤胤のいはゆる國學の三大人や、塙保己一などがあらはれて、古文、古語の研究を通して、國體の本義を闡明する機運を作つた。

かくして、漢學系統と、國學系統の二つの尊皇の流れが合流して、漸く實踐運動とならうとする時代に、賴山陽はあらはれたのである。

荷田春滿の歌に

ふみわけよ、大和にはあらぬ唐鳥の跡をみるのみ人の道かは

とあるが、漢學者と云へども、前記の人々は、例へば、光圀公が、史記の伯夷傳を讀んで修史の志を起し、朱子學から出て國體の本義を明かにしたやうに、いづれも和魂漢才の學者であつた。そして山陽もまた漢學出の和魂漢才の士である。山陽の言葉に「六經は漢土の物也、六經の言ふ可き者は漢土の人之を盡くす。而して日本人敢て之を是非す。是れ猶ほ三家村の子弟が都下の演劇を月旦するが如し」とある。

山陽の時代は、勤皇思想も學問的研究から、一歩進んで、實踐期に入つた時代であつて、かの寛政の三奇人と呼ばれた、高山彦九郎、蒲生君平、林子平などの志士の活躍期である。

この國學の外に、洋學卽ち蘭學の勃興がある。洋學と云つても、やはり和魂洋才であり、純粹の洋學といふよりは、漢學や國學と洋學との合流である。洋學の始祖とさへ云はれた新井白石は國學者であり、漢學者であり、青木昆陽は漢學者伊藤東涯の門人である。その後、前野良澤、杉田玄白などがあり、寛政年間には仙臺には大槻玄澤、大阪には緒方洪庵があつた。

オランダを通して西洋の事情に通じたこの洋學者の一派は、幕府の鎖國政策と相容れないものであり、國學は復古の形において、洋學は進取的な形において、いづれも封建思想への反對思想を醸成することとなつた。この點では、一方に鎖國政策をとりながら、將軍吉宗が、洋書の禁を

緩めて蘭學を奬勵したことは、ただその學問の實用價値のみを利用するにあつたとしても、要するに時代とともに暴露された封建制度の內部的矛盾にほかならない。同時に、國民的發展力を阻止するといふことは、歷史に對する冒瀆であつた。漢學であれ國學であれ洋學であれ、苟も學問である以上、共に鎖國の現狀を維持するものでない點は共通であつた。

前記の學者の中、本居宣長が七十二歲で歿したのは、山陽二十二歲の享和元年、高山彥九郎、林子平の歿したのが山陽四歲の寬政五年、蒲生君平の歿したのが山陽三十五歲の文化十一年、塙保己一の歿したのは山陽四十二歲の文政五年、その他、三浦梅園は山陽十歲の時、尾藤二洲は山陽三十二歲の時、古賀精里は山陽三十八歲の時歿して居る。

更に、「大日本史」が出來て宮中に獻上したのは山陽三十一歲の時であり、「群書類從」の出來たのは山陽十五歲、「古事記傳」の出來たのは山陽十九歲の時である。

2、異學禁制と山陽の環境

この他に山陽の年譜の中で、注目すべき一項がある。それは山陽十一歲の寬政二年、「異學の禁」である。

德川幕府は學問政策の結果、次第に自繩自縛の形となり、遂には御用學たる官學の中からさへ、幕府政治を否定しようとする大義名分の說があらはれる結果となつた。江戶幕府の膝許にも徂來學などの一派があり、更に、朝廷の御膝許である京都を中心とする學問復興の機運は漢學、國學ともにますます發展の情勢にあり、然も次第に、實踐運動化しようとする傾向にある。

岡倉天心は、「東洋の理想」の中で、後期德川時代の文運を論じてかう述べてゐる。

「高御座の止まり給うた京都の地は、そのことの故に、德川の規律からは比較的に自由であつた。けだし、將軍たちは、此處では、江戶において、また國內の他の部分においてのやうに、公然と自己の權利を主張することを、敢てしなかつたからである。さういふわけで、此の地は、學者や思想家たちが避難所を求めて雲集するの地となつた。それが、此の地をして、一世紀半のちに、明治維新の槓杆が廻轉することになる支點とさせたのである。」

山陽は江戶に出て天下の學者の間に門戶を張りたいといふ希望を抱いてゐたが、遂にそれは果さず、十八歲の時僅か一年間、それも靑年の客氣のためか、殆ど學問らしいこともせず留つてゐただけで、全生涯を、廣島、京都、大阪に置き、特に京都に居を構へてゐたが、天心のいはゆる「學者や思想家の避難所」としてといふよりは、進んで京都で史筆を揮ひたいといふことが、彼

の積年の宿望であり、事實彼はそこを最後の地とし「京師終焉の志」であつた。

京都に入ると直ちに御所を拜して「三千里外再生の身」と歌ひ「命は君恩に答へまつり骸は親に奉ぜん」と吟ずる彼であつた。

從つて史學を以て尊皇の大義を明かにしようとする賴山陽の立場は、もとより、表面的には幕府の思想政策とは相容れないものである。

寛政二年の異學の禁とは、かかる情勢下にある幕府の思想統制であり、學問の取締令である。そして、異學とはいふまでもなく、御用學卽ち朱子學以外の學問を指したものである。

そしてこの幕府の取締令の出されたのは、思想統制といふ政策もあるが、それは當時の學閥の間の鬪爭もあつたであらう。

とにかく、一代の名政治家、松平定信が、將軍家齊の老中となると、いはゆる學制改革に着手した。當時の日本の最高學府たる昌平黌には、大學頭、林述齋があつたが、定信は、柴野栗山、尾藤二洲、古賀精里のいはゆる寛政の三博士や岡田寒泉を採用して、幕府の御用學の陣營を强化した。そして、寛政二年五月五日公然と異學の禁制を發布したのである。

當時、江戸には山本北山、龜田鵬齋、伊藤藍田、豐島豐州、戸崎淡圖、市江鳴鶴などの異學者

が門戸を張つて朱子學に對抗してゐた。異學の禁止は主として徂來學やこれらの異學者の、今日で云へば自由主義的、個人主義的な言動を統制する爲ではあつたが、當時は全國的に御用學派たる朱子學者の反動的擡頭期であつて、江戸には、松平定信、林述齋はもとより、黑澤雉岡、大塚大助、岡田寒泉、服部栗齋、京都には柴野栗山、大阪の中井竹山、尾藤二洲、備中の西山拙齋、安藝の賴春水、九州には藪孤山、高本紫溟、辛島鹽井、赤崎海門、古賀精理、倉成龍渚、樺島石梁などの朱子學者が、全國的に異學禁制の網を張つてゐたのである。

しかしながら、既に天下の大勢は、漢學も國學も共に反幕的趨向にあり、それに加へて洋學といふ新興の學問も、決して幕府政治と兩立するものではなく、それこそ異學中の異學といふべきものであつた。しかし幕府の異學禁制策は、ただ狹い漢學の繩張爭ひの形となつてかうした學問の大きな流れを堰き止めることは出來なかつた。

とにかく賴山陽の時代は、それが不可能であると否とに關らず、家齊將軍のもとに、大學頭林述齋や、老中松平定信を中心とする御用學者の反動的攻勢時代であり、異學禁制の思想統制時代であつた。文武と云つて夜も寢られぬ時代は少くも寛政の新體制であり、學制の改革期であつた。しかも、幸か不幸か、賴山陽は御用學たる、朱子學者の環境の中に生立つた人である。

まづ學制改革の立役者たる三博士の中、尾藤二洲は山陽の叔母の夫であり、柴野栗山も古賀精里も共に山陽の父、春水の學友である。前記の全國の朱子學者の大部分は岡田寒泉、中井竹山、藪孤山、赤崎海門をはじめ、父春水の友人であり、林述齋や松平定信などもすべて父春水の師友である。祖父亨翁が學者であり、父春水はもとより春風、杏坪といふ叔父が皆朱子學者である。わが浪人山陽は、實に御用官學者の重圍の中に人となつたのである。

しかも、松平定信の異學の禁令に應じて、各藩でも幕府にならつて藩學の思想統制に着手したので、廣島藩でも藩主淺野重晟は文教を奬勵し、山陽の父春水を儒官として藩學校を建築し異學を禁じて學制を改革した。この藩學統制の中心人物は賴春水であり、幕府の學制改革の中心人物は、春水の學友、柴山栗山であつた。春水は幕府の異學禁制よりも前に、「學統論」を著して藩主に異學禁制を進言した人であり、そのため祿三百石をもつて藩の御用學者となり、遂には幕府の學問所の教官にまでなつた官學界の出世學者である。

以上の與へられた山陽の環境からすれば、また山陽がその環境に作られるだけに滿足してゐれば、彼は當然、儒官春水の長男として當然、春水のあとを繼ぎ、藩學の中樞に居り三百石の御用學者として、或はまた幕府の直轄學校たる昌平校の教官として登用されたであらう。現に、昌平

校の三博士などは「三助に三百石は惜しいもの」と諷された位であつたら山陽が幕府の儒官となることは容易であり、恐らく勞せずしも官學界の最高地位は得られたであらう。

しかし、若し山陽が父春水のやうな儒官の地位に安住してゐたとすれば、恐らく、「日本外史」や「日本政記」のやうな、潛かに倒幕思想を盛り込み、人をして勤皇の大義への國民的情熱を燃燒させる程の大事は出來なかつたであらう。後の人をして、明治維新の原動力を培つたものは、「大日本史」と「日本外史」であると云はれるまでに、自己を大成せしめたところに、眞に春水の子たるの實を示現したものであり、それは、賴山陽が春水や栗山と違つた立場にあつたためである。寛政の三博士にせよ、父春水にせよ、眞の意味で朱子學の本旨を生かし、身を持つて朱子學を生かすためには、幕府の儒官や藩儒の地位では不可能であつた。學問に殉ずるか、地位に執着するかは、幕末のすべての學者の懊惱であつたに違ひない。

「大日本史」の修史の大事業をはじめた光圀ももとより朱子學者である。けれども、光圀は十八歳の時、伯夷傳を讀んで、「蹶然として其の高義を慕ふこと有り、卷を撫して歎じて曰く、載籍有らされば、虞夏之友、得て而して見るべからず。史筆に由らずんば、何を以てか後の人をして觀感する所有らしめん、是に於てか、慨然として史を修むるの志を立つ」と云はれるやうに、

かの首陽山に餓死した伯夷の忠誠に感激してから、千古の大事業に成功したのである。

しかも、この「大日本史」に對して限りない敬慕と信仰の熱意を持つたものは、山陽の父、春水である。春水は、三百卷に近い「大日本史」を四部も筆寫し、その一部を藩主に献上した人である。そして儒官として藩主淺野侯に登用された後は、やはり光圀のやうに、修史の事を献策し天明五年八月、やつと藩の許しを得、弟、杏坪も登用されて「鑒古錄」の編纂に着手した。

しかるに、藩の學問所には、朱子學派と古學派との軋轢がはげしく遂に寛政元年、この修史の事業は中絶せねばならなかつた。

當時、十歳であつた山陽は、父春水や叔父杏坪の失望を目のあたり觀、藩儒といふ地位をいかに詛はしく思つたことであらう。しかも、聰明な母梅颸夫人は山陽に醇々と修史が、遠く祖父享翁の遺志であることを說いたのである。もとより、母は山陽に、父や叔父のやうな地位では、到底、修史の事業は出來ないと敎へたのではなかつたが、山陽の首には、後に京都で沒するまで脫身離さぬ「忠孝」二字の護身袋があつた。

この「忠孝」の二字こそ、祖父享翁が手づから書いた初孫への敎訓であつて、山陽が二歳の時祖父との初對面に孫の將來を守るために與へたものである。「忠孝」の由來は遠く文天祥の故事に

溯る。祖父享翁は、垂加流神道の山崎闇齊派の學者であり、文天祥の獄中で作つた「正氣の歌」は水戸に傳承されて水戸學の精神となり、文天祥の大書した「忠孝」の二大字は、闇齊を通して竹原文學に結晶した。享翁の友人であり學友であり闇齊の門人たる唐崎定信は、闇齊から送られた忠孝の二大字を、竹原の五十宮神社の千引石に刻みつけた。かくして「忠孝」の二大字こそ竹原文學の中心となり、この竹原こそ、賴家の發祥地である。享翁が必ず賴家から後世、史家を出したいといふ遺志も、この竹原の地にはぐくまれたものであつた。それが、春水、杏坪、春風といふ三賴を經て、山陽に到つて完全に達成されたものである。かくして、現象的に不孝不忠に見えた山陽は、實質的には確に祖先に答へたものであり、形は廢嫡され脫藩したとしても、實は眞に春水の學統を最高度に繼承し、孝經のいはゆる孝の終りを完うしたのである。

3、布衣山陽の立場

山陽は既に幼時から歷史畫や史書を好み、十三歳の時は、「安んぞ古人に類して、千歳靑史に列するを得ん」と歌ひ、二十歳の時には、

英雄おのづから英雄の知るあり

何ぞ顧みん、天下萬民の議を
一朝、若し風雲の呼ぶあらば
一世を驚かし、萬物を皷せん

と歌つてゐる。彼は歴史か然らずんば死を與へよといふやうに歴史に生きた。いふまでもなく歴史に生きることは、もつとも強く現實に生きることであつた。彼が、時々、俗物と語るを避けて門を閉したのも、現實を歴史に於て熱愛する姿であつた。現實を歴史の中に生きる姿であつた。

彼は、「吾を才子といふは未だ吾を知らざるものなり。よく刻苦すといふ者は吾を知るものなり」といつたが、彼こそ、眞に努力の人であり、刻苦の士であり、獨學の人である。彼の「日本外史」は單に尨大な「大日本史」を簡約したものであると云はれ、その史論は白石の「讀史餘論」の模倣にすぎないと云はれて、その創造力の貧困さを非難されてゐるが、いかに創造力が貧弱であつたとしても、彼ほど「歴史」をもつて人を動かし、千歳にわたつて日本歴史を愛讀させるものはないではないか。歴史を詩にすることは、現代の文學者達の輿論であるが、いまだ「日本外史」を凌駕する作物はあらはれない。かかる力は、最高學府を出たからと云つて出來るものでもなく、西洋に留學したからと云つて生れるものでもない。

當時の最高學府たる昌平校にさへも殆ど學ばず、貧弱な藏書と不便な關所ばかり多い鎖國時代にあつて、これだけの傑作を獨力、獨學を以てなしとげた彼を、創造力の貧困をもつて非難することの出來るものが、はたしてあるであらうか。

彼の歴史的精神は、單に書物の上から學びとつたものではない。祖父享翁から流れて止まぬ歴史的血液の發露であらう。そして書物よりも彼は、生活から學び環境から學んだ。

しかし最初に彼の歴史への針路を指示したものは柴野栗山であると云はれてゐる。山陽の處女作といはれる、「十有三春秋」の詩が、書狀と共に江戸藩邸にある父春水に送られた時、春水はよろこびのあまり、これを栗山に見せると、栗山は大いにその詩に感歎して、「春水子あり、之を教へて實材となさず、乃ち詩人たらしめんとするか、宜しく先づ史を讀み、古今の事を知らしむべし、史は通鑑綱目より始めよ」と云つた。

そこで、春水は、赤崎海門が薩摩に歸國する時、これを山陽に傳へたので、山陽はこれより熱心に通鑑綱目を讀み、ここにはじめて大義名分を本位とする史學學修の基礎が出來た。「通鑑要目」は宋の名臣司馬光の「資治通鑑」を、朱子が綱目を述べた大義名分の書で、五十九卷の書である。十四歳にしてこれを讀了したのであるから、今日の學校で、いろいろな文章の斷片を集め

た一冊の讀本を半年も一年もかかつて讀ませて皇民錬成といふのとは、隔世の感がある。

その後、十八歳の時、江戸に出て栗山に逢つた時、栗山が「通鑑は讀んだか」と聽くと、彼は「盡くは讀むことは出來なかつたが、大意は解つた」と答へると、栗山は「それでよい」と滿足したといふことである。當時は學者は多かつたが、「通鑑要目」を讀んでも、これをいはゆる和魂漢才によつて、その大義名分の大意を把捉することを忘れてゐたのである。

彼は「書後題跋」の中で、詩經に對する批評に、孟子が「萬乘ノ國其君ヲ弑スル者ハ必ズ千乘ノ家ナリ」とあるのを、萬乘の横には足利、千乘の横には細川と書き入れ、「千乘ノ國其君ヲ弑スル者ハ必ズ百乘ノ家ナリ」とあるのは、百乘の横には三好と取入れた。彼が漢學を讀むのは支那の歴史を讀むためではなく、日本歴史を勉強するためであつた。漢學の勉強も彼にとつては、故君の德に答へんがために外ならなかつた。

この大望を達成せんがためには、彼は父春水のやうに二三百石の食祿につながれて、幕府や藩の御用學者となり、學問上爭ふべきことも爭はず、一生を終ることはゆるさなかつた。この大望を達成する非常手段として、彼の遊蕩があり、脫藩があり、廢嫡があり、幽居があつたといふのが、事實であらう。なにしろ關西の大儒春水の長男が、一介の浪人となるがためには、非常の手

段を選ぶ外はなかつた。彼の遊蕩や脫藩などの悉くを、かかる見地から合理化し辯護することは正しくないとしても、とにかく、不良といはれ狂人と云はれた青年山陽の前半生の歩みは、少くも、この大望と身分や環境との相剋から起つた煩悶からの出來事であつたであらう。彼の病弱もまた、さうした難局への心の戰ひから起つた神經衰弱であつたであらう。

とまれ、彼は凡人とは反對に、惠まれ過ぎた環境を脫するために決死的な刻苦を拂つた。有りすぎる境地から無一文の境地に達するために、青年的エネルギーを傾倒した。この意味で彼の不品行や頽廢生活は、赤穗義士の頭梁たる大石義雄のそれを聯想させるものがある。

よく偉人は貧家にあらはれ、家貧にして孝子出づと云はれる。彼は貧家に生れはしなかつたが、その公式を自ら改造し、裸一貫の赤貧の家に、生れ直してから、再出發した。したがつて、二十歳までの札附山陽は、假の山陽であり、更生の山陽こそ、自ら創造した第二の誕生である。儒官春水の長男としての山陽は決して眞の山陽ではなく、脫藩、廢嫡後の布衣山陽こそ、眞實の詩人であり、史家であり獨立の山陽であつた。

彼が二十三歳頃書いたであらうと云はれる、親友梶山與一に與へた告白の手紙の中には、布衣山陽の衷情を吐露してゐる。その中で「此書は書籍一事につきて長口上に及びたる也、其間忌憚

るなく自許太過剛復不遜なる語多し、ただ胷次を傾倒して知己に示さんことを欲す。口をすぼめて面を莊にし、兒女の人に媚る如くして、人に溫謹君子と云はれんことを倖ふ者の如くならんことを欲せざるゆえん也。しかりといへども知己ゆえ我をあやしまずとおもふ也。不知己者にいかでかかる廣言をはかんや」とある通り、これこそ、彼の心底の忌憚なき陳情書といふべきものであらう。

なほ、その中から、次に、少しく摘記して見よう。

「僕足下の悉する所の如く窮愁以來奮然志を立て、古の虞卿司馬子長もしくは柳河東氏の如く、大に其の力を文章に肆にせんと欲す、亦ただ六經四子の文我腸と一樣になり、古聖賢に目擊耳提するが如くにならんと欲するのみ。其の餘は永享以降織豐の交に至る迄の舊聞の放失を罔羅し、異日太史氏の乘錄をまつと云業をなさんと欲す。これまた處士の一大愉快にして麟經の遺意の萬一に副ひ、且つ吾文を無用の物と呼ばるることを免れんか、これまた家翁昔し僕に命じたることあり、語猶耳に在る也。しかし罔羅の業は身自由なるの時をまつ。今その髣髴具體而微なるものをなしおきたり、またそれに續きて心中に浮み出る毎に書付をく也」

「日本の文字盡く彼老漢の奴隷なり」

「伏惟家翁は輔導の倚をうけ吾學を實用して一代の宿望たり、何ぞ翅闔藩衿式のみならんや、家叔は學政を提督し、藝林の魁首として以道自任すれば、ともに雕蟲の技を攻るに及ばず。且官繡あれば中原諸乳臭と角するに暇あらず、唯僕その陶鈞中にあつて一箇の凶頑兒たれども、幸に全首領して以て今に至る。異日境外に棄られれば何の恩か之に如かん。ここに至つてか乃ち瘦臂を奮ひ雕蟲技をもつて天享以降滔々たる學海の狂瀾に精漸の土を塡せんと欲す。近來諸老宿公私ともに並力攻討すでに餘力をのこさず。然るに文字一途に一遺憾あり。僕あえて父兄の編裨に充んと自許すとにはあらざれども、願くは一介の漏誅夫この一技を志して前罪を償はば、又吾天子の一忠臣たらんか、且夫れ膺嗣はすでに人あり、妻妾の累はすでになし、一孥は父母を煩はすも、はや這間に拘々するに及ばず、處士の分には所謂不朽の大業に一身を投ち、小技と人の言ふに任じて、吾聖訓の千言萬句を盡く面命の如くに得るに至つて、かの讒者流の戟道の器なしに道を行ふと云侮を禦ぎ、聊か洛閩家の射雕手たらんと妄にねがふのみ」

「本邦古今にまれなる太平の世に生れあひ、文運大にひらくの會に出で、いまだ眞の文なきは吾儒の羞にあらずや。願くば父兄師友一个狂童に此一途の役を委任し玉はば、いささか家學を

皇張して前の大罪を償んと欲す」

「僕はなんとかんがへてもかの印板呫嗶の徒の如くなることは死してもよくせず。かつ生れ得て骯髒、もと青紫叢中に俯仰する姿にあらず、冥鴻の志日に堅し、溟岳の諸恩は忘れざれども、かの一全言なる者諸子なる者の如くなる身上にて、醇謹を假粧し長老に媚ることはいよいよよくせず、只有體を終始貫き申度」

「冥鴻といへども固より飛揚馮凌を欲するにあらず、養痾て大都に大隱し、隨分謹畏收斂して忌諱に觸るること堅く戒め、弋者に指目せられぬ樣になして生涯を終るのみ」

これは更生し再出發しようとした青年山陽の、轉機の心事を直截に語つたものであつて、彼の素志が父春水や叔父杏坪とは別に、一介の野人となり草莽の臣として、思ふ存分その目的に邁進するにあつたことがわかる。早く結婚して安樂に人生を樂しむなどといふことは、青年山陽の眼中になかつた。

藩儒のやうな地位にあるために、はたすことの出來なかつた父の修史の仕事を、野にあつて大成し、前罪を償はうとしたものであらう。また彼の文章が時代の人心に訴へる力の偉大さは、も

とより彼の布衣の眞實から發するものであつた。職掌柄の理論や食祿のためにするやうな言說は、特に幕府政治が全般的に崩壞した當時には、何等の魅力もなかつた。

かくして、山陽が脫藩して係累のない立場から歷史の本義に徹して思ふさま史論を展開したればこそ、はじめて現實の幕府に氣兼することなく眞に國民大衆の心田に徹した國民の國史を作りあげることが出來たのである。

前揭の陳情書にもあつたやうに、山陽の大望は、「不朽の大業」といはれる文章報國ただ一義あるのみであつた。その爲には田舍の小天地に蹋蹐することを欲せず。「瘦臂を奮ひ雕蟲技をもつて天享以降滔々たる學海の狂瀾」に覇を唱へ、天下第一流の文豪たらうとすることであつた。この大目的の前には一切の小事は意に介するところではなかつた。

一代の文豪となるためには、仕官などは彼の最も嫌ふところであつた。父の後を繼いで廣島藩に仕へなかつた彼が、恩ある菅茶山の勸める福山藩への仕官を拒絕し、茶山の塾の壁に「水凡、山俗、先生頑、弟子愚」といふ四句を書殘して脫走したのは、大望ある彼としては當然であつた。

彼が性來、四角四面な仕官生活に適しなかつたことは、かの「所貴於隱者臥起縱其身、手足與

眼耳用當由已心」の詩に明であるが、菅茶山の仕官の勸めを辭退するための「菅茶山先生に上る、の書」の中には野人の性狀を次のやうに述べてゐる。

「襄天質多病、疎放習をなし、衣裳を整ふる能はず、久坐する能はず、屈伸する能はず、起臥を時とする能はず、從ふて入り從ふて出づる能はず、趦趄囁嚅、不情の言を爲し、以て相應答するに至つては、尤も能はざる所なり。饒ひ少しく忍び、或は恒人と異ならしむるも、久しく之を忍べば、則ち其氣を結蓄し、發洩する所なし。必ず心を喪ひ狂を病み、身家兩つながら敗れ、而して國に益なし。是れ何ぞ仕に取らんや。」

これは必ずしも辭退の爲の誇張ではなく、布衣賴襄の眞姿を、青年時代の苦々しい體驗から識つたものであらう。「抑、人各能あり不能あり、自ら能する所を量り、之を終るを要す。身の朝に列せずと雖も、或は尺の報を圖るに足らん」といふのである。彼は、ただ仕官や立身出世をもつて報國の道と考へてはゐなかつた。

なほ、當時、彼の同情者、築山捧盈に送つた書翰の中にも次のやうなその衷情を披瀝した言葉

がある。

「假令、再び御使ひ遊ばされ下され候義、萬一出來仕り候ても、生得多病弱質の私、少しの事にも耐へかね候故、自身に甚だ覺束なく存じ奉り候、强ひて相勤め候て、却つて事を傷り、不忠不孝を增し候樣の事も計りがたく、且つ又私一家、重疊に官錄を忝く仕り候義ゆえ、一人は浪人仕り候方、天道にも叶ひ申すべく候哉。又、御奉公仕らずとも、御報恩の致し方これなくとも申すべからず、自身に是程の事はたしかに出來申すべしと存じ候事にて、尺寸の報を心懸け居り申候事に御座候。經書講釋等も不得手の義、得手と申しては史學文章に御座候。是にて少々にても御國の御用に相立ち候儀仕りたく、卽ち籠居以來、日本外史と申す武家の記錄二十二卷、著述成就仕り候へども、是は區々なる事にて、引用の書ども不自由、私心に滿ち申さず、愚父壯年の頃より、本朝編年之史、輯め申したき志に御座候處、官事繁多にて十枚ばかり致し置き候ままにて相止め候、私儀幸に隙人に御座候故、父の志を繼ぎ、此の業を成就仕り、日本にて必用の大典とは藝州の書物と人に呼びなし申したく、念願に御座候。此の儀、三都に居申し候て、書物を廣く取集め、多聞の友を多く取り申さずては出來仕らぬことに御座候……

凡そ古より學者の業を成し候地は三都の外はこれなく候、如何なる達人にても田舍藝は用に立ち申さず、闇齋、仁齋、徂徠などの樣の業は、都會ならでは出來申さず、此の如き人々にても左樣に候へば、まして凡人は猶更の事にて、不肖の私に御座候へども、何卒、右の場所へ出で名儒俊才に附合も候はば、學業成就、名を天下に擧げ、末代までも藝州に何某と呼ばれ候はば螢光にて月光を增し候譬にて、少しは御國の光とも申すべく候哉、今生の思ひ出に大場へ罷り出で、正學を以て四方を靡かせ申したき事、生前の念願これに過ぎずと存じ奉り候。」「私奉公出來候身に候へば、本國にて仕用すべき筈の義に御座候。本國にても奉公仕らず候上は、如何樣の御勸めにても、決して此の義仕るべき樣御座なく候旨答へ申し候へば、夫は小國ゆへ嫌ひ候か、小國にても俸祿は隨分よろしき旨申され候故、私は義の字を申し候、義に協ひ申さざる義に候へば、譬へ加賀薩摩より所望に預り候ても、見向きも仕らざる了見に御座候、大恩の本國に尺寸の勞をも盡し申さず。他國にてをめ〳〵と出仕候事、私蓄生に御座候へば然るべく、苟も人にて御座候へば、何の面目にて、天下の人に對し申すべき哉と申し切り候」

まさに青年山陽の意氣あたるべからざるものがあり、しかもそれが單なる空言ではなく「天下

の人に、一人も追付かせ申さざる了簡に御座候」といふ豫言を事實を以て裏書きしたのであつた。

かうして彼が、四面楚歌のうちに、選んだ道は、文字通り荊棘の難路であり、孤軍冒險の放浪生活であつた。そこに百難があつても、「京師終焉の志」に安心立命し、「三千里外再生の身、登々、一たび金鵄を拜して後、命は、君恩に答へまつり、骸は親に奉ぜん」といふのが、草莽の微臣の誓願であつた。

後に京都に出て天下に名を成して後は、仕官はしなかつたが、有栖川宮家にも出入りするやうになつた。かくして山陽の勤王心は一層深められたであらうが、當時でも、やはり野人であつたらしく、宮家用人に宛てた手紙に、「雉一羽を進呈する。自分は此の頃不快のため肉食を絶つて居るので、據無く差上げるのである。若し程經て後、斯樣の品有合せの節は、當方へも御遣し願ひたい」といふ意味のことが書いてあるといふことである。

まことに「鶯や御前に出ても同じ聲」である。

山陽はまた、日野大納言資愛の知遇を得て、時々招かれ、資愛もまた山陽の水面莊を訪ねるといふ程の間柄であつた。日野資愛が山陽の水西莊を訪ねた時、恰も母と叔父杏坪も上京してゐた

のでこの高貴の珍客を迎へて母と叔父とも大に面目を施したことであつた。

日野大納言資愛は文章博士日野資業の後裔であり資業の曾孫範宴は眞宗の開祖親鸞上人であり、日野家は歴史的な名門である。資愛は詩文を好み文人墨客を愛したので、山陽の文名を聞いて親しく語りたいと使を山陽邸に遣はしたのは、文政四年の秋の頃であつた。しかし山陽はどうしても招きに應じなかつた。しかし資愛も決して一回や二回の辭退では止めず遂に是非面會したいといふ使を遣ること四回目に漸く山陽の心も動いたと見えて四回目の使に彼はかう答へた。

「先日から度々の御便、御苦勞の至り、私のやうなものをそれ程まで御懇望に預る段は、ありがたく存ずる。如何にも參殿仕りませう。併し參殿仕るに就ては私の望がある。第一私は田舍者、社杙着けて膝行するなどの事は出來ぬ。第二は行儀よく坐つて、足が痺れても耐へ、欠伸も耐へ、咳も耐へ、我慢して禮をのみする事が出來ぬ。之をお許しあつて、衣服も此のまま、御酒下さる時、家來扱ひなされぬなら、參殿仕る。又一つの望みは酒は伊丹の劔菱、ホロリと苦味のあつて、咽喉を抉るやうなのでなければ飲まぬ、下物(さかな)は琵琶湖で獲た新鮮の魚でなければ食はぬ、之が御承知あらば參殿仕らう」

使も驚いたが、資愛は笑つて劔菱の酒、琵琶湖の新魚を求めて山陽を迎へ大いに談じた。翌

日、日野家から御禮の印にとて鷹紙に包んだ金壹封「金千疋、賴久三郎、日野家」と書いた贈物が屆けられた。山陽は其の書き振りが、日野家を右の方に高く太く書かれ、賴久三郎殿へが左に細く小さく書かれてあるのを見て大いに怒り、「無禮な所爲かな、余は日野家の臣ではない」と投げ出して受取らなかつた。これを聞いて資愛は更に包を改め、我が名を小さく書き直して過失を謝したので、山陽もこれを受けたといふ。まさに文政美談の一席がある。

しかも、その後はますます兩人の交情は蜜に遂に京師の文人墨客をして嫉妬と反感を抱かせるに至つた。そして人々は山陽を無禮者呼ばはりしたので、山陽は「日野公に答ふるの書」を資愛に呈してゐるが、その中でも「野人禮節に習はず」の辯を述べて、「時に同輩を顧視するに皆衣服儼然、濟蹌進退す。しかして裏ひとり頽放、言笑自如。歳時、物を賜ふ。衆皆、門に造り謝を致す。しかも裏肯てせず。常に左右の側、目窃に罵るを致すを恐る。然して閣下、其の野性を諒とし度外を以て之を待つ、悖んで顧みざる所以なり」と特別の知遇を感謝し、「身に寸長の裨補を圖るべき無く、獨り吾が諂はざるの節を全うし、以て其の驕らざるの德を成すあり。之を後代に傳へて以て美談と爲す。或は日野公の夜宴の圖を畫く者あらば、滿堂衣冠の中、亂頭粗服、瓢を携へ童を挈へ、眉を昂げ談笑する者あり。豈に觀るべからんや。」と云ひ、「夫れ閣下と裏等と

文字の飲を爲し、布衣の觀を結ぶ、禮法を講ずるに非るなり、然らざれば無位無爵の匹夫を以て天子の輔相と膝を促し酒を飲む。禮か。」と非難者に答へ、「禮法を簡辨にして野情相待つは文士の常態なり」「襄は野人もと王公に求むるなし。」「則ち閑雲鶴、何の天にか飛ばず、何ぞ必ずしも己の能はざる所を勉め、俯して都人士の爲に學び、天下高人の鄙笑する所と爲らんや」と、あくまで烈々不屈の而衣の生活精神を說いてゐるのである。

「社衤を着けて膝行するを得ず」といふ山陽は、精神的にさうであつたばかりでなく、實に人間的、身體的にも、封建的禮法に不適格であり、全體としての精神構造と身體構造が庶民的であつたと云へる。もとよりそこには彼の病弱さもあつたであらうけれども、刻苦を信條とする彼が、少くもさういふ禮法に自己を刻苦して仕向けてゆかなかつたことは事實である。

彼は自己の主義と希望とを入れない限り、ひとり日野大納言邸に參殿を肯んじなかつたばかりではなく、彼の主義希望を容れて、この天下國家を革新しない限り、天下に參席するをいさぎよしとする人ではなかつた。

山陽精神の何ものであるかを、最も雄辯に語るものに、彼の肖像への自贊の文章がある。これは山陽が死の數日前に、門人大雅堂義亮の描いた師の肖像に、山陽自ら贊したものであるが、す

でに自ら筆をとるの氣力はなく篠崎小竹に代筆させたものである。死ぬまで青年であつた山陽の烈々たる生活精神は、この自贊の中に躍動してゐるやうである。

躬は一室に偃仰して心は百世の得失に關す。
己の蠻鹽を恤へずして人の家國を憂ふ。
文章は腹に滿つれども餓を濟はず。
尺を曲げて尋を直うするは則ち爲さざる所なり。
噫、是れ、何物の迂拙男兒ぞ。
然りと雖もいづくんぞ此の迂拙者を念ふの時なきを知らんや。
此の膝、諸侯に屈せず。聊か故君の德に答ふ。
此の眼、之を群籍に竭し、先人の囑を虛うせず。
此の脚、母の輿に侍し二たび芳山に躋り三たび太湖に棹し、四たび溪澗を上下す。
而して未だ曾て朱頓の門を踵まず。
此の口、殘杯冷炙を餂しとすること能はず。
而して此の手黔黎（人民）の寒餓を援けんと欲するなり。

この絶筆ともいふべき彼の自贊こそ、頻死の山陽が自己の全生涯を顧望した綜合的結論であり、彼の理想像の表現であらう。彼はひたすら、故君の德に答へることに全力をあげた歴史的人物であつて、必ずしも現世に通用することを欲しなかつた。「迂拙男兒」を自任して滿ち足りた傑物であり、彼の膝は決して諸侯に屈せず、手はただ國民大衆の寒餓を援けようといふ正義を把握して動かなかつた。自己の生活を現實に都合よく作り直さうとした者ではなく、歴史卽ち故君の德に從つて作り直さうとし、現代を歴史の原則にひきもどさうとした迂拙男兒であつた。「尺を曲げて尋を直うする」ことは彼の斷じていさぎよしとしないところであり、彼が、千歳青史に列する所以もまたここにあり、布衣山陽の眞面目がそこにある。從つて山陽精神は、百數十年後の今日も、なほ生き生きとして、われわれ國民を鞭つて止まないものである。

彼の文章が一篇成る毎に脛なくして千里を走つた所以もこの烈々たる布衣の精神にあり、かかる無位無官にして優れた歴史家によつて、日本歴史を再檢討し、日本精神の眞姿を表現して貰ひたいといふのは、ひとり賴家三代の宿望であつたばかりではなく、全國民の心田にすでに釀成された民衆的熱望であつた。山陽の「日本外史」は、先人の德に答へるとともに、當時の國民、次代の國民と千載にわたる國民への孝行の書であつた。

山陽の忠孝は、食祿の代償としての忠孝ではなかつた。それのみか、彼はあれ程にもその表現に苦心して幕府の忌諱を豫防したにもかかはらず、全生涯の傑作たる「日本外史」は、深く藏して徒に世人に見せず、或は時々迫害を恐れて、長く嚴島の大聖院寶庫に祕めたこともあつた。「吾が爲にする也。人人の爲にするにあらざる也。己の爲にするものは何ぞ早晩を論ぜんや」といふのであつた。

かくして、そこには山陽の運動もあつたが、遂に文政十年、松平樂翁の求めに應じて「日本外史」を献じたが、その時「布衣賴襄謹み再拜し白す」の書の中にも「野人朴直、所謂、求むるなきの心を以て書を著す。其の簡約を取り、自ら省覽に便す。始め之を公に謀るにあらざるなり」と云ひ、「是を以て拮居二十餘年、之を篋笥に藏め未だ曾て人に示さず。今乃ち閣下の寓目を得て以て信を天下後世に取る、眞に意外の幸なり。襄今日に求むる無しと雖も、しかも千百載に求むる無からず、大賢の鑒識を經るにあらざれば、以て其の傳を保つに足らざるなり」と述べて、限りなき感謝の意を表はしてゐるが、その書の中で、「日本外史」の體をかう說明した。

「甲起りて仆れ以て海宇の沿革を成し、而して必ずしも王室に關せざる者は、我が中世以還の國勢なり。故に實に依り體を創め、以て世變を形はし、其の中、貫くに帝系年號を以つてし以

て條理を表はす。大義の繫る所に至りては、必ず特書を用ゆ。權豪を元帥に厠ゆ成敗に隨ひ次第すと雖も、しかも署題に因りて以て統屬を見る。しかして之が事實を載す、名分截然たり、讀む者自ら能く之を見る。」

かかる史書に對して、かつて幕府の老中であり、將軍吉宗の孫にあたる松平定信が、題辭を與へて天下に推稱したことは、光圀の「大日本史」の修史とともに、德川時代を通じて特筆すべき二大事實であつた。當時は外史を危險思想とするものもあつたが、定信が、親しく全部を讀了して、與へた——題辭は次の通りである。

「おほよそ事を志すに、もらさじとすればわずらはしく、はふけば又要を失ふ。そのほどを得る事はいとかたかるべし、評論するも自己の見出さねば、自ら正課に至りぬべし。さらば朕兆の目に見えることまでも、のがす事なく穩當にして其理をうるになん。これをまたく備へしものはこの日本外史とや云はんと、私かに思へば玆にしるしつ。後の人の論はた如何あらん。(文政十二年正月風月翁)」

今や布衣山陽の「外史」は、天下御免の國民史といふ折紙をつけられ、伯樂を得た千里の馬となつて、濶歩することとなつた。草莽の至誠、天に通ずとでもいふべきか、その後三年にして樂翁は歿したので、三年も遲れればあたら「日本外史」も陽の目を見ないで終るのみか、或は山陽もまた斷罪の憂目を視なければならなかつたかも知れない。これは「至誠天に通ず」とともに、地に通じ、國民の赤誠によつて支持されたのであらう。

青年山陽がはじめて江戸に遊學した頃は、小說家瀧澤馬琴の著書が洛陽の紙價を高めてゐた頃で、山陽もその勸善懲惡の寓意と文章の大衆性とに垂涎したと云はれ、外史が今まで漢文に用ひられなかつた俗語をどしどし取入れるなど、國民文學的な苦心の拂はれてゐるのは、その大衆への普及性をもたしめたものであり、かくしてはじめて、勤皇の大義を萬民の心の奧底にまで透徹させた萬代不易の國民史となつたのである。正しい歷史は、社祢や紋付羽織でなければ出來ないもの、歷史は庶民の近づき難いものといふやうな低俗な常識に低迷してゐたのでは、國體の本義にもとづく大國民運動としての明治維新の展開は見られなかつたであらう。

布衣山陽の精神に徹してこそ、明治維新の歷史的意義がわかり、日本の若返り運動としての眞相を把握することが出來るのである。

今日の日本も、まさに學制改革運動のさ中にあること、寬政、文化の頃に似通ふものがあり、しかも學制改革の道標は、皇民錬成にあり、臣道實踐である。凡そ今日における皇民錬成とは何

か、臣道實踐とは何かは、口頭禪として明瞭であつても、現實には、必ずしも全國民に徹底してゐるものとは云はれない。百年前の漢學者、賴山陽の思想と生活の中に、あらためて、詩よりも美しい日本本來の道を見出すことが出來るではないか。

「日本外史」は、歴史書として完全なものではなく、その批判や修正の論は、世にすでに少いとは云はれない。しかしながら、その文章に於て精神に於て、漢文の日本化、支那思想の日本化の點に於ては、「日本一」の折紙をつけられてゐるやうである。そして、その内容や表現の多少の誤謬や未熟にかかはらず、一君萬民の大義名分を明徴ならしめる力は、千歳不朽のものである。要するに「日本外史」は幕府政治の太平時代に滿足する封建老年の讀本ではなく、斷じて王政維新の革新日本に生きようとする青年の歴史であり、山陽こそ、永久の未來に生きる青年史家であつた。

山陽の熱烈なる勤皇精神と國防精神は、山陽の時代が文化文政の太平時代であつたといふ客觀情勢もあつて、單に著述の上に表現されたにすぎなかつたが、直接には第二の青年山陽たる三樹三郎によつて繼承され、海防に倒幕にはげしい實踐活動となり、父の死後二十八年、小塚原に斬首されるまで、賴家四代にわたる忠誠を完うした。更に間接的には幕末明治維新の原動力とな

り、新興日本建設の精神的基礎となつたのである。

また今日の日本は、現に、學問及び教育の全面にわたる歐米追隨の積弊に惱まされ、それの超克と日本文化の確立のためにあらゆる努力を拂つてゐる時である。しかしながら歐米文化の勢力を脱却して東洋文化を再建するといふことは、口に言はれるほど容易のものではない。それがためには「東洋文化」を見よと世界に誇示するだけの日本的傑作を具體的に提示することが必要である。わが山陽の時代は、國内では「天下様」あるを知つて「天子様」あるを知らざる國民があつたと同じ様に、學問と云へば支那あるを知つて日本のあることを知らない學者が少くなかつた。從つてそこには、今日と同様、日本學の復興を叫ぶ國學者も少くなかつたが、わが山陽が、いはゆる「相撲太郎の膽」を示して、漢文をもつて世界的名文たる「日本外史」を著して日本的國體美を宣揚したことは、千萬言の日本學論にまさるものである。この意味でも、われわれが、賴山陽の日本的性格に學ぶところが少くないであらう。

第三章　教育的評傳

一、環境

1、學問の家

賴山陽は、安藝の國の人であるが、呱々の聲をあげたのは大阪であつた。大阪で生れて廣島で育ち京都を終焉の地とした人で、彼の生活環境は、孟母のいはゆる三遷ではないが、とにかく、彼の短い五十三年の生活は、京都、大阪、廣島といふ關西の三大都市に跨つて營まれた。

この不世出の偉人山陽の生れたのは、今から約百五十年前、安永九年十二月二十七日、この年は皇紀二千四百四十年、恰も光格天皇御卽位の年にあたり、德川第十代將軍家治の治世であつた。父春水はいふまでもなく關西、否全國的に高名な儒者であつたが、當時は大阪に出て、江戸堀北通一丁目に靑山社といふ塾を開いてゐたので、山陽はこの靑山塾で生れたのである。彼の輝

かしい出發は、教育の家、學問の家であり、彼の全人生は學問のための戰ひであり、そして、遂に自分の開いた塾に學問的最後を遂げるまで、彼の人生はどの頁を開いても學問の頁であり、彼の全傳記は、序文から結論まで徹頭徹尾、教育的傳記である。

父の春水は當時、三十五歳、母は靜子といひ二十一歳、父にとつては晩婚の方であつたが、その前年十一月、大阪の學友中井竹山の媒酌で、やはり大阪で醫者であり儒者である飯岡義齋の娘、靜子と結婚したばかりであつた。さうして早くも、最初に生れたのが男子、しかも世界的學者といふ傑作であらうとはもとより知るよしもなかつたであらうが、彼の出生は賴一家にとつて一大光明として祝福された。

山陽の名は襄、字は子成、通稱久太郎、山陽の外に、三十六峰外史、晴埃、里鳥、改亭などの號がある。その幼名「久太郎」は、鄕里の安藝の竹原にある祖父享翁が前もつてつけて送つて來た名であつたが、いよいよ男子出生を聞くと享翁からは初孫を得た喜びの手紙とともに、次の歌を送つて來た。

名づけける、ひさ太郎とも、よびかはす
千世をこめたる、つるのもろごゑ、

いはうぞと、幾久太郎、ひなづると
ともに千歳を、ふるもうれしき、

母靜子の父飯岡義齋からも、黒染の産衣が送られ「ひさかたの天のめぐみにならへよと、色にいはひておくる産衣は」の一首が贈られた。そして山陽の出産披露の宴に集つた春水の知友は、當時大阪の儒者ばかり、片山北海、河野恕齋、圓山應擧、龜井南溟、江村君錫など。彼は全く學問的環境の中に、人生のスタートを切つた。

元來、大阪は新しい日本の經濟的勢力の發祥地であり、當時の大阪は新興町人文學の中心であつた。その文學者仲間の中に、片岡北海の主宰する混沌社があつた。毎月集つては詩文の研究會を開いたが、父春水ははじめ片岡北海の門に入つてゐたので、次第に大阪の學界に名を擧げた。かの寛政の三助と云はれた柴野栗山、尾藤二洲、古賀精里なども混沌社時代の父の交友であつた。春水はかくて二十八歳にして獨立して青山塾を開いてゐるから、山陽に劣らぬ優れた學者であつた。

山陽の先祖は小早川隆景の臣であつたといふから武士であつたが、その子孫がだんだん分れて安藝の國賀茂郡竹原に移り住み、賴家の初代總兵衛は金屋といふ屋號で廻船業を營んでゐたから

武士ではなかつた。二代目彌七郎の時に火事のため農家となつた。その火事のために祖先傳來の系圖なども燒失してしまつた。しかし、かつて小早川隆景に仕へて忠勤を勵んだといふ祖先の名殘として、賴家には大小二刀と槍一筋があつた。

彌七郎の總領彌右衛門の長男が、賴春水の父、卽ち山陽の祖父享翁、名は又千郎であつた。この享翁に至つて、賴家に流れる勤皇の血液は漸くあらはれて來たのである。そして享翁の長男、彌太郎（春水）、三男、松三郎（春風）四男、萬四郎（杏坪）の三人に至つて、三賴の名をあげ、學問の家として廣島藩はもとより關西から全國の學界にまで知られるやうになつた。

山陽の教育的環境としては、父春水はいふまでもないが、祖父享翁と叔父杏坪とは特に、重要なものがある。

享翁は山陽の生れた當時は、七十三歳といふ老人であつたが、少年時代から父母を喪ひ、つぶさに辛苦をなめて一家を立て、學者といふ程ではないが、歌學を京都の馬杉享安や、伊勢の谷川淡齋について歌學を學び、和歌に長じてゐたので、「吾妻紀行」、「芳野紀行」其他の歌集がある。また當時竹原の祠官であり、闇齋派の學者であつて、文天祥の書いた「忠孝」の二大文字を竹原の五十宮神社の千引岩に刻んだ勤皇家唐崎赤齋と懇意であつた。この人も伊勢の闇齋派の學者、

谷川淡齋の門弟である。從つて享翁とは同門の士である。

山陽は數へ年二歳の夏、はじめて父に連れられて鄕里竹原に歸つたが、その時初孫の顏を見た享翁の滿悅はどんなであつたか。十日の間は久太郎を抱いて離さなかつたと云はれる。そして山陽らが大阪に歸る時にあたつて、文天祥に因んで自筆の「忠孝」の二字を初孫の守袋に入れて與へたのである。しかし享翁はもはや寄る年波、山陽四歳の天明三年二月に七十七歳を一期として長逝した。しかし、十日あまりの歸鄕の間に、享翁は春水に、よく久太郎を薫陶し守袋の「忠孝」を教育の根本として大成させよといふことを諄々と說いたのであつた。

父春水も幼少の頃から神童と呼ばれた人で、早くから學問の志を立て、十九歳の時は、泉州境から大阪に出て趙陶齋について書道を修め、歸鄕の後二十一歳でまた大阪に出て、中井竹山の懷德書院や片山北海の混沌社に出入して經學や詩文を學び、安永二年獨立して靑山塾を開いた。從つて大阪はもとよりその名は四方にひろがり、京都の皆川淇園、熊本の藪孤山、鹿兒島の赤崎海門、その他高山彥九郎などとも交りが深かつた。

しかし、春水ははじめて久太郎を連れて歸鄕した時、自ら寫した「大日本史」を藩主淺野重晟公に献上したことから、十二月には藩學振興のため正式に藩儒として三十人扶持で召抱へられる

こととなつたので、翌年五月には靑山塾を閉ぢて廣島に歸つた。更にその翌年江戸詰を命ぜられたので、その時四歳の山陽と妻靜子とは、大阪の外祖父の家に預けることとなり、山陽はそれから六歳の春まで大阪に居て外祖父義齋の教育を受けたが、三年にして父春水が歸國することとなつて再び廣島に歸つた。しかし春水は更に江戸詰を拜命したので、その後數年はまた母の教育に委ねられた。從つて幼年時代の山陽の教育には、父春水よりも、外祖父や母の感化が大きかつたのである。

かうして父の轉々する間に、仕官といふものに對して、子供心にも好感は持たなかつたであらうし、後に山陽が二十七歳、元服式に父とともにはじめて登城した時、尊敬してゐた父が、藩侯や重臣の前で低頭平身してゐる姿を見て、遂に彼が「社祢の膝行」を嫌ひ、「此膝諸侯に屈せず」の人となり、斷じて一藩の儒官にはなるまいと誓つた心情もわかるでのである。

母の父であり、彼が三年間その膝下で教育された外祖父、飯岡義齋は醫者であつたが、はじめ鈴木貞齋に學び、後に石田梅巖の提唱した心學を學び、終りは朱子學を以つて門戸を張つた學者である。春水が大阪から妻子を連れて廣島に歸藩したかと思ふと、またも江戸詰の命に接して再び、妻子二人を殘して出發することとなつた時、義齋が春水を勵ました手紙の中に、彼の子女教

育の精神があらはれてゐる。

「若しまた今般、他の儒者交代の事に及び候はば、扨々不面目至極なるべきに、今度の仕合、何か入れざる、他事を顧みるべからず、トント討死と決定せずして叶はざる事に御座候、靜へも其分御申聞下さるべく候、彼はなほ若年、幼兒を携へ、遠境夫親に索居、心細く存ずべく候段は不愍に候へども、隨分、本分に憂死するの事と覺悟遊ばさるべき事に候、然し情態泰然の女丈夫なりと仰せ聞け下され、一しほ大安心、之に過ぎず候、凡常に稼して安樂ならんよりは、豪傑に配して苦死せんは相勝る事萬々、なほこれに伏して、節操高潔、賢明貞烈、女中の龜鑑ともなり、父が名を揚げ、世に顯はれくれなば、誠に死すとも生けるが如く、大歡喜、恨みあるべからず、家に彌太郎が妻かな、義齋が女なる哉といはれてくれなば、大貞大孝、此の上なく仕合に存じ候」

との他に別に、

「靜、汝は分に過ぎたる夫を持ちたるぞよ、世間なみの根性、グンニヤリとした、きげんでは、キツト、トントすまぬぞよと御申聞下され候」

また、靜子に與へた手紙には更に醇々と婦道の眞諦を語つてゐる。それによると

「住馴れし親里を離れ、遠き田舍にあるも、只一人の夫を賴りにして在ることなるに、それだに又遠く離れ只ひとりおさな子を育てける事、賴も力もなく、いかばかりのなげき、かなしみ、思ひつづるも、はてしなし」と同情し「しかれども、ここに、につちも、さつちもゆかぬ人の道といふものありて、そのせまりつめたる中に、凜々たる道義立てずば、びくともせず、ころりともせぬものなるを、能々明らめ悟り、能くそだてやしなひ、堅く執り守るべし」と教へ、更に次のやうに勵ましてゐる。

「あつぱれ、手がら、剛のものよ、賢女よ、義齋が子、彌太郎が妻、久太郎が母よ、婦人のががみよ、手本よと、ながき世までの、わらひほまれのわかれを、わするまじきものなり。……ぐにやぐにやとなきづら、人に見すべからず、みれんな事、人に聞かすべからず、秋の霜のおかすべからざるごとく、いんぜんと、すずしく立あがるべし。かりにも、よわきなみだ、もろき根性あるべからず。心で心をとりなほし、氣で氣をひきたて、うれひの思あらば、歌うて心を散ずべし。くよくよむねにたむべからず。ずべらぼんのぼんと心をやるべし。うき事よ、よに有程の、ならひぞと、おもひなかして、心はるけよ」

かうした義齋の娘であるだけに、山陽の母、靜子は、卽ち梅颸夫人として知られた賢妻良母の

典型であつた。嚴格な漢學者の家に妹直子とともに育てられ、和漢の學をはじめ和歌、書道、琴、裁縫などの教養のある女性であつた。山陽に嫁してから、山陽の外に、お十、大二郎、士郎の三男一女を産んだが、大二郎、士郎は共に夭折したので、殘る久太郎とお十を愛育した。梅颸夫人は、結婚後、夫春水が江戸から歸つて親子三人で廣島に歸つた天明五年五月十三日から、主婦としての日記をつけはじめ、遂に天保十四年、八十四歳までの長い間、殆ど一日も怠らなかつた。これが山陽研究にも當時の歴史の研究にも極めて重要な記錄となつてゐる。この一事を以てしても、梅颸夫人の賢夫人たることは、立證されるであらう。

この外、父春水とともに藩の儒官である叔父の杏坪も、むしろ父春水以上の山陽の理解者であり保護者であり、教育者であつた。杏坪がいかに山陽を愛したかは、山陽五歳、母と共に外祖、父の家に預けられてゐた頃、春水とともに江戸詰となつてゐた杏坪が、その歸途、大阪に立寄つた頃の日記「甲辰紀行」の端にもあらはれてゐる。卽ちその天明四月二十八日の日記には、次のやうな記事がある。

「たびたび招宴もあり、十日あまりゐたりしが、ひまなかりき。しかし子琴はじめ死うせたる人おほく、混沌社ももとにかはれり。

しけりつる入江のあしもうらかれて、なにはわたりの秋ぞさびしき

敬直もみやこより下りたれば、二十八日夕べ、またうちつれて西の宮にと立出づる。澹寧老人（義齋のこと）はじめなごりを惜み玉ふ。家姪（久太郎のこと）ことし五歳なり、此たびにて離合四たびになれぬ、ことしはちゑややつきぬれば、いとわかれを惜むさまに見えたり、予もここまで歸りたりば、故郷のごとく覺え侍りしに、某濱より篷もなきに、舟にのれば浪の枕うちもねられず、星のひかりいとあかく、露ころもをうるほせり、蒲團かりて夜さむをしのぎぬ」

混沌社の篠崎小竹が享翁の子三頼を評して「春水は四角、春風は圓く、杏坪は三角」と言つたといふが、三人ともに優れた人物であつた。仲の春風も大阪に出て名醫林見宜について醫術を學び、尾藤二洲について儒學を學んだ人であつたが、この人は竹原に止つて醫を開業した。杏坪はやはり春水、春風と同じく儒者であつて、文學的天分は、兄春水以上であるとさへ云はれた人、春水と共に廣島藩に召され、儒者としても名高く、郡宰ともなつた人である。杏坪は三人の中で、生涯を通じて最も有力な山陽の愛護者でありまた、激勵者でもあつた。

この外、「學問の家」ともいふべき頼家には、祖父、父、叔父をめぐる學者關係の交渉が深く、山陽はまさに文化文政期の關西學界を搖籠として人生にスタートした幸運兒であつた。

2、家庭早教育

家庭が教育的に學問的に環境豐富であるといふことは、子供の人物錬成にとつては第一の要素である。山陽を一代の文豪たらしめたものは、山陽自身の自己教育であるとともにその周圍の一家を擧げての學問精神であつた。ともすれば人は「わが子」を平凡視し、自分以下に評價し勝ちである。吾が子の性情や天分の如何にかかはらず、それをよりよき次代の自己として敬愛し、祖先崇拜と同時に子孫崇拜の心のないところに、人類の發展的な歴史はない。どんな子供でも伸ばせば天まで伸びる可能性あるとすることが、家庭教育の第一義である。子供は吾が子といふよりは國家の子であると、よく云はれるが、それはまた親の子に對する國家的な道德的立場をあらはしたものであらう。この點では、山陽の家庭教育が、賴家總がかりの教育であづたことは、彼の發展的生涯を豫約したものであつた。子は親にとつていつも驚異でなければならない。

山陽が生れた時、賴家一家のよろこびは尋常一樣のものではなかつた。父春水が、享翁の豫めつけた「久太郎」の命名した時の詩に曰く、

知らず吉夢、是れ何の祥ぞ。

忽ち喜ぶ、喤々、弄璋を報ずるを。
家君、占斷す、熊羆の兆。
能く爲す預名久太郎、

また春水の歿後はじめてその筐底から發見された詩に次のやうなものがある。

新鶯、兒襄に似る
出谷の新鶯、聽くに始めて奇なり、
春に遷る汝、誰が期に向はんと欲す、
好音、たとひ、凡禽に妒まるとも、
嬌舌は休めよ、俗耳の嬉となるを、
雨を柳陰に著け、飛んで未だ遠からず、
花を枕上に催し、喚ぶ何ぞ遲き、
頭を回せば岑蔚、上を知るべし、
何ぞ必ずしも、林に上り一枝を求めん。

恰も山陽の生涯を豫言するやうに、傲骨稜々、苟も世間に媚びるな、また妄りに利達を求めて

官の高きを羨んではならぬといふ寓意をこめてあつた。世間並以上の人物を作るには、世間並以上の家庭教育が必要である。そして、わが子を過大評價しても、斷じて過小評價してはならないのである。

幼時には父春水は、江戸藩邸で妻の手紙で愛兒の成長する樣子を聞いて、よろこぶだけで、直接、教育する機會は少かつたが、再度、江戸勤のため上京の時には、留守中の心得として妻に次の五箇條を書き示してあつた。

祖父母兩御神位、每朝、久兒拜禮之事、
久兒、保護之事、
小學、復讀之事、
詩文帖、寫字之事、
久兒、守り、忠孝ノ二文字、幷外祖父樣御染筆とも大切に可仕候事、

幼年時代の家庭教育の擔當者であつた、賢母梅颸夫人は、この夫から示された教育方針を、まめまめしく實行したことは云ふまでもない。この夫人の應援者には外祖父があり叔父の杏坪があつた。

外祖父義齋は、山陽親子が大阪から廣島に歸り去つた時は、孫いとしさに惱まされたが、

「久太郎、彌壯康之段、是第一の大事、一別後、日々存じ暮し、早々面聲見聞し度、頻に存じ暮し……却て此節大鐵肝心に鬼の如く相成居り候。手前の事は、ちつとも御氣遣下さるまじく候」

と自ら鬼となつて孫の生長を凝視した。そして、

「ゑほん少しつかはし候……うたひ本、つかはしたく、たづね候へども、今はなく候、あとよりまゐらすべく候……弓は、いかがにて候や」

などといふ手紙にも、この老翁の孫への心くばりの程があらはれてゐる。

賢夫人梅颸は、晝夜をわかたず山陽の愛育に心をくだき、かの天體運動の說の場合のやうに、どんな小さな問題でも山陽のためには叮寧に話してやるのであつた。夜は針仕事をしながら、夫の江戸土產の義經の八艘飛びや淸正の虎を討つ圖のやうな武者繪を見せては、歷史談を面白く話してきかせた。梅颸がいかに山陽の教育に眞劍であつたかは、天明五年五月から始めた日記に物語られてゐる。

例へば、五月廿七日の日記には、久留米藩主が廣島通行の時は山陽をつれて行列を拜見したと

か、七月十五日の記事には「こよひ、お盆の精靈送を見物に出た山陽は、どこからか子犬を持歸り「新白」と呼んで戯れてゐた」とか、病氣の事、衣服の事、細大洩さず記されてゐる。

十二日「月快晴、久太、久しく起居る」とか十七日「午後より林へ招かれ、夜ふけて歸る、久太郎、少しくいねて、初終、起居る」とか、昨日の灸當りで山陽が不食であるとかいふ細かな記事の中に、いかに梅颸の子を思ひ教育に熱心であつたかがあらはれてゐる。

山陽七歳の時、天明六年の元旦試筆には、すでに唐詩の一句、「梅柳度江長」の五字を書き、父春水がこれを表裝して「久太郎七歳書」と箱書して後日の記念にした。

そして正式に教科書による教育をはじめたのも、この年で、正月十一日、新年吉例の開講日に叔父杏坪の家に通學して「大學」を開いたのである。同時に大阪の外祖父からはお年玉とともに、大學、中庸、論語、孟子が贈られ、江戸の父からは源義經や楠公の武者繪が贈られ、彼は盛んにそれを模寫した。

山陽がはじめて手紙を書いたのは、八歳の時、病氣中に江戸の父に宛てて、御歸りはいつ頃になりますかといふ意味のものであつたが、母は、七歳の冬に、外祖父義齋への手紙に表書だけ「久太郎」と山陽に書かせてゐる。これを見た外祖父は喜んで、

「表書の書狀賜り、扨々親の子ほど有て、見事にて何々長々の消息より、嬉しく打ながめ申候」

と「久太郎どの」宛の手紙を書いた。

また、十一月廿六日、江戸の春水から義齋への手紙に「久太郎事、隨分無事、怪しからずあばれ、叔父もこまり候申越、如何仕候哉。繪を格別相好み候ゆゑ、何事も繪本の外、入用無之と申事にて候「大學」も近日に卒業の旨。相聞え申候」とあるから、この年の冬には、すでに「大學」の素讀を終つたことがわかる。

家庭が教育的に熱心であるといふことは、その子の生長にとつて極めてよろこぶべき事ではあるが、その半面にはまた「あまりに教育的」であるがために警戒すべき點も少くはない。山陽の場合にもたしかに、さうした兩面があつた。

山陽の家庭が教育的であつたことは、先づその早教育となり、彼はすでに五歳の頃から讀み書きを母に教へられたのである。なにしろ時世は蜀山人のいはゆる「文武と云つて夜もねられず」といふ時代であり、武士にあらざるものも「學問」といふものによつては、人間としての新しい生活が開かれるといふ時代精神が、到るところに勃興した時のことである。實際、文化文政時代

といふ、太平時代には戰功によつて立身出世をするといふことはなく、現に山陽の父、春水も杏坪も、ともに學問をもつて藩に召抱へられたやうに、學問こそこの文藝復興期の立身の道であり、「文士」といふのは、まさに學問のさむらひの意味であつた。

江木鰐水の「賴山陽先生行狀記」には、天體運動の說がある。

「甫めて六歲、忽ち、母夫人に問ふて曰く、天とは如何なる物ぞと。母曰く、旋轉して止まず、彼の如きのみ。師遽かに庭に下り、天を仰ぎて嘆じて曰く、不思議なるかなと、啼泣すること半時許り」

しかし、これははたして事實であつたかどうかまだはつきりしないやうであるが、坂本箕山のいふやうに、山陽の生れた當時は、天變地異が相ついで起つたりした世相から、六歲にして既に天に向つて疑問と驚異の眼を向けたのも不思議ではあるまい。しかしまた一面から考へれば、あまりに教育的であり學問的空氣の濃厚な家庭の粗撲な早教育は、子供の生活を直ちに大人の縮圖たらしめる危險があり、かくして子供をして神經過敏たらしめ、また神經衰弱に陷らしめる危險が少くない。

山陽の幼時も、それがため一種の神經衰弱となり病弱に餘儀なくされた。六歲にして天を仰い

で啼泣したといふやうな說も、神經衰弱的な發作と見られないこともない。

なほ山陽七歲の時は、かの「家君返らず唯麥歸る」といふ詩をはじめて作つたといふ記錄がある。久太郎が女中をつれて江戶から歸國する父を迎へに廣島市外の松原口に行つた時の詩で、父は歸らず父かと思つたのは、麥の束を背にした農夫であつたといふ童謠風の詩であるが、これが一種感傷的な天才詩人山陽の早熟な發芽であつた。

生涯を通じて彼は才子多病に惱まされ、病のために斃れたのであつたが、幼少の頃から病弱であつた。家庭教育の罪とばかりは云へないとしても、主として痞癖のために惱まされた。痞癖はわが儘病でもあり子供の神經衰弱と云ふことができるであらう。

山陽研究家、木崎好尙氏は、「その肉體の弱々しさは、母梅颸の日記が仔細にそれを物語つてゐる。母はこの兒の壽命の上に、その五十三歲といふ壽命は、とても左樣に豫期してゐなかつた。癇癖といひ鬱症といひ、眼病下痢の頻發はまだしも一時的として、これを除外してもその神經系の宿痾は、名醫の匙にも加減はむづかしかつたであらう。或る時は無言のまま日を送り、又それに反撥して焦燥の氣分が動き、他人の力に何うすることも出來ないと共に、自分自身、その落ちつきを求め得なかつたであらう」と、幼時の山陽について述べてゐるが、これはやはり、あ

まりにも教育的な空氣の濃厚すぎる家庭に育つたものに特有の病狀であらう。

早教育はあくまで科學的、計畫的なものであり、冷靜なプランによつて行はれねばならない。

單に親の溺愛や焦慮のための早教育は、心身ともに子供を不健康ならしめることが多い。

「九つの春に、重い疱瘡に惱みて、やつと神送りのあと、連日の介抱疲れを、母が久方振りに琴をかき鳴らせてゐたそばへ寄り、父春水に江戸から送つてもらうた獨樂をまはしたのも、ただのこどもと變つてはゐなかつた。

その年（山陽八歳）の秋、母に連れられて、外祖父飯岡義齋へ見參の爲、海路、大阪へ向ひ兵庫に着いて「晝夜に四十度ばかり」も下痢したのは、健康ならぬ身の、船中、逆風にさいなまれての惱みも、さる事ながら、それよりも母を困らせたのは、歸國出立の際、風待の船の中にて、「猶難波はなれがたしや、終日よゝとなく」兒のあしらひにはより以上母は困つたであらう」

これも木崎氏の文章であるが、病弱で感傷的な山陽の幼時は、凡そかうしたものであつた。生れて間もなく大阪、廣島などと轉々と居を變へた生活も、幼兒のかよはい神經を動搖させたであらうし、今日で云へば大阪から廣島へは陸路も船路も簡單であるが、當時の幼稚な交通では、子

供にとつては非常な出來事であり容易ならざる難所であつたであらう。山陽九歳の時、天明八年の「山陽日譜」には次のやうにその病弱の記錄で滿されてゐる。

三月十二日　晝頃より脚痛（是り先、かんぺきの兆あり）
三月十三日　熱あり、林堅良診療、
三月十四日　曉、かんぺきを發す。午後ひきつけ二回、
三月十五日　下痢、虫下る、疱瘡、
三月十六日　下痢
三月十七日　下痢、虫、
三月十八日　下痢
三月廿一日　顏面かせる、
三月廿三日　ささ湯ひき初め、神送り、內祝、杏坪妻里方が家より繪本を贈り來る、
三月廿四日　手足かせる。夜半、春風、竹原より見舞、
三月廿六日　右脚少しくはれる。夜半、春風歸船、
三月廿七日　脚痛少し、

三月廿八日　顔の痘ふたとる、
四月五日　終日、繪かき遊ぶ、
四月七日　顔の痘、かは落ち、
四月十日　浴湯、
四月十三日　髮とく、
四月十四日　春風より梅颸へ手紙――山陽の全快を祝し、妻順子より、衣がへの單物を贈り來る、
四月廿五日　梅颸に伴はれ、林主治醫其の他へ禮廻り、
四月廿八日　服藥本日限り、
五月十三日　春水下番、歸藩、岩鼻へ出迎、
六月十日　夜、神邊の菅茶山へ嚴嶋行の途、藤井暮庵同伴來訪の席上に侍す。
六月十三日　夜、吐瀉、林堅良、診療、
六月廿六日　全快、
七月二日　下痢、

七月三日　快方、
七月廿五日　梅颸に伴はれ、大阪上り發程、
八月廿七日　着阪
九月　日　歸藩
九月十五日　春水、上番發程、
十月九日　灸治、
十月十六日　顔少し怪我、

なほ當時の梅颸日記には更に委しく病狀を記してある。

三月十二日　晴、久太郎、晝頃より足いたむよし申す、ねつありとは心づかず。
十三日　晴、久太郎、熱あり、林に藥賴む、八つ過よりねる、夜、林見舞、ふり藥調合、曉、例のかんぺきのきみ、朝迄兩度なり。
十四日　晴、久太郎、同じ事、朝飯、やき飯ちいさき、六つ未の刻過よりふさぎ、兩度後のは至りてかろし、水少しはく、晝飯、茶漬少しづつ二
十五日　晴、今曉より朝迄兩度水瀉、朝茶漬少し、一椀、晝やき飯小き二つ、ゆばかり茶

漬一椀、少しなり、夜に入り水瀉、虫一つ通ず、夜半頃、八つ頃、兩度水瀉、又虫一つ下る、今朝より痘見え初むる、夜、林宿る我、藤介、夜起居る、安部夜半過迄居る

十六日　晴、朝飯茶漬一口程、朝兩度瀉あり、前は少し、暮方一度、茶漬少しづつ二つ、晝過、晩方茶漬二つ、ならづけ茶なり、林歸る、うにかうる二匁包一ぷく半用ゐる、安部、夜半過頃迄居る、其後くめ曉迄起き居る、

十七日　小雨、朝、茶漬一つ、少しなり、瀉あり、虫二つ下る、晝時分、寒晒みそにて煮汁少しづつ三度寒晒小き三つ計り進む。夜ふけてかゆ一つ、はし計りにて進まず、夜、きげんあしし、藥いやがり一ぷく許り用ゐる、うにかうる三匁、林三度見舞、夜、安部九つ過迄居る、藤介、朝七つ前迄居る、久米、りき其後起居る、

この病氣は前の日譜にあるやうに大體、九歳の時に全快したが、十歳になつてからもやはり、二月廿四日の日譜には「灸治」の記事がある、またその頃、過度の讀書のために眼病となつたので竹原の叔父春風の投藥で癒つたが、その後は讀書を禁じられた。しかるにこの禁を破つて、夜半、行燈に着物をかぶせて讀書してゐたのを母に發見されて、訓戒されたこともあつた。

また母は山陽の不健康を憂慮して、早くも九歳で藩の用人築山捧盈の家に入門して、武術の稽

古をさせた。その年の十月廿四日には長刀稽古初、同廿七日には居合稽古初めがあつた。

あまりにも、教育的で愛の過剰の中に育つた山陽には、貧家に育つた偉人とは違つて、却つてさうした環境豐富との戰ひが必要であつた。家族の愛を殆ど獨占して育つた彼が、生涯を通じて我が儘であり、獨善的な性格となつたのも、そのためであつた。

しかし、彼は少年から青年へと、よくその環境と戰つて、自立心、獨立心を培ふことが出來たのである。彼は自ら「我を才子と謂ふは、未だ我を悉さざる者なり、我をよく刻苦すると謂ふこそ眞に我を知るなり」と云つたやうに、この環境の微溫湯の中の小成に安んずることなく着々、刻苦して新しい生活へと進んで行つたのである。

二、立志時代

1、立志教育

今日の學校教育と山陽時代の教育との形式上の相違の一つは、早教育である。山陽時代には教